OKADAMACHI

松本市岡田町遺跡II

—緊急発掘調査報告書—

1995.3

長野県松本市教育委員会

序

松本市の北部に位置する岡田地区は、開発に伴う発掘調査が幾度となく行われ、多くの遺跡が分布していることが知られておりました。このたび計画された事業は松本市岡田運動広場建設で、平成３年度に県営ほ場整備に伴い発掘調査を行った岡田町遺跡の隣地に当たります。そこで、同遺跡の埋蔵文化財保護を図るため、市教育委員会が第２次発掘調査を実施し、記録保存を行うことになりました。

調査は市教委の委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団によって組織された調査団が、平成５年７月から同年11月にわたって行いました。作業は夏暑く大変でしたが、参加者の皆様の御尽力により無事終了することができました。その結果、奈良・平安時代の住居址37軒、建物址18棟のほか多くの遺構と、同時期の土器などを得て、大きな成果を収めました。過去の調査と合わせて地域の歴史解明に役立つものと思います。

しかしながら開発事業に先立って行われる発掘調査は記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実であります。私たちの生活が豊かになるための開発とそれによって失われる歴史遺産という矛盾の中で、文化財保護に携わるものの苦悩は絶えません。本書を通じて、文化財保護へのご理解を深めていたいただければ、この上なく幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘作業にご協力を頂いた参加者の皆様、また調査の実施に際して、多大な御理解を頂いた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成７年３月

松本市教育委員会　教育長　守屋　立秋

例　言

1　本書は、平成５年７月14日から11月18日にわたり実施された長野県松本市岡田に所在する岡田町遺跡の第Ⅱ次緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は、松本市岡田運動広場建設事業に伴う緊急発掘調査であり、松本市教育委員会が実施した。

3　発掘調査および本書の作成は松本市より委託を受けた(財)松本市教育文化振興財団が行った。

4　本書の執筆・作成は、第１章：事務局、第２章：森義直、第３章第２節１：村田昇司、竹内靖長、第３章第３節３・４・５・７：三村竜一、６：関澤聡、その他の項目を竹内靖長が担当した。

5　本書作成にあたっての作業分担と協力者は次の通りである。

遺物洗浄：内澤紀代子、竹平悦子、洞沢文江

遺物復原：五十嵐周子、内田和子、大角けさ子、村松恵美子

遺物実測：石合英子、大城よしの、柴　秀毅、竹内靖長、竹原久子、林　和子、平出貴史、松尾明恵、MIN AUNG THWE、村田昇司

トレース：開鳴八重子、竹原久子、松尾明恵

遺構図整理・図版作成・一覧表作成：赤羽包子

写真撮影：宮嶋洋一（遺物）、村田昇司（遺構）

6　本書作成にあたり、次の方々から御教示を頂いた。

桐原　健、倉科明正、直井雅尚、樋口昇一、森　義直

7　本書の中で使用した遺構名の省略語は次の通りである。

竪穴住居址→住、掘立柱建物址→建、溝址→溝、土坑→土、ピット→P

例：第4001号住居址→4001住、第4002号建物址→4002建、第4003号溝址→4003溝、第4004号土坑→4004土、第4005号ピット→P4005（ただし、住居址に伴うピットはP_1）

8　土層の名称については、以下のように数字とアルファベットを用いて記号化している。

①　土色

1	褐色土	6	黄褐色土	10	灰色土	16	黄色土	20	焼土
2	暗褐色土	7	茶褐色土	11	暗灰色土	17	暗黄褐色土	21	砂層
3	黒褐色土	8	灰褐色土	12	黒灰色土	18	暗茶褐色土	22	砂礫層
4	明褐色土	9	橙褐色土	13	赤灰色土				
5	赤褐色土			14	黄灰色土	19	黒色土		
				15	青灰色土				

②　混入物

礫		焼土		炭化物		土　粒		土　塊		砂粒	
A	小礫	C	焼土粒	E	炭化物粒	H	黄色土粒	L	黄色土塊	P	砂粒
B	礫	D	焼土塊	F	炭化物塊	I	黄褐色土粒	M	黄褐色土塊		
				G	炭化材	J	橙褐色土粒	N	橙褐色土塊		
						K	茶褐色土粒	O	茶褐色土塊		

③　〈混入物の量〉　　〈特徴〉

a　微量　　b　少量　　c　多量　　d　砂質　　e　粘質

例）基本土色が黒褐色で黄色土粒が多量、焼土粒が少量、砂粒が混入している場合は……3（Hc、Cb、P）

9　本調査に関する出土遺物及び測量・実測図類は松本市教育委員会が保管している。

目　次

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経緯……1

第２節　調査体制……1

第２章　遺跡の立地と地形地質……2

第３章　調査結果

第１節　調査の概要……4

第２節　遺構

１．竪穴住居址……5

２．掘立柱建物址……14

３．柵址……17

４．土坑……17

５．焼土面……18

６．カマド状特殊遺構……18

７．溝址……18

８．古墳状地形の調査（旧・中島古墳）……19

第３節　遺物

１．土器・陶器……20

２．円面硯……22

３．瓦……22

４．瓦塔……22

５．土製品……22

６．金属製品……23

７．石器……24

第４章　調査のまとめ……26

挿図1　遺跡の位置

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経緯

市内各所で地域のスポーツ振興の拠点として多目的広場の造成が始まり、岡田地区では岡田町に本郷地区と共有する多目的グランドの建設が計画された。予定地はこの計画のため、平成３年度県営ほ場整備に伴い発掘を行った調査地からはずれた場所である。今回は岡田町遺跡の第２次調査として、工事面積約10,000㎡について発掘し、記録保存を図ることになった。

第２節　調査体制

調査団長　守屋立秋

調査担当者　竹内靖長、村田昇司（考古博物館）

調　査　員　佐々木明、宮島洋一、百瀬忠幸

協　力　者　青木雅志、青木陽子、赤羽包子、赤羽森栄、秋山郁子、浅井信興、浅輪敬二、飯田三男、五十嵐周子、石井脩二、石川末四郎、庵原火曜、今村友紀、植田平、臼井秀明、内澤紀代子、内田和子、遠藤賢二、大崎悦正、大沢ちか子、大城よしの、大角けさ子、太田千尋、大谷成嘉、大月一丸、大月八十喜、大野修、岡部俊顕、岡村行夫、開嶋八重子、香取朋代、川越志洋、神田英次、神田徹、木戸岡平八郎、金京美、久保真由美、久保田登子、小池愛子、小池直人、興喜義、小島茂富、小林隆、小松正子、近藤高史、近藤忠美、斉藤政雄、坂下義視、坂口ふみ代、佐々木保二、芝村龍太、芝山孝徳、瀬川長廣、関敦志、瀧澤千尋、瀧澤正行、田口吉重、竹内里美、武田睦恵、竹平悦子、田多井亘、張耿明、鶴川登、寺島貞友、遠山享史、戸田もえ子、鳥羽みゆき、中村恵子、中村次男、中村安雄、根岸功、野村愛子、深井美登利、深井やすの、藤井源吾、藤井マツエ、藤井道明、布山洋、本澤香、増澤治、松本洋子、丸茂新、丸山順一、丸山長彦、萬川晶子、三浦祐成、三沢元太郎、道浦久美子、宮田美智子、MIN AUNG THWE、甕國成、百瀬二三子、百瀬義友、矢崎寛子、柳沢孝子、山下俊輔、山田英之、吉江園子、吉江孝子、吉沢克彦、吉田勝、米山禎興、林立萍、林嵐

事務局

市教育委員会：島村昌代（社会教育課長～H6.3）、岩淵世紀（文化課長H6.4～）、木下雅文（課長補佐）、窪田雅之（主任）

（財）松本市教育文化振興財団

事務局：大池光（事務局長）、牟禮弘（局次長）、青木孝文（～H6.3）、上條恒嗣（H6.4～9）（次長補佐）、考古博物館：熊谷康治（館長）、松澤憲一（主査）、木下守（～H5.3）、古幡昌史（H5.4～）、久保田剛、遠藤守（主事）、藤原美智子（～H6.3）、秋山桂子（H6.4～）

第２章　遺跡の立地と地形地質

岡田町遺跡Ｅ地区の地形・地質

本E地区を含む女鳥羽川流域の地形・地質に関する概説は、既刊の報告書を参照されたい。

今回発掘のE地区は、女鳥羽川扇状地の第２段丘面の上に、矢作方面からの沢で押し出された崖錐状の堆積物が載って原地形ができ、その後、女鳥羽川が伊深付近で流路を西に変えて第２段丘面を流れたとき、崖錐性堆積物は切られ、現在見る如く岡田町の西部は凹地となり、E地区はその凹地の東の川岸となった。そのため崖錐性堆積物が削り残されて土手状の微高地ができ、侵食を受けなかった部分は、マウンド状に残って南北方向に点在し、あたかも古墳の如き形状を呈している。

この古女鳥羽川の流路は、第２段丘面で傾斜が緩いため首を振り易く、また支流ができ易い為発掘地点の東側も約１m程削られて低くなっており、削り残された部分のみふるいわけの極めて悪いφ20cm以下の砂礫となっている。

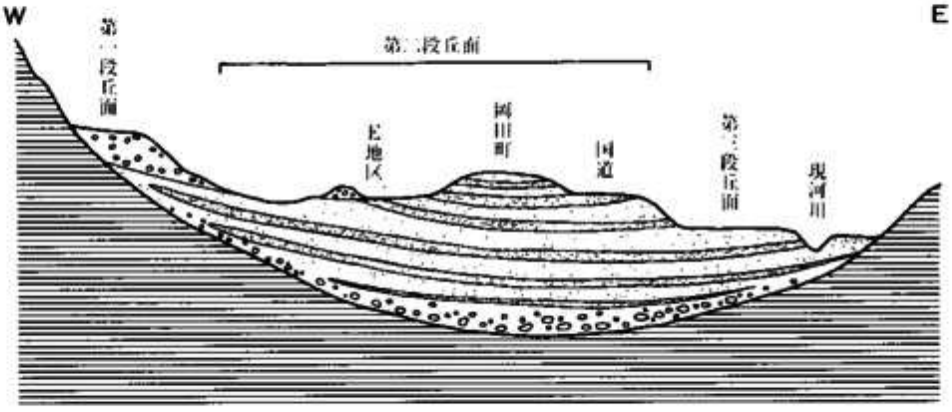
この削り残された微高地にも、削られて１m程低くなっている東側にも８c～９cの住居址が分布しており、東側の住居址の上には30～50cmの黒色土が載っている。

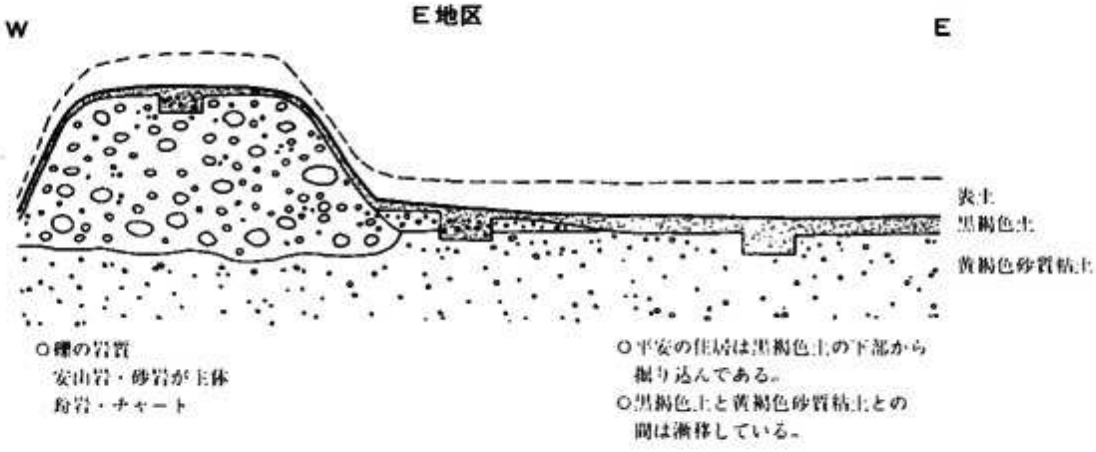
発掘地点の直ぐ東側は更に低くなり、先年発掘したD地区の河川跡が続くものとみられ、これが更に下流のB地区の河川跡につながるものと推定される。それより東は概念図の如く、岡田町の微高地となっている。

マウンド状の削り残し残丘について

φ15cm前後の亜各礫の砂岩と安山岩が主体で、その間を粗砂が埋めている。一見したところ人工的に見えるが、上述した如く矢作方面の沢から押し出された堆積物であり、西側と東側は古女鳥羽川によって削られ、北側は矢作からの沢で切られてやや南北に長く残り古墳状を呈している。

以上岡田町西部の河川跡は、平安後期頃まで何回か流れた古女鳥羽川により削られてできた地形が主であるが、それに矢作方面からの沢や馬飼峠から流れ出す沢の流れも加わってできた地形である。この西側を流れていた古女鳥羽川も、平安後期の大洪水で首を東に振り、平成４年発掘の原畑付近の平安住居址に巨礫を含む黒色土を１m以上も堆積させながら流路を東にかえたものと推定される。





挿図２　岡田町遺跡Ｅ地区断面概念

第３章　調査結果

第１節　調査の概要

岡田町遺跡の調査は、平成３年度の調査に引き続き今回が第II次調査となる。第Ｉ次調査では、A～D区の４地区合計で16,814㎡を調査し、古墳時代前期・奈良～平安時代の竪穴住居址110軒・掘立柱建物址21棟などを確認し、大きな成果をあげた。今回の第II次調査は、Ｉ次調査のB区とD区の中間域8,812㎡を調査した。地表から検出面までの深さは西側の尾根部では20～30cm、東側低地部では30～40cmである。地山は、西半部は礫が露出する黄褐色土であるのに対し、東半部は礫をほとんど含まない２次堆積ローム層で、遺構は東半部の良好な地山部分に集中していた。

調査区・遺構番号・調査方法等はＩ次調査の凡例に則り、調査区はE区、遺構番号は4001号から付した（A区：0001～・B区：1001～・C区：2001～・D区：3001～）。また、遺構の測量は、任意の点から磁北を基準線とした３mグリットを設定して行った。

調査結果の概要は、以下のとおりである。

〈遺構〉

竪穴住居址	３７軒	（奈良12軒、平安14軒、不明11軒）
掘立柱建物址	２０棟	（奈良～平安時代）
柵址	１列	（時期不明）
土坑	３４１基	（奈良～平安時代）（欠番：4004・4102～4106・4178・4179・4181・4183・4184・4250・4264・4266・4280）
ピット	３６１基	（奈良～平安時代）
カマド状特殊遺構	１基	（平安時代）
溝址	６条	（4002・4004～4006溝は、奈良時代の住居址から延びる特殊な形態。4001溝は自然流路。）
焼土面	3	

〈遺物〉

土器・陶器	（土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器）
土製品	（紡錘車・瓦塔・鞴羽口）
石器・石製品	（砥石・竪臼・打製石斧・石鏃・スクレイパー）
金属製品	（刀子・鎌・鏃・斧・責金具・鉄塊・鉄滓）

第2節　遺　構

1．竪穴住居址

第4001号住居址　（図版4）

検出：調査区北西隅に位置する。平面形は、方形を呈する。カマド：東壁中央部に位置する。袖部は、粘土構築材が僅かに残存していた。火床は僅かに落込み、全面に焼土が確認された。床：貼床は認められず、礫が露出する地山面を床として捉えた。壁：壁高は3～15cmで、遺存状態は良くない。4辺とも、なだらかに立ち上がっている。ピット：床面から5個検出された。いずれも、柱痕は確認できなかった。覆土：5層確認された。自然埋没の状況と考えられる。遺物出土状況：カマド周辺の覆土中から床面にかけて、僅かに土師器が出土したのみ。時期：遺物が少なく、判然としないが7期と考えられる。

第4002号住居址　（図版4）

検出：調査区北西部で4001住の南約7mに位置する。カマド：東壁中央部に位置する。右袖は粘土構築材がみられたものの、左袖はほとんど残存していなかった。火床部は、僅かにくぼんではいるものの、被熱痕は確認されなかった。床：礫が多量に露出する地山面を床として捉えた。貼床は、みられなかった。壁：西壁の立ち上がりは急であるが、他は緩やかで遺存状態も悪い。ピット：北壁中央部に2個、北西隅に1個みられるが、柱痕は確認されなかった。覆土：9層確認された。第II・III層には黄色土がブロック状に混入しており、人為的に埋土した可能性が窺える。遺物出土状況：床面上には、人為的に投棄されたと考えられる拳大の礫が多量に出土した。土器等は出土量が少なく、覆土中から小片が僅かに出土したのみ。時期：7期。

第4003号住居址　（図版4）

検出：調査区北西に位置し、4019土、ピットに切られる。カマド：西壁やや南寄に位置する。掘り込みは残るが、構築材と考えられる石材は散乱し、遺存状態は悪い。床：貼床は認められず、多量の礫を含む地山面を床として捉えた。壁：ほぼ直であるが、壁高が3cm程で、遺存状態は悪い。ピット：北西隅に2個、南東部に2個みられるが、主柱穴は不明である。覆土：単層。遺物出土状況：覆土から床面にかけて、小片が僅かに出土したのみ。時期：遺物から5期と考える。

第4004号住居址　（図版5）

検出：調査区中央やや西に位置する。カマド：東壁中央部に位置する。焼土と土器片が僅かに認められる程度であるが、須恵器蓋の焼成不良品が一点出土している。床：貼床は認められず、多量の礫を含む地山面を床として捉えた。壁：四方緩やかに立ち上がるが、壁高7～13cm程しか認められない。ピット：4個。P_2・P_4は、主柱穴と考えられる。覆土：暗褐色土の単層である。遺物出土状況：カマド周辺から土器片が僅かに出土したのみ。時期：6期と思われる。

第4005号住居址　（図版５）

検出：調査区中央西端に位置する。カマド：西壁中央部に構築されている。粘土の両袖が残る。火床部の被熱痕が明瞭で、炭化物も残る。又、周辺部から土師器の甕の破片も多量に出土している。床：貼床は認められず、多量の礫を含む地山面を床として捉えた。壁：南西部は残存せず、他も浅く残りは悪い。ピット：５個。P_2・P_3は主柱穴。覆土：暗褐色土の単層。遺物出土状況：カマド周辺以外は、あまり出土せず。時期：７期と思われる。

第4006号住居址　（図版６）

検出：調査区中央西端に位置し、4007住を切る。カマド：北壁中央部に構築された石組粘土カマドであり、右袖石、支脚石抜き取り痕が認められた。床：貼床は認められず、多量の礫を含む地山面を床として捉えた。壁：南壁の立ち上がりは認められないが、北壁浅く直に立ち上っている。ピット：３個。P_2は主柱穴。覆土：暗褐色土の単層である。遺物出土状況：南西部隅に土器片を含む焼土面が認められた。時期：遺物から５～６期と思われる。

第4007号住居址　（図版６）

検出：調査区中央西端に位置し、4006住に切られる。カマド等の諸施設は認められない。壁はほとんど遺存せず、遺物も小片が僅かに出土したのみ。覆土：暗褐色土の単層であり、4006住に比べ小礫が混入している。時期：住居の切り合いから５～６期と思われる。

第4008号住居址　（図版５）

検出：調査区南西部に位置し、4003土、ピットに切られ、4059土、4060土を切る。カマド：不明。床：貼床は認められず、多量の礫を含む地山面を床として捉えた。壁：北東部に浅く立ち上がるのみ。ピット：３個。柱痕確認されず。覆土：暗褐色土の単層。遺物出土状況：北東部隅に甕等の土器片多量出土。時期：７期と考えられる。

第4009号住居址　（図版６）

検出：調査区南西部に位置する。南側は削平される。カマド：西壁やや南寄りに位置しているが、削平されており焼土のみ残存。床：貼床は認められず、多量の礫を含む地山面を床として捉えた。壁：南側は削平のため遺存せず、北側に直に、わずかな立ち上がりあるのみ。ピット：削平部を除いて４個残存、主柱穴は、P_1・P_2。覆土：暗褐色の単層。

第4010号住居址　（図版６）

検出：調査区南西隅に位置する。西側大半は、調査区域外へ延びるため一部しか確認出来ず。又、中央を4325土に切られる。カマド：北壁東寄りに位置し、焼土、構築材と思われる石材、土器片が僅かに認められる。床：貼床は遺存せず、地山面を床として捉えた。壁：遺存部で緩やかな立ち上がり。ピット：北東隅に３個。覆土：単層。遺物出土：カマド付近以外なし。

第4011号住居址　（図版６）

検出：調査区南西隅に位置する。カマド：西壁やや南寄りに位置する。左袖石、支脚、焼土が確

認される石組粘土カマドである。床：中央部に貼床がみられた。壁：遺存度は良く、緩やかに立ち上がる。ピット：4個。P_1・P_2は主柱穴。覆土：暗褐色の覆土に黄色土塊が混入した層と炭化物が混入した2層に分けられる。遺物出土状況：カマドの周辺を中心に土器小片出土。時期：6期と思われる。

第4012号住居址　（図版7）

検出：調査区南西隅に位置する。カマド：西壁中央に構築されている。粘土の袖が残る。火床部の幅が広い。土器の小片、構築材と思われる石が残る。床：中央部に貼床がみられた。壁：壁高4～6cm、ゆるやかな立ち上がりである。ピット：中央に1個と南東部に1個。P_1は主柱穴。覆土：暗褐色土の2層に黄色土層が入る。遺物出土状況：カマド周辺中心に認められる。時期：6～7期と思われる。

第4013号住居址　（図版7）

検出：調査区南側やや西寄りに位置する。カマド：西南隅に構築された石組粘土カマド。構築材と思われる石材が住居の床面にまで散乱している。床：貼床は認められず、地山面を床として捉えた。壁：壁高7cm程で直に立ち上がる。ピット：5個。P_4は壁柱穴となる。覆土：暗褐色土の単層。遺物出土状況：住居床面にカマド構築材が散乱する以外は特になし。時期：6～7期と思われる。

第4014号住居址　（図版8）

検出：調査区南側に位置する。西側の微高地上地形から東側低地部への斜面上にある。東壁の一部を4328土が切っている。カマド：東壁中央部に位置する石組粘土カマドである。左右両袖ともに残存しており、石芯となる石を2段に積み上げて構築していた。火床と奥壁には、僅かに焼土がみられる。奥壁はかなり急な角度で立ち上がり煙道部へと続いている。床：中央部の一部に貼床が認められるが、その周囲は小礫が多量に露出する地山面を利用しており軟弱である。壁：遺存状況が良好で、西壁の最深部では45cmを測る。ピット：床面より22個検出されている。主柱穴はP_1・P_2・P_3・P_4と考えられる。P_5・P_{12}・P_{16}・P_{19}の柱穴列とP_8・P_{13}・P_{15}の柱決列が対応するため、この2列が脇柱と考えられる。また、カマド両袖脇にあるP_6・P_7にも柱痕が確認され、西壁方向へ斜めに掘り込まれている特徴がある。覆土：遺物出土状況：拳大から人頭大の礫とともに遺物も多量にみられた。時期：遺物等から4期と考えられる。

第4015号住居址　（図版7）

検出：調査区南東隅に位置する。カマド：西壁中央部に構築された石組粘土カマド。壁際に粘土の僅かな高まりと火床部の掘り込み、周辺部に構築材と思われる石材が認められる。床：貼床が認められる。壁：東部は認められず。他三方は、緩やかに立ち上がっている。ピット：8個。P_1・P_7・P_8は主柱穴。覆土：基本的に暗褐色土層中に黄色土粒が混入、小礫の混入度で2層に分けられる。遺物出土状況：小礫がカマドのある西部床面に多量出土、人為的に投げ込まれた可能性を残す。時

期：５期と思われる。

第4016号住居址　（図版９）

検出：調査区南東部に位置する。カマド：西壁中央部に構築された石組粘土カマド。火床部の掘り込みとカマド内に構築材の石材が残る。なお、床面北西部にも構築材と思われる石材が広がっている。床：貼床が認められる。中央部に焼土面がある。壁：東部は認められず、他三方は15cm程の高さで緩やかに立ち上がる。ピット：東側を中心に20個。P_1・P_2・P_3・P_4は主柱穴である。諸施設：東部を除く三方の壁に周溝がめぐっている。覆土：２層。壁際に砂粒を含む層が堆積し、更に黄色土粒を含む層が堆積している。遺物出土状況：北西部のカマドの構築材と思われる石材の散乱。カマドの左脇壁際から完形の紡錘車出土。又、美濃須衛産の鉢の破片が覆土中に認められた。時期：２期と思われる。

第4017号住居址　（図版７）

検出：調査区東南部に位置する。東側半分は削平されている。カマド：西壁中央部に位置する。火床部の掘り込みと焼土、少量の土器片が認められる。床：地山面をもって床として捉えた。壁：東部は削平されている。北部は確認されず、僅かに、南部に直に立ち上がる壁が認められる。ピット：５個。P_1・P_2は主柱穴と考えられる。P_5は壁柱穴。遺物出土状況：カマド周辺北部に土器小片出土。時期：２～３期と思われる。

第4018号住居址　（図版10）

検出：調査区中央部に位置する。カマド：西壁中央に構築されている。煙道、左右袖石、支脚石が認められる石組粘土カマドである。床：部分的に貼床の痕跡が認められる。壁：壁高10cm程で緩やかに立ち上がる。遺存状況は良い。ピット：９個。P_1・P_2（底面に礎石が認められる。）・P_3・P_4は主柱穴。P_5は壁柱穴か。P_6は、位置的に貯蔵穴と考えられる。諸施設：カマドの両脇から東部を除く三方の壁に周溝が巡る。覆土：褐色と暗褐色の２層。遺物出土状況：北部中央壁際から紡錘車、P_2の脇から須恵器盤の杯部が出土している。時期：２期と思われる。

第4019号住居址　（図版11）

検出：調査区中央部やや北東寄りに位置する。カマド：西壁中央部に位置する。両袖とも石組が残存していた。火床は僅かにくぼみ、少量の焼土がみられた。火床中央部には、土師器甕片が多量に出土し、これを取り除くと支脚の抜取り痕が検出された。支脚を抜き取った後に、土器を投棄したものと考えられる。床：壁際を除き、ほぼ全面に貼床が認められた。壁：14～25cmほど残存し、ほぼ直に立ち上がる。ピット：主柱穴は$P_{3\cdot7\cdot13}$と考えられ、壁際には10個（$P_{4\cdot8\cdot9\cdot10\cdot14\cdot18\cdot19\cdot20\cdot21}$）のピットが巡る。覆土：黄色土ブロックが多量に混入しており、人為的に埋土した可能性がある。遺物出土状況：主として覆土中から土器・鉄器が出土した。時期：４期。

第4020号住居址　（図版12）

検出：調査区北東部に位置し、平面形は方形を呈する。カマド：東壁中央部に構築されている。

火床は僅かにくぼみ、土師器甕片が出土した。袖は、粘土構築材が僅かに残るのみ。袖石・支脚等は見られず、抜き取り痕が検出されている。周辺には、カマド構築材と考えられるものが見あたらないため、人為的に抜取って持ち去ったと考えられる。床：壁際を除き、ほぼ全面に貼床されている。壁：ほぼ直に立ち上がり、壁高22～30cmを測る。ピット：ピットは16個検出された。このうち$P_{4・5・10・12}$には柱痕が確認され、位置的にみて主柱穴と考えられる。周溝：北西隅から北壁中央部・東壁の一部・南壁にある。また南東隅から壁外へ延びる4004溝は、本址の施設と考えられる。4004溝：幅30～40cm、深さ15～25cmで、4031住まで延びている。4031住は本址より古く（2期）、4004溝に切られる。覆土：カマド以外は2層である。黄色土ブロックが多量の混入しており、埋没の状況からも人為的に埋められた可能性が高い。遺物出土状況：覆土中および、カマド周辺の床面上から出土している。時期：3期。

第4021号住居址　（図版13）

検出：当初は4021住1軒として調査したが、掘り下げ段階で4021住に貼られる4036住が発見された。また、南壁中央部を、4350土に切られている。カマド：西壁中央部に位置している。袖石等は残存していないが、煙道が140cmほど壁外へ延びている。火床部分はわずかにくぼみ、焼土・炭化材が堆積していた。床：全面に貼床されている。中央付近は、4036住を人為的に埋めて貼床している。壁：ほぼ直に立ち上がり、残存高は25～45cmを測る。

ピット：6個検出されたが、柱痕等はみられなかった。覆土：自然堆積の状況が考えらる。遺物出土状況：土器等の出土量は、非常に少ない。時期：遺物が少なく判然としないが、5～6期と考えられる。

第4022号住居址　（図版9）

検出：調査区北東隅に位置し、南壁中央を4326土に切られ、北部で4002溝を切る。カマド：西壁中央部に構築された石組粘土カマドで、火床部の掘り込みが被熱し、粘土の両袖が確認された。床：貼床が認められた。壁：壁高30cm程。直に立ち上がる。ピット：13個。主柱穴は、P_5・P_{13}（特に断面に柱痕が観察出来る）。覆土：暗褐色土と黄褐色土の2層。遺物出土状況：土器小片が数点出土。時期：2～3期。

第4023号住居址　（図版10）

検出：調査区北東隅に位置している。南東隅で4016建に切られている。カマド：東壁中央部分に位置している。遺存状態は良くない。僅かに左右両袖が残る。火床部分には焼土が厚く堆積し、カマド構築材と考えられる石材や須恵器蓋が散乱していた。床：全面に貼床が認められる。北壁と南西壁際に周溝が巡る。覆土：自然埋没の様相を呈している。遺物出土状況：北壁際の覆土中から、まとまった量の土器が出土した。これらは、覆土の観察状況から埋没時に混入したものと考えられるが、一箇所に不自然に偏って出土しているため、人為的に投棄された可能性がある。時期：4期。

第4024号住居址　（図版14）

検出：調査区中央南側に位置する。4037住・4035住を貼っている。当初は１軒の住居として掘り下げたが、３軒の住居址の重複であることが判明した。これらの住居址の重複の順序は、4037住→4035住→4025住である。この３軒は主軸がほぼ同一で、同位置に規模を拡張しながら建て替えたものと考えられる。4024住は、最終的な建て替えにより最大規模に拡張された住居である。カマド：西壁中央部分に位置する。壁をやや掘り込んで構築している。遺存状態は良いとはいえず、カマド袖部の一部と火床部分の焼土が確認されたのみである。カマド構築材と考えられるような石材や支脚等はみられず、人為的に破壊され持ち去られた可能性もある。
床：4035住と重複する部分は、人為的に埋め立てて叩きしめている。その他は、貼床は認められずに地山面を利用しているが、比較的硬い。覆土：暗褐色土の単層である。黄色土塊が多量に混入しており、人為的に埋め立てられた可能性が強い。遺物出土状況：出土量が非常に少ない。覆土中から小片が僅かに出土したのみ。時期：切合い関係、僅かな出土遺物から５～６期と考えられる。

第4025号住居址　（図版15）

検出：調査区ほぼ中央付近に、4027住に切られて検出された。南東隅からは、幅20～30cmの4006溝が延びている。この溝は約24m延び、調査区東端の4001溝に接続している。カマド：東壁ほぼ中央部に構築されていた。壁外へ掘り込んでおり、煙道が1.8m延びる。煙道の一部は、ピットに切られている。火床部分には、焼土が厚く堆積していた。床：全面に貼床されている。壁：遺存状態が良く、壁高45～55cmを測る。諸施設：東・南・北壁際には、周溝がみられる。また周溝の南東隅部分からは、4006溝が延びる。時期：２期。

第4026号住居址　（図版16）

検出：調査区中央やや西に位置し、4027住、4335土、4337土、P4018に切られる。カマド：不明。床：貼床が認められた。壁：壁高30cm程で、直に立ち上がる。ピット：北側に集中して７個。覆土：暗褐色土を基本に黄色土粒の混入度合で２層に分けられる。遺物出土状況：北東部壁際で、つき臼が出土した。

第4027号住居址　（図版16）

検出：調査区中央やや西に位置し、4025住を切り、P4018によって、カマド北部を切られている。カマド：西壁中央部に構築された石組粘土カマドであり、左袖、火床部の掘り込み、その他構築材と思われる石材が認められる。床：貼床が認められる。壁：四方とも直に立ち上がるが、特に、北側は40cmの壁高で直に立ち上がる。ピット：８個。P_1は主柱穴。P_5は貯蔵穴と思われる。覆土：基本層は暗褐色土で混入物の違いで３層に分けられる。遺物出土状況：中央部に拳大～人頭大の石が集中して認められ、人為的に投棄された可能性がある。時期：６期と思われる。

第4028号住居址　（図版17）

検出：調査区南東隅に位置し、北に4034住を切る。カマド：西壁中央部に構築された石組粘土カ

マドであり、右袖石、支脚石、その他構築材と思われる石材も認められる。又、カマド奥壁際に人為的に底を打ち欠いた土師器の甕（残存度1/3程）が、逆位に据えてあるのが確認された。床：中央部に貼床が認められた。壁：南部は緩やかに立ち上がる。他三方は直に立ち上がる。覆土：褐色土～暗褐色土の堆積が認められる。遺物出土状況：北西部に拳大～人頭大の礫、土器片が集中して出土。北東部にも小礫、土器片が疎らに出土している。時期：５期と思われる。

第4029住居址　（図版18）

検出：調査区中央東隅に位置し、4007溝を切り、南側を4009建に切られる。カマド：東壁中央に半円形に構築された石組粘土カマドであり、両袖の石芯が認められる。床：貼床が認められる。壁：南部と西部半分は周溝を伴い直に立ち上がる。その他については認められない。ピット：７個。P_1・P_7は主柱穴と考えられる。諸施設：南部の壁際から西部の壁際（半分）にかけて周溝が認められる。覆土：単層。遺物出土状況：カマド内に土器片が僅かに認められるのみ。

第4030号住居址　（図版19）

検出：調査区中央西寄りに位置している。平面形は方形を呈し、4011建・P4005・P4006・P4007に切られ、77土を切っている。この溝は本址西壁カマド前から東壁にかけてコの字状に巡り、約17m延びて1001溝に至っている。カマド：西壁中央部分に位置し、壁をやや掘り込んで構築している。袖は遺存状態が悪く、両脇には20～30cm大の袖石が散乱しており、袖石の抜取り痕と考えられるピットが２個みられた。また左袖壁際には、須恵器甕の底部を構築材として転用していた。火床には焼土が厚く堆積しており、支脚の抜取り痕と考えられるピットがみられる。床：特に中心部分には、堅緻な貼床がみられた。諸施設：周溝とは別に、カマド燃焼部前から壁際沿いにコの字状に巡る溝と本址中心部から南東隅に延びて合流し、屋外へ延びる溝がみられる。規模は、幅30～80cm・深さ20～40cmを測る。このうち東壁沿いに北側へ延びる溝には、溝壁に拳大の石を人為的に組んでいる状況がみられた。東壁・西壁の南側一部・南壁・北壁の一部には、前述した溝の外側に周溝がみられる。覆土：自然堆積の状況がみられる。遺物出土状況：覆土下層および床面上から、須恵器杯、土師器高杯などが出土した。時期：遺物から２期と考えられる。

第4031号住居址　（図版18）

検出：調査区北東部に位置し、本址北西部隅で4227土を切る。又、4020住から延びる4004溝が、北壁やや東寄りに接続している。カマド：西壁中央壁に掘り込まれた石組粘土カマドである。両脇の袖石、被熱された火床部、構築材と思われる石材、煙道が認められた。特に、トンネル状に掘り込まれた煙道は遺存状態が良く、径36cm、長さ156cmの規模を持ち、粘土でかためられた天井部と底面に石を伴った煙出しピットも認められた。床：貼床が認められる。壁：壁高40cm程で直に立ち上がる。ピット：８個。P_1・P_3・P_7（P_8）は壁柱穴であるが、他のピットからみて主柱穴とも考えられる。諸施設：カマドの左袖から南壁、東壁、北壁にかけて壁際に周溝が巡る。覆土：暗褐色土層を基本層に黄色土粒の混入度によって２層に分けられ、少量の焼土も認められた。遺物出土状況：

鉄滓出土。時期：２期と思われる。

第4032号住居址　（図版16）

検出：調査区北部中央に位置し、西に4002溝を、北東に4179土を切る。カマド：西壁中央部に半円形に構築されている。両脇に袖石抜き取り痕、被熱した火床部、土器片が認められる石組粘土カマドである。床：貼床が認められる。壁：四方は壁高10cm～20cmで、緩やかに立ち上がる。ピット：７個。P_1・P_2・P_3・P_7は、主柱穴。覆土：単層。遺物出土状況：カマド周辺部に集中。時期：４期と思われる。

第4033号住居址　（図版21）

検出：調査区中央やや東寄りに位置し、北壁の一部を4288土に切られる。今回検出された住居址の中で、最大規模となる6.6×6.8mの方形を呈する。南東隅からは、4005溝が延びる。カマド：西壁中央部に位置する。石組粘土カマドで、左袖のみ残存している。右袖部には、構築材の石芯を抜き取ったと考えられるピットがみられる。カマド燃焼部には、長径45cmの不整形の落込みがあり、そこから東壁へ向けて溝が延びている。床：全面に貼床がみられるが、それほど堅緻ではない。また、本址中央部の床面上には、48×32cmの範囲で焼土面が確認された。壁：４辺とも立ち上がりが急で、15～25cmの壁高が残存している。東壁の一部の壁のみが突出しており、床面からゆるやかに立ち上がっている。他遺構との切り合いもなく、周溝もこの箇所で途切れているため、出入口部分の可能性もある。諸施設：カマド右袖脇から西壁・北壁・東壁とコの字状に巡る溝と、東壁中央部でその溝から分かれてカマド燃焼部へ続く溝がみられる。この溝は屋外へ約18m延び、4001溝まで続いている。住居址内では、幅24～40cm・深さ10～19cm、住居址外では、幅40～60cm・深さ20～50cmを測る。屋内北側から東側部分にかけては、溝の両壁に拳大の礫の石組がみられる。また屋内西側の溝とカマド燃焼部の落込み部分には、蓋石がみられる。特にカマド燃焼部の蓋石には、被熱痕が明瞭に観察できた。この箇所の埋土には、焼土粒と炭が多くみられた。その他、南東隅の屋内・外にも蓋石状の平石がみられることから、これらの溝には全面に蓋石が架けられていた可能性もある。これらの溝とは別に北壁西側・東壁中央部分・カマド部を除き、壁際に周溝がみられる。覆土：基本的には２層である。堆積状況から、自然埋没と考えられる。遺物出土状況：出土量は少ない。覆土中より須恵器杯類・甕などが出土した。また、南壁際中央部と東側突出部には炭化材がみられた。南壁際のものはスギ材、突出部のものはナラ材である。（森義直氏の鑑定による）時期：遺物等から２期と考えられる。

第4034号住居址　（図版17）

検出：調査区南東隅に位置し、大半を4028住に切られ、北部が僅かに残る程度である。カマド：北壁中央部に構築材と思われる石材が僅かに残る程度。（P_4が、カマドの残存遺構になるか。）床：貼床が僅かに残る。壁：北部と東西のコーナーが僅かに残る程度である。30cm程の壁高をもって直に立ち上がる。ピット：５個。P_2は主柱穴。遺物出土状況：カマドの構築材と思われる石材と土器

片が僅かに出土。特に北西部隅とカマド付近から焼成時に変形したと思われる須恵器の蓋がそれぞれ出土しており、竈址群との関連性をはらんでいる。

第4035号住居址　(図版14)

検出：調査区中央南側で、4037住を貼り、4024住に貼られている。西壁は4037住のものを再利用しているが、東壁・北壁・南壁は20～50cmほど拡張している。カマド：西壁中央部で、4037住と同位置にある。住居を拡張して建て替えているにも関わらず、カマドは旧住居のものそのままか、全く同位置に構築し直したと考えられる。遺存状態は悪く、袖等の施設は全く残っていない。左右両袖の袖石と、火床部分の支脚石を抜き取った痕跡がみられるため、人為的にカマドを破壊し構築材を持ち去ったと考えられる。床：4037住を埋め立て、叩きしめて床としている。ピット：P_6～P_9の4個見つかっている。位置的に主柱穴と考えられる。覆土：人為的に埋め戻した痕跡がみられる。諸施設：カマド部分を除き、壁際に周溝が巡る。遺物出土状況：本址からは遺物がほとんど出土しなかった。建て替え時に、持ち去られたためであろうか。時期：遺物からは判断できず、切り合い関係から4～5期と考えられる。

第4036号住居址　(図版13)

検出：4036住の掘り下げ段階で発見された住居址である。4021住を作る際に、人為的に埋め立てられている。カマド：東壁やや南よりに位置している。袖等は全く見られないが、火床部の落込みと焼土が広範囲にわたって検出された。床：貼床は観察されず、地山面を床としていた。壁：4021住を掘り込む際に壊されており、わずかに5～8cmの立ち上がりが確認されるのみである。ピット：南西コーナーに1個みられる。埋土には焼土粒が多量に混入していた。覆土：地山と類似する黄色土塊が多量に混入しており、人為的に埋めた可能性が高い。遺物出土状況：出土量は非常に少なく、床面から僅かに土師器片が数点出土したのみ。時期：不明。

第4037号住居址　(図版14)

検出：4035住・4024住に貼られている。平面形は方形を呈する。カマド：西壁中央部に位置している。同位置に、4035住がカマドを再構築しているので、本址のカマドは火床のみしか残存していない。床：貼床はみられず、地山を床面としている。壁：僅かに10cmほど残存するのみ。4035住を構築する際に破壊されている。ピット：P_{10}～P_{14}の5個みられる。位置からみてP_{10}～P_{13}が主柱穴と考えられる。覆土：単層であるが、黄色土塊が多量に混入しており人為的に埋め立てている状況が窺える。諸施設：カマドとP_{14}部分を除いて、壁際に幅15～20cmの周溝が巡る。さらに北壁際の周溝中央付近から中心に向かって、長さ80cmほど周溝が延びる。間仕切りの周溝か。遺物出土状況：カマド周辺から須恵器杯・土師器甕類などが比較的まとまって出土した。時期：遺物から2～3期と考えられる。

2．掘立柱建物址

今回の調査で確認した掘立柱建物址は、竪穴住居址の２分の１以上に相当する20棟である。これらの建物址の帰属する時期は、概ね２～７期のなかで捉えられる。これらの柱配置は、２間×２間（９棟・45%）、２間×１間（４棟・20%）、３間×２間（３棟・15%）、３間×３間（１棟・15%）、４間×２間（１棟・15%）、４間×３間（１棟・15%）、不明（１棟・15%）と２間×２間が最も多い。これらのほとんどが側柱式であり、総柱式は１棟（4015建）のみである。また、柱穴底面に礎石あるいは栗石をもつ特殊な建物址が３棟（4015建・4016建・4018建）みられる。

第4001号建物址　（図版22）

検出：調査区北東隅において検出された。柱配置：２間×２間の側柱式で平面形は方形を呈する。柱穴は列の揃った配置である。規模は3.1×3.1mで、柱間寸法は桁行1.52～1.60m、梁間1.48～1.60mを測る。柱穴：掘り方の平面形は、円形あるいは不整楕円形を呈する。柱痕は、P_4・P_6以外の柱穴で確認されている。埋土は柱痕に黒褐色土、周囲は暗褐色土である。時期：不明。

第4002号建物址　（図版22）

検出：調査区北東部に位置する。柱配置：２間×２間の側柱式。平面形は、桁方向の東列がやや南東方向に振れるため、整然とした方形にならない。規模は、全形3.08×3.08mで、柱間寸法は桁行1.48×1.60m、梁間1.40×1.48mを測る。柱穴：円形あるいは不整楕円形の掘り方で、すべて柱痕が確認された。柱痕は黒褐色土、周囲は暗褐色土を基本とした埋土が確認された。時期：不明。

第4003号建物址　（図版23）

検出：調査区西側中央部で検出された。柱配置：２間×２間の側柱式である。P_2・P_4が多少ずれて配置されるため、きれいな方形プランにはならない。規模は3.60×4.00m、柱間寸法は桁行1.60～2.00m・梁間1.48～2.04mを測る。柱穴：円形か楕円形の掘り方で、P_4以外の全てのピットで柱痕が確認された。時期：不明。

第4004号建物址　（図版23）

検出：調査区中央やや西寄りに位置する。柱配置：２間×２間の側柱式。規模は3.60m×4.00mの長方形を呈する。柱間寸法は、桁行1.60m～2.00m、梁間1.48m～2.04mを測る。梁方向のP_2・P_6は、それぞれ東側へ寄っており中間位置にない。柱穴：掘り方は全体的に浅いが、P_2のみ最深部で38cmと深い。時期：不明。

第4005号建物址　（図版24）

検出：調査区中央部やや南西寄りに位置する。柱配置：２間×２間（１間）の側柱式であるが、梁方向の南列は中柱がなく１間である。また桁方向西列は、P_7が西側へずれて配置されるため形の整った方形プランにはならない。規模は2.92×2.80mで、柱間寸法は桁行0.92～1.72m、梁間1.08～2.80mを測る。柱穴：P_1・P_3・P_6・P_7に柱痕が確認された。掘り方は、いずれも不整形である。時期：不明。

第4006号建物址　（図版24）

検出：調査区南西部に位置する。柱配置：2.72×2.28mの規模で、2間×2間の側柱式。柱間寸法は、桁行1.32～1.35m、梁間2.08～2.28mを測る。梁方向南列が短く、やや台形状の方形を呈する。柱穴：P_2・P_5に柱痕が確認された。時期：P_1からの出土遺物から、6期と考えられる。

第4007号建物址　（図版24）

検出：調査区中央東側に位置する。柱配置：2間×2間（1間）で、梁間の南側列の中柱がない。柱間寸法は、桁行4.00m、梁間2.96～3.40mである。柱穴：他の建物址に比べると、掘り方の規模が小さい（直径24～56cm）。柱痕は、P_2以外の全ての掘り方から確認されている。時期：不明

第4008号建物址　（図版25）

検出：調査区東端中央部で検出された。南北方向の2間のみが確認され、東側の調査区外へ延びている。柱穴：P_2・P_3に柱痕が確認された。柱痕の周囲は、黄褐色土塊が多量に混入した暗褐色土がみられ、人為的に埋め戻された状況が判別できる。時期：不明。

第4009号建物址　（図版25）

検出：調査区東端において、4030住・4006溝・4002溝を切って検出された。柱配置：4間×3間の側柱式で、平面形は整然とした長方形を呈する。規模は6.24m×4.60mで、柱間寸法は桁行2.22～2.52m、梁間2.10～2.28mを測る。柱穴：掘り方は円形・楕円形を基本としており、50～60cm前後のものが多く規格性が窺える。柱痕は、P_7以外のすべてのピットに確認されている。埋土は、柱痕に黒褐色土、周囲には黄色土ブロックが多量に混入する暗褐色土で埋め戻されている。時期：6期と考えられる。

第4010号建物址　（図版26）

検出：調査区中央部で、4094土・4095土・4141土に切られて検出された。柱配置：3（2）間×2間の側柱式である。規模は4.44×3.85mで、柱間寸法は桁行1.00～2.00m、梁間1.88～2.08mを測る。柱穴：柱痕はP_1・P_2・P_3・P_7・P_8に確認された。このうち、P_7・P_8には、柱痕が2箇所みられる。またP_2は1個のピットとして扱ったが、最深部が2箇所みられるため、2本の柱穴と考えられる。時期：P_1・P_3・P_4・P_5・P_6・P_7から遺物が出土しており、これらの様相から5～6期と考えられる。

第4011号建物址　（図版27）

検出：調査区南東部で4030住を切る。柱配置：4（2）間×2間の長方形を呈する。桁行東面のP_4とP_5の中間にはP_8・P_9に対応する柱穴が見られないが、住居址覆土と建物址ピットの覆土が類似していたため、発見できなかった可能性もある。規模は、6.60×3.63m、柱間寸法は桁行2.40～1.32m、梁間2.72～2.20mを測る。柱穴：掘り方は、円形が基本である。柱痕は、P_3以外すべてのピットで確認された。時期：不明。

第4012号建物址　（図版26）

検出：調査区中央やや北寄りで、4019住を切って検出された。柱配置：３間×２間の側柱式と考えられるが、桁行東側列が住居址に切られているため全容は不明である。規模は、桁行5.52m、梁間4.00mで、柱間寸法は桁行1.92～1.72m、梁間2.08～1.88mを測る。柱穴：検出された全ての柱穴に、柱痕が確認された。時期：不明。

第4013号建物址　（図版27）

検出：調査区北東部で、4001溝を切る。柱配置：３間×３（２）間の方形を呈する。規模は、全形4.8×4.2m、柱間寸法は桁行1.60～1.52m、梁間1.48～1.28mを測る。柱穴：他の建物址に比べると柱穴規模が小さく、直径30cm前後のものばかりである。柱痕は、P_1・P_2・P_3・P_4・P_9で確認されている。時期：不明。

第4014号建物址　（図版28）

検出：調査区北側中央付近で171土を切り、ピットに切られて検出された。柱配置：２間×２間の側柱式である。規模は、全形3.56×1.76m、柱間寸法は桁行3.60m、梁間3.20～3.52mを測る。P_7の位置がずれるため、梁方向西列がまっすぐに通らない。柱穴：P_1・P_3・P_5・P_6・P_9に柱痕が確認された。時期：不明。

第4015号建物址　（図版28）

検出：調査区中央やや北側に位置する。本遺跡唯一の総柱式建物址であり、掘り方底面には礎石がみられることなど、特殊な要素がみられる。柱配置：２間×２間の総柱式で、方形に整然と配列される。規模は3.40×3.48mで、柱間寸法は桁行1.60～1.24m・梁間1.92～1.60mを測る。柱穴：すべての柱穴から、柱痕が確認されている。掘り方は方形や楕円形を基本としており、どの柱穴も最深部で50～80cmと深い。P_2・P_4・P_6・P_8・P_9からは、掘り方底面より礎石あるいは栗石と考えられる石が出土している。埋土は、柱痕に黒褐色土、周囲には黄色土ブロックが多量に混入する暗褐色土や黄褐色土で埋め戻されている。時期：２～３期と考えられる。

第4016号建物址　（図版29）

検出：調査区北東隅において、4023住を切って検出されている。柱配置：３間×２間の側柱式で、長方形を呈する。規模は5.00×3.28mで、柱間寸法は桁行1.52～1.80m・梁間1.48～1.80mを測る。柱穴：検出したすべての柱穴から、柱痕が確認されている。掘り方は、P_2・P_{10}が方形で、他は円形・楕円形を基本としており、いずれも42～63cmと深い。P_2・P_4・P_5・P_9には、礎石あるいは栗石と考えられる石が据えられていた。埋土は、柱痕は黒褐色土であるが、周囲は黄褐色土と暗褐色土を交互に版築状に埋め立てている状況がみられた。特にP_2・P_4・P_5は、５～10cmの厚さで埋められていく良好な状況が観察できた。時期：不明。

第4017号建物址　（図版29）

検出：調査区中央部やや南寄りに位置している。２（１）間×２間の側柱式である。平面形は、

4.00×3.42mの長方形を呈する。柱間寸法は、桁行3.96～1.56m、梁間1.48～1.68mを測る。桁行の柱間寸法が広いのは、P_1とP_7の間にP_4に対応するピットがないためである。柱穴：P_7以外のすべてのピットに、柱痕が確認された。時期：不明。

第4018号建物址　（図版30）

検出：調査区中央付近に位置する。柱配置：2間×1間の側柱式である。平面形は、2.72×2.72mの方形を呈する。柱間寸法は、桁行1.12～1.36m・梁間2.72mで梁間方向が長い。柱穴：すべて円形で、柱痕も確認されている。時期：不明。

第4019号建物址　（図版30）

検出：調査区東側中央部に位置する。本址北半分にある4035土は、建物址の主軸と同一であることや、他の土坑と覆土・深さ・規模などの様相が異質であることから建物址に付随する土坑である可能性がある。柱配置：2間×1間の側柱式で、長方形を呈する。規模は3.12×3.00mで、柱間寸法は桁行1.20～1.88m・梁間2.60～3.00mを測る。柱穴：柱痕が確認されたのは、P_6のみである。掘り方は円形・楕円形を呈し、規模は小さい。時期：不明。

第4020号建物址　（図版30）

検出：調査区中央南側で、4010建を切って検出された。柱配置：2間×2間の側柱式で長方形を呈する。規模は、全形3.88×2.41m、柱間寸法は桁行1.60～2.16m、梁間2.41mを測る。柱穴：掘り方の平面形は、楕円形を基本としている。柱痕はP_2・P_3・P_4で確認された。時期：不明。

3．柵址　（図版32）

第4001号柵址

検出：調査区中央やや北西寄りに位置している。配置状況から掘立柱建物址の可能性を考慮したが、周囲には柱穴が検出できなかったことから柵址とした。主軸はN－23°－Eで4基の柱穴から構成される。構造：全長6.3m、柱間寸法は2.8～3.2mを測る。掘り方は、径28～43cmで、坑底はいずれも平坦である。覆土は、暗褐色土を基調としており黄褐色土塊が多量に混入している。時期：遺物が少なく時期不明である。

4．土坑　（図版31～32）

概観：今回の調査地では、341基の土坑を検出している。分布状況をみると、東側低地部分に集中しており、西側尾根部分は疎らである。遺物の得られた土坑は少なく、14基のみである。また4334・4353土からは多量の鉄滓が出土しており、特殊な土坑としてあげられる。以下、特徴的なもののみ記述する。

第4322号土坑

検出：調査区中央やや東よりで、4006溝を切って検出された。300×180cmの不整楕円形を呈する。

検出面からの深さは5～15cmと浅い。遺物出土状況：南西隅から須恵器鉢・土師器甕などの土器や、焼土・炭化物・粘土が出土した。また、この部分の坑底面は、被熱痕がみられた。

第4334号土坑

検出：4026住の北1.5mに位置する。72×75cmの不整方形を呈する。覆土：暗褐色土の単層である。遺物出土状況：底面から鉄滓が出土した。

第4353号土坑

検出：調査区中央付近で、4024住を切り4136土に切られる。100×85cmの不整楕円形を呈する。覆土：暗褐色土の1層で、焼土・炭化物が多量に混入している。遺物出土状況：底面より5cm上方で鉄滓が多量に出土した。また、埋土上面には炭化材がブロック状に混入していた。しかし、底面や壁面には被熱痕はみられなかった。

5．焼土面　（図版33）

調査区東端を南北に流れる4001溝（自然流路）の両岸に、焼土面が3箇所みられた。第Ⅰ次調査においても、4001溝の上流（D区）と下流（B区）で同様の焼土面が11箇所発見されている。そのほとんどが、流路埋土上面にみられる。このことから、流路がある程度埋没した段階で火が焚かれたと推定される。各焼土面の規模は、4001号焼土面：56×45cm、4002号焼土面：63×54cm、4003号焼土面：34×56cmで、Ⅰ次調査で既出したものとほぼ同様である。いずれも掘り込みは確認されなかった。

6．カマド状特殊遺構　（図版32）

検出：調査区ほぼ中央付近の斜面上に位置している。焼土面と焼土粒のみられる範囲でプランを捉えた。形態：不整形で、中央付近にカマド状の石組が検出された。石組は2列みられ、一部は2段に積んでいた。この石組の形状が住居址のカマドに酷似しているものの、47°の急斜面上にあり住居址の特徴がみられないことから、カマド状特殊遺構とした。遺物出土状況：石組内・石組斜面下に被熱面がみられた。また僅かに残る覆土中には、焼土粒が顕著にみられた。遺物は石組周辺に集中しており、須恵器甕・黒色土器皿・土師器甕などが出土した。

7．溝址　（図版33）

今回の調査では、6条の溝址が確認されている。このうち4002・4004・4005・4006溝は、住居址から延びる特殊な形態をもつものである。4001溝は、第Ⅰ次調査の時点でも確認された自然流路で総延長800m以上の流れを確認している。4003溝は、調査区西側中央付近に東西方向に延びるものである。4002・4004～4006溝は、住居址の項ですでに述べたので、その他の溝址について記述する。

第4001号溝址

検出：調査区東端を北から南へ流れる自然流路である。本址西端は確認できるものの、東端は調査区外へ延びており、溝幅は一部でしか確認できない。形状：小さく蛇行しながら南北方向に延びる。溝幅は確認できる中央部で6～7mで、深さは30～45cmを測る。底面は凹凸に富み、弓状の断面形を呈する。覆土：3層確認された。どの層にも小礫や砂が多く混入し、鉄分の沈澱もみられた。これらのことから、流水があったことは顕著である。遺物出土状況：集中して出土する箇所はほとんどみられず、出土量も少ない。覆土中に散在的にみられる。Ⅰ次調査では多量の遺物が出土したが、今回の調査では溝の調査範囲が狭かったため比較的少なかった。

第4003号溝址

検出：調査区中央南東寄りに位置する。形状：尾根状地形に直行するように東西方向に直線的に約23m延びる。東端は、斜面直前でかなり浅くなり消滅している。溝幅は、1.5～2.3m、深さは75cmを測る。断面はU字状を呈し、底面は比較的平坦で西から東へ僅かに傾斜している。覆土：暗褐色土が基本で、僅かに礫が混入している。しかし、覆土・底面の状況から、水流の痕跡は認められなかった。時期：遺物がほとんど得られていないため、時期は判然としない。

8．古墳状地形の調査（旧・中島古墳）　（図版33）

調査区北東隅には、以前から古墳と推定されていた箇所があり、遺跡地図にも周知の遺跡（中島古墳）として登録されてきた。この部分にグランド造成工事がかかることとなり、古墳の有無の確認のため、地形測量とトレンチ調査を行うこととにした。

トレンチは、墳丘推定地に幅80cmのもの4本をL字状に設定した。土層は5層確認され、それらはすべて人為的に盛土されたものであった。耕作土下には、拳大から人頭大の礫層が厚く堆積していた。その礫層下からは、奈良・平安時代の旧地表面を確認した。盛土層から出土した遺物は、近代以降の陶磁器・牛骨・平安時代の土器で、古墳時代に比定されるものはなかった。これらの結果と地元の方々の話を総合すると、開墾・耕作時に出た礫等を積み上げたもの（通称「やっこ」）であると判断した。

以上の結果より、本址は古墳ではないことが判明した。しかし、Ⅰ次調査のD区で古墳時代に比定される須恵器が出土していることや、かつて付近で鉄剣あるいは鉄刀が出土したという話が地元で伝えられている。このため付近に古墳が存在する可能性はまだ捨てきれず、今後も調査は必要であろう。

第3節　遺　　物

1．土器・陶器　（図版34～44）

(ア)概観

今回の調査では、竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑などの古代の遺構をはじめとして、遺構外の包含層などから多量の土器が出土した。本址でみられる土器・陶器の種別は、土師器・黒色土器A（内面黒色処理された土師器）・須恵器・軟質須恵器（灰白色軟質の須恵器。多くは黒斑がみられる。）・灰釉陶器である。これらのうち、実測可能な245点を図化し、出土土器の提示を行うこととした。

松本平の古代の土器様相は、長野県埋蔵文化財センターの『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4　総論編』（文献1）の器種・器形の分類、編年観でほぼ網羅される。本書においてもこの編年観に従い、各遺構の土器群の様相を観察してみた。以下、代表的な土器群を例に、各期の概観を記述する。

第1表　松本平の土器編年実年代対応表

実年代	700				800				900			1000			1100
時　期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15

※文献1の第16表を改変して使用。

(イ)各時期の様相

第Ⅰ次調査では、県センター編年の2期（8世紀初頭）～8期（9世紀末）の土器様相がみられた。今回の第Ⅱ次調査においても、同様の時期幅の中で捉えられる。以下、各土器群の概要と、各器種の特徴を記述する。

2期（8世紀初頭）：4016住・4018住・4025住・4031住・4033住土器群が該当する。

食器では、土師器杯D（非ロクロ調整の丸底の杯）・高杯、須恵器杯A（底部ヘラ切り未調整、83～85・132・133ほか）・杯B（92・168・183ほか）・杯蓋B（180・181）・盤（95・96）・稜椀（218）・鉢（86・87）がみられる。煮炊具は、土師器甕A（輪積み成形後、内外面ナデ調整の長胴甕）・甕B（器面を刷毛目で調整）・甕C（武蔵型甕）。貯蔵具は、須恵器甕A・甕E・長頸壺・短頸壺・フラスコ瓶。

須恵器　杯Aは、すべて底部回転ヘラ切り未調整である（83～85・132・133ほか）。86・87は在地産でなく、美濃須衛産と考えられる鉢である。底部は、回転ヘラ切り後手持ちヘラ削りされる。218は、稜椀である。市内では、小原遺跡で1点出土している。この稜椀は、官衙・寺院などの遺跡か

ら出土する傾向が高い特殊品である。

土師器　杯D（170）は、非ロクロ調整の丸底の杯で、体部外面から底部にかけて手持ちヘラ削りされる。また内面に横方向のミガキが施され、黒色処理される。98の甕Cは、体部外面をヘラ削りして薄く仕上げている、いわゆる「武蔵型甕」である。

3期（8世紀中葉）：4019住・4020住が該当する

食器では、須恵器杯A（ヘラ切りと回転糸切り混在）・杯B・杯蓋B、土師器高杯。煮炊具は、土師器甕A・甕B・甕C。貯蔵具は出土量が少なく、須恵器甕Eがみられるのみ。

須恵器　杯Aは、底部回転糸切り調整を施すもの（103）が出現し、底部回転ヘラ切りのもの（102・110）と共伴する。

土師器　114の高杯は、非ロクロ調整。甕A（111～113）は、輪積み成形の後、内外面ナデ調整される。甕B（106）は、器面外面に刷毛目調整が施される。

4期（8世紀後葉）：4023住・4032住

食器は須恵器杯A（主体は回転糸切りで、ヘラ切りは僅か）・杯B・杯蓋B、黒色土器A杯A（底部手持ちヘラ削り）。煮炊具は出土量が少なく、土師器甕B・甕Cの破片がみられるのみ。貯蔵具は、須恵器甕A・甕E。この時期に、黒色土器A杯Aが出現する。

須恵器　3期と同様に、底部糸切り（128・187）とヘラ切り（126・127）がみられるが、糸切りのものが多くみられる。128は、静止糸切りである。63・68には墨書がみられる。

黒色土器A　黒色土器Aの杯Aが出現する（131・188）。いずれも、底部は全面に手持ちヘラ削りがなされている。

5期（8世紀末葉～9世紀初頭）：4014住・4015住・4021住・4028住

食器は須恵器杯A（回転糸切りのみ）・杯B・杯蓋B、黒色土器A杯Aがみられる。須恵器の割合が非常に高い。煮炊具では、土師器甕B・小形甕C。貯蔵具は、出土量が少なく判然としない。

須恵器　杯Aは、すべて底部回転糸切り調整が施される（154・155・156ほか）。蓋Bには、使用するには耐えられないほど変形している焼成不良品がみられる（153）。これは、木遺跡西方に近接している松本市北部古窯址群との密接な関係が窺える資料と考えられる。

黒色土器A　杯Aは、ほとんど底部回転糸切りであるが、117のみは手持ちヘラ削り調整される。

土師器　体部外面を削り調整する小形甕C（82・75）、甕B（165）など、土師器は煮炊具にのみみられる。

6期（9世紀前葉）：4004住・4011住・4027住

食器は須恵器杯A・杯B・杯蓋B・盤・鉢A、黒色土器A杯Aで、須恵器が主体である。煮炊具は甕B・甑B、貯蔵具は長頸壺・甕のみで、両方とも出土量に恵まれず判然としない。

須恵器　底部回転糸切りであるが、外傾が強く、ロクロ目が目立つ形態となる（143・14）。

黒色土器A　杯Aは、すべて回転糸切り未調整（146・15ほか）。

7期（9世紀中葉）：4001住・4002住・4003住・4005住・4008住・カマド状遺構

食器は、須恵器杯A・杯B・杯蓋B、黒色土器A杯A・皿B・椀。煮炊具は、甕B・甕C・小形甕D。貯蔵具は、出土量が少なく須恵器甕のみ。この他、特殊品として円筒型土器（実測不可で図化提示していない）がみられる。該期では、黒色土器Aに椀・皿Bが新たに出現する。4002住の土器群が比較的良好なセットである。

須恵器　杯Aが消滅する段階である。器形は、さらに外傾が強まり、ロクロ目が目立つものとなる。

黒色土器A　杯A（1・2・18・19・28）の他に、皿B（10・227）・椀（20・3）が出現する。3の皿Bは、底部が厚く、高台が低い。

8期（9世紀末葉）：4337土

出土量が少なく判然としない。軟質須恵器杯A（小片）、黒色土器A杯A・椀がみられる。また、包含層中から灰釉陶器椀（実測不可）が出土している。

参考文献

1：1990　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘報告書4　総論編』　（財）長野県埋蔵文化財センター

2．円面硯　（図版44）

調査区北端中央部の遺構外から1点のみ（244）出土した。脚部は欠損しており、硯面の1/2のみが残存している。外提径12.4cm、内提径8.6cmを測る。陸部はほぼ平坦で、使用痕が明瞭に観察できる。脚部はほとんど残存していないが、図上復原により長方形の透かしが19箇所穿たれていたものと推定される。断面の観察から、硯面と脚部は別々に製作され、貼付けられている。

3．瓦　（図版45）

瓦は破片1点を検出面から得た。須恵質の平瓦の破片で厚さは中央部で2.4cm、端部で2.0cm程を測る。全体の大きさはわからないが、幅は25cm程度であろう。色調は明橙色を呈し、胎土は緻密で、白色土粒を含む。上面は縄目のタタキ痕が残り、下面には糸の本数が1㎠あたり6×6本の布目痕がみられた。端部の調整はヘラ状工具によるケズリ・ナデ、指ナデがなされている。

4．瓦塔　（図版45）

瓦塔は板状の小破片1点のみを検出面から得ることができた。屋蓋部の天井部破片と考えられ、厚さは1.8cm程を測る。屋根部分は剥離し残存しない。色調は黄褐灰～灰橙色を呈し、胎土は緻密で、白色・黒色砂粒を含む。成形はヘラ状工具を用い、調整はヘラ状工具・指ナデで行われる。焼成は酸化還元焔によるものであろう。下面には屋根部との接合痕が認められた。半裁竹管状の工具を用いて平行に押し引きがされ、接合面積を広くする工夫がされている。

5．土製品　（図版45）

土製品には紡錘車と鞴の羽口がある。個々の出土地点・寸法・重量等については第２表土製品一覧表を参照願いたい。

紡錘車（１～６）　６点が出土したが、すべて図化提示することができた。ほぼ完形の１・３・５と破片の２・４・６がある。形状は断面が台形に近いもの（１・５）、長方形を呈するもの（３）、台形・長方形の中間型のもの（２・４）、長さが短く、板状を呈するもの（６）があり、バリエーションに富む。いずれも丸みを帯び、稜線がはっきりしない。長さは最小で1.4cm（６）～最大4.4cm（１）を測り、かなりばらつきがある。それに対して直径は最小で5.0cm（１）～最大7.3cm（２）とあまり差がない。孔径も0.7～0.9cmの間におさまる。調整については、使用による摩滅と風化による剥離のため明らかでないが、すべて指ナデによるものであろう。

鞴の羽口（７）　小破片４点が出土し、このうち図化可能な１点を提示した。７は末端側の破片で、溶滓の付着はみられない。調整は指ナデとヘラ状工具によるナデがなされている。4038土からの出土で、伴出した土器がなく、所属時期は不明である。

6．金属製品　（図版46～47）

鉄製品29点と鉄塊・鉄滓が出土している。これらは遺構からの出土が大半で、特に4014・4030住からはまとまって鉄製品が出土している。そのため実測図は遺構順に掲載している。なお、実測図の右下には上段に通番、下段に器種を記載しており、文中の鉄器番号は通番に対応している。

鎌（１～３）　3点が出土している。1は大形鎌で、先端部を僅かに破損している。着柄角度は150°前後の鈍角を呈し、刃幅が最大4.2cmと広いことから、雑草木伐採用と推定される。2は両側が破損している刃部で、刃幅3.0cmを計る。3は全長14.1cmの完形品である。着柄角度は106°前後である。刃部はよく使い込まれており、着柄部と先端以外は研ぎ減りにより刃幅が狭くなっている。

刀子（５・６・８・10～17・21・23～26）　16点が出土している。いずれも破損しており、全形をうかがえるものは少ない。このうち5･6は同一個体の可能性がある。関は両関が大半であるが(6･8･11･14･15)、23は棟側に関はみられない。刃部は関から徐々に減幅しているが、棟側は直線的なものが多い（5･11･15)。21は柄の木質部と共に責金具が残存している。また、17は木質部に責金具が装着されていた痕跡が観察される。特徴的なものとして、大形刀子の15がある。茎部の一部を破損し、身の切先寄りで屈曲しているが、身部の長さ17.1cm、刃幅1.8cmを計る。なお、23は刀子の茎部としては短く、棟側に関がみられない点と、茎尻から関まで直線的に増幅している点で特異である。

斧（４）　1点が出土している。4は着柄用の袋部（ソケット）をもつ有袋鉄斧で、刃部を僅かに破損している。全長8.5cm、刃部幅（復原）4.6cmをはかる。袋部は上端の内側で2.8×1.2cm、深さ4.2cmを計り、内部には柄の木質部が残存している。側辺は袋部から刃部にかけて撥状に広がっている。

鏃（7・19・28）　4点が出土し、うち3点を図化している。7は箆被部の一部で、長方形断面を有し、残存長3.0cmを計る。19は鏃身部の側辺を僅かに欠くが、全長9.4cmの短頸鏃である。鏃身部は三角形式で腸抉は無く、斜めに立ち上がる関を有している。箆被部は1.9cmで関箆被を有し、茎部は4.4cmを計る。28は両側を破損しているが、鏃身～箆被部の一部である。鏃身部は片側辺が失われているが、短い腸抉を有する。残存長5.6cmを計る。

他に、4016住から茎部の残片1点が出土している。

責金具（18）　1点が出土している。方形断面の棒状製品で、上半を破損しているが楕円形のリング状を呈することから、責金具として扱った。残存長2.2cm、最大幅2.1cmを計る。

不明鉄製品（9・20・22・27）　4点が出土している。9は鎌状の刃部の両面に木質部が付着している。両面の木目は平行しており、着柄に伴う痕跡の可能性がある。20は錆ぶくれが激しいが、全長1.9cm、幅1.5cmの楔状を呈している。22は下端を破損しているが、平面が菱形で中央に1孔を有する板状製品で、孔から上部が反っている。27は棟と刃を有するが、棟と刃側の関がずれる点で一般的な刀子とは異なることから不明鉄製品として扱った。

鉄塊・鉄滓　鉄塊は8点が出土している。内訳は4016住から1点(56.8g)、4026住から3点（3.5g)、4027住から1点(3.1g)、4124土から1点(0.5g)、4353土から2点(3.5g)が出土している。鉄滓は119点が出土している。内訳は4024住から1点(111.8g)、4026住から3点(105.7g)、4027住から1点(7.5g)、4031住から2点(108.5g)、4051土から6点(27.0g)、4331土から1点(433.0g)、4344土から1点(519.0g)、4353土から104点(1352.8g)が出土している。このうち大形の鉄滓は椀形滓である。

7．石器　（図版48～50）

本遺跡では縄文時代～古代の定形的な石器が出土している。ほとんどが縄文時代の石器で、弥生時代と古代のものも少数だが認められる。今回の調査では縄文～弥生時代の遺構は未確認であり、この時代の石器は混入品と考えられる。

報告にあたっては極力図化に努めた。石質の鑑定については太田守夫氏に御教示を受けている。

①磨製石鏃（1）

4019住から1点出土した。石材は蛇紋岩を利用している。先端部を欠損するが、復原される長さは7cm程であろう。形態的には凹基・無茎で、両面から穿孔される。側縁は基部からまっすぐに伸びながら先端部近くで、わずかに屈曲する。研磨は丁寧に行われている。

②石鏃（2～7）

製品6点が出土し、石材は2が黒曜石、他の5点はチャート製である。基部を分類すると、不明の6を除いて2～4・7が凹基・無茎鏃、5は凸基・有茎鏃で晩期に属するものであろう。

③スクレイパー（8・9）

2点が出土した。8は黒曜石を利用している。刃部の形状は外湾刃で、調整は片面加工がされる。刃部のなす角度は比較的急斜度で、いわゆる掻器であろう。9は硬砂岩を利用している。刃部の形状は直刃で、調整は両面加工がされる。素材は横長剥片である。

④打製石斧（10～21）

石材は4種類が利用される。14が粘板岩、17が粘板岩（ホルンフェルス）、11・18・20・21が緑色ひん岩、10・12・13・15・16・19が硬砂岩である。平面形は、10のみ分銅形で、他は短冊形である。使用痕については、刃部に摩耗、胴部に着柄痕らしいつぶれがあるものも多い。

⑤砥石（22～24）

3点が出土している。石材は22に凝灰質泥岩、23に凝灰質岩、24に砂岩がそれぞれ利用されている。形態をみると、24は直方体、22は偏平な直方体を呈する。23は、偏平な直方体を呈するが、内彎する砥面をもつために深いくびれがある。3点のうち22は大きさ・重量から置き砥石と考えられる。

⑥竪臼（25）

4026住より、縦に半分欠損したものが出土した。石材は砂岩を利用している。敲打により成形され、外面・下面にはその痕跡である細かな起伏が残る。側面中央部が深く削り込まれ、上・下端にはそれぞれ幅4cm・3cmの縁が作り出されている。使用痕については、凹部全面が滑らかな面となっているほか、底面にも摩滅が認められた。

第2表　土製品一覧表

（　）：現存値、［　］：復原値

No.	種　類	出土地点	長さ (cm)	直径 (cm)	短径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備　考
1	紡錘車	4014住No.30	4.8	5.0	3.1	0.8	(102)	上縁1/10欠(ほぼ完形)
2	紡錘車	4014住ベルト	3.6	7.3	6.8	[0.9]	(139)	片側欠
3	紡錘車	4016住No.5	3.0	5.7	5.2	0.7	(136)	上縁1/10・下縁1/10欠
4	紡錘車	4018住No.1	4.4	[6.7]	[6.5]	[0.7]	(100)	片側欠
5	紡錘車	南西検出面	2.7	5.6	4.8	0.8	(89)	下縁1/10欠(ほぼ完形)
6	紡錘車	検出面	1.4	[6.0]	5.7	[0.8]	(23)	上下縁2/3欠
7	輪羽口	4038土	—	[7.0]	[7.0]	[1.8]	(52)	末端1/4残

第４章　調査のまとめ

松本市岡田地区は、近年大規模な発掘調査が行われてきた。特にこの地区は、古代東山道の通過地点と考えられ、さらに西側の山中には大規模な須恵器窯址群（北部古窯址群）が近接していることから、松本平の古代史を解明する上で重要な地区とされている。今回の調査で、２次にわたる岡田町遺跡の調査が終了したため、周辺遺跡ともあわせて岡田地区の古代について考えてみたい。

１．溝状施設が付属する住居址について

今回の調査で検出された住居址のうち、4020号・4025号・4030号・4033号住居址の４軒は、住居内から屋外へ溝が延びる特異な構造をもつ。これらの住居址の時期は、4025・4030・4033住が土器編年２期（８世紀初頭）、4020住が３期（８世紀中葉）で、いずれも奈良時代に位置付けられる。規模は4.56×4.92m～6.64×6.80mで、この時期としては標準～やや大形のものである。4025・4033住は、壁際の周溝の内側に更にもう一本溝が巡り、住居南東隅から屋外へ延びている。これらから延びた溝（4002溝・4005溝・4006溝）は、4001溝（自然流路）に接続している。また、4020住から延びている4004溝は、4031住に接続している。住居内での溝のあり方は、いずれも周溝状に壁際を巡るが、4030・4033住では更に床面中央部にも設置されている。特にこの２軒の溝壁には、石が積まれ、4033住には石蓋も伴う。この種の類例としては、県内では麻績村野口遺跡ＳＢ02・大町市南入日向遺跡６号住居址、県外では滋賀県穴太遺跡（文献１）などで検出されており、オンドル状施設としての可能性が指摘されている（文献２）。

これらの調査例と、本遺跡で発見された４例との形態上の類似点は、①住居内に周溝とは別の溝が巡る。②溝壁に石積みがみられる（4030住・4033住）。③石蓋がある（4033住）。④カマドまで溝が延びている（4030住・4033住）。⑤溝内の埋土中に僅かに焼土・炭化物がみられる（4033住）。の５点があげられる。しかし、本遺跡発見例と他例との大きな相違点は、屋内に巡っている溝が屋外へ15～20mも延び、流路址や他の住居址に接続していることである。この屋外溝は、オンドル状施設の構造とは考えにくい。しかもこれらの溝は、全て斜面下の方向に向けて掘られており、排水溝的な性格とも考えられる。しかし、いずれにしても現段階ではどの様な性格なのかはっきりした答えをもちあわせていない。

２．岡田町遺跡の集落変遷について

今回調査した岡田町遺跡と周辺の遺跡を併せて鑑みると、古代においては松本平古代土器編年１期（７世紀末）から集落が展開する。岡田町遺跡は、第Ｉ次調査の報告書においてもすでに述べているが、古代２期（８世紀初頭）から８期（９世紀末）まで集落が継続した。岡田地区では、本遺

跡の他に塩辛遺跡・宮の前遺跡・宮の上遺跡・原畑遺跡・岡田西裏遺跡・樋渡し遺跡・堂田遺跡・和田遺跡などで古代の遺構が発見されている。これらの遺跡と岡田町遺跡の様相を概観して、岡田地区の古代集落変遷を考えてみたい。

古代1期（7世紀末）

古代1期の集落は岡田地区一様に展開したのではなく岡田地区北部の塩辛遺跡にのみ出現する。竪穴住居址1軒に対し、掘立柱建物址6棟で構成される。これらの建物址は、2間×3間の小型のものから2間×4間・3間×3間の庇付建物などの中・大型の両者もみられる。岡田地区では、古代1期以前の7世紀代の遺構は発見されておらず、突然塩辛遺跡に集落が出現する。この集落は、竪穴住居址主体ではなくて掘立柱建物址主体である。在地に根ざして展開した集落（竪穴住居址主体）ではなく、特殊な性格（掘立柱建物址主体）が窺える。言い替えれば、それまでの在地集落が発展したのではなく、計画的に作られた集落とも考えられる。このような要因が裏付けられる出土品としては、突手付中空円面硯・円面硯・変形して窯壁等が付着した須恵器蓋などの特殊品がみられる。特に、在地産とみられる須恵器焼成不良品や窯壁が付着した製品などがみられることから、須恵器生産に何等かの関わりがみられ、周辺の古窯址群の操業開始時期も1期まで遡る可能性がある。

古代2期（8世紀初頭）

塩辛遺跡・岡田町遺跡D・E区では、大形で特殊な構造の住居址が出現する。塩辛遺跡2住と岡田町3013住は、礎石をもつ大型住居址である。同様の礎石がみられる住居址としては、松本市下神遺跡SB97・松本市宮の前遺跡第14号住居址があげられる。この2例より塩辛2住・岡田町3013住の方が古く、現在のところでは松本平の大型礎石住居の初現ということになる。このほか岡田町遺跡4025・4029・4030・4033住は、住居隅から溝が延びる特殊な形態をもつ。また、掘立柱建物址のなかには、掘り方底面に礎石・栗石をもつ構造のもの（4015・4016建）が岡田町遺跡にみられる。また、岡田町遺跡の南西約0.8Kmに位置する宮の前遺跡では、庇をもつ大型建物址が出現する。1期では、塩辛遺跡の狭い範囲を中心に集落が展開したが、2期になると岡田町遺跡D・E区と宮の前遺跡が集落の中核となり、集落範囲も塩辛遺跡・樋渡し遺跡・宮の前遺跡まで広がる。

古代3期（8世紀中葉）

3期になると塩辛遺跡・岡田町遺跡からは大型住居址が姿を消し、代わって宮の前遺跡に礎石をもつ大型住居址が出現する。遺構は、北部の塩辛遺跡から宮の前遺跡にわたる広い範囲にみられるようになる。

古代4期（8世紀後半）

4期は、いずれの遺跡においても住居址数が減少して散在的になる。住居址の形態は、特に大型なものは認められず、一辺3～4mの中・小型のものばかりで構成される。

古代5期（8世紀末～9世紀初頭）

5期は、特に岡田町遺跡で住居址数が爆発的に増加し、岡田地区の最大の集落を形成したものと考えられる。塩辛遺跡ではこの時期をもって、集落が断絶する。岡田町遺跡D区には、一辺7mの大型住居址がみられ、この時期の中核的な存在と考えられる。該期以後は、集落の範囲が岡田町遺跡D区以南に移ったものと考えられる。5期に相当する8世紀末～9世紀初頭には、隣接する北部古窯址群が最も生産が活発となり、信濃国府が松本平に移転したと考えられる時期でもある。

古代6期（9世紀前半）

5期の状況がそのまま受け継がれ、岡田町遺跡を中心に展開する。

古代7期（9世紀中葉）

相変わらず岡田町遺跡を中心に展開する状況は変わらない。しかし、あらたに宮の上遺跡・原畑遺跡・和田遺跡などに住居址がみられ、居住域が拡散する傾向がみられ始める。

古代8期（9世紀後半）

岡田町遺跡では、住居址数が激減する。該期の住居址がみられる遺跡としては、岡田町遺跡・宮の前遺跡・宮の上遺跡・原畑遺跡・和田遺跡・樋渡し遺跡で、さらに広く拡散する。しかし、これらの集落も8期をもって断絶してしまう。以後、空白時期が約1世紀続いた後、岡田西裏遺跡・樋渡し遺跡に新たに住居址がみられる。8期は、須恵器生産が大きな衰退を迎える時期である。該期以後生産されるのは一部の貯蔵具のみで、食器等は操業を停止する。須恵器生産の衰退とともに、生産に関連した人々が住んでいた岡田地区のムラも消滅したのであろう。

以上、周辺遺跡の動向も概観しながら岡田町遺跡の集落変遷を考えてみた。岡田地区の奈良・平安時代の集落は須恵器古窯址群および土師器焼成坑が多く検出された岡田西裏遺跡との関連が非常に強く、今後総合的にあわせて考えなければならない。いずれにしても、北部古窯址群の須恵器生産体制の確立のなかで集落が拡大し、須恵器生産体制の衰退とともに集落も断絶してしまうのである。

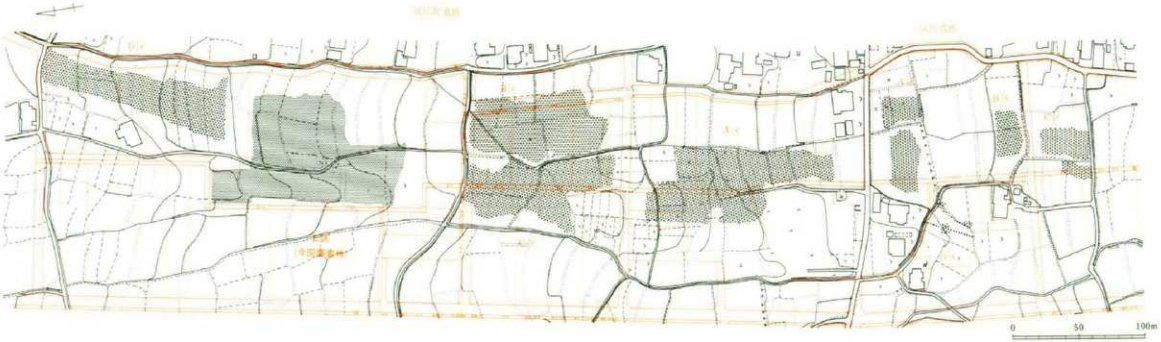
（参考文献）
1：青山　均　1989　『穴太遺跡（弥生町地区）発掘調査報告書』　大津市教育委員会
2：綿田弘実　1993　『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書12　野口遺跡』長野県埋蔵文化財センター

第3表　岡田地区奈良～平安時代竪穴住居址数

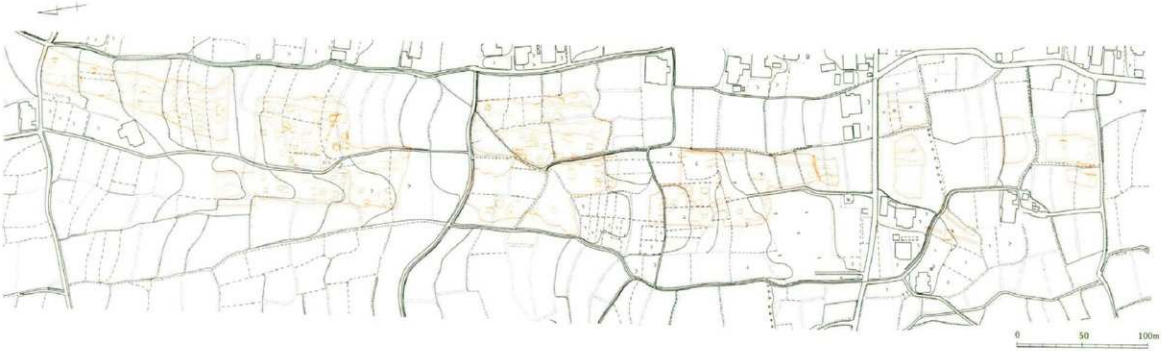
時期	塩辛	宮の前	岡田町	宮の上	原畑	岡田西裏	計
1期	1						1
2期	2	2	16				20
3期	3	4	14				21
4期	3		6				9
5期	3	1	27				31
6期		1	22				23
7期		2	25	6	9		42
8期		1	9	6	6		22
9期							0
10期							0
11期							0
12期							0
13期				1			1
14期							0
計	12	11	119	13	15		166

※時期が判別した住居址のみ。また、未報告遺跡（岡田西裏遺跡）は除く。

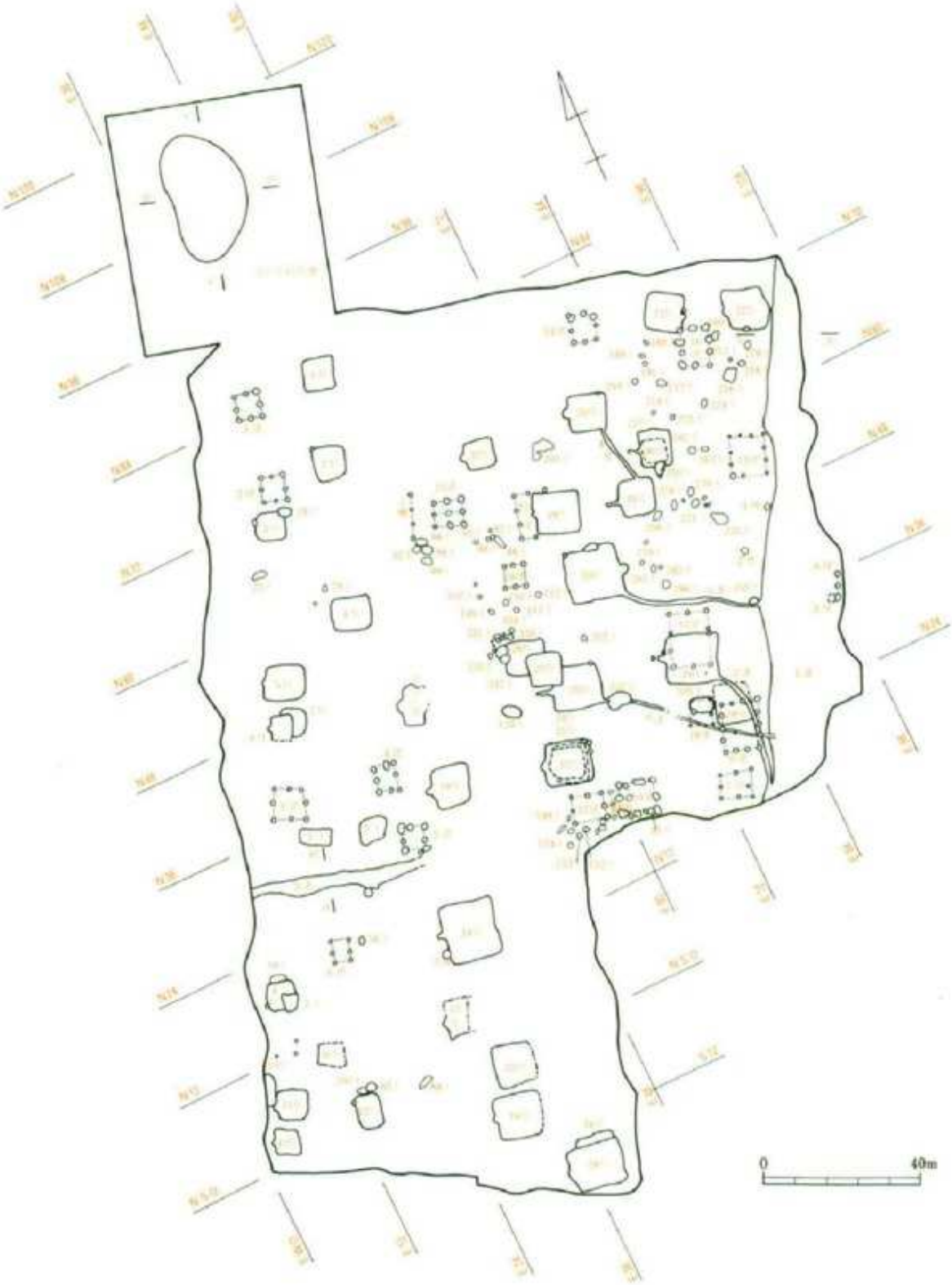
図　　版



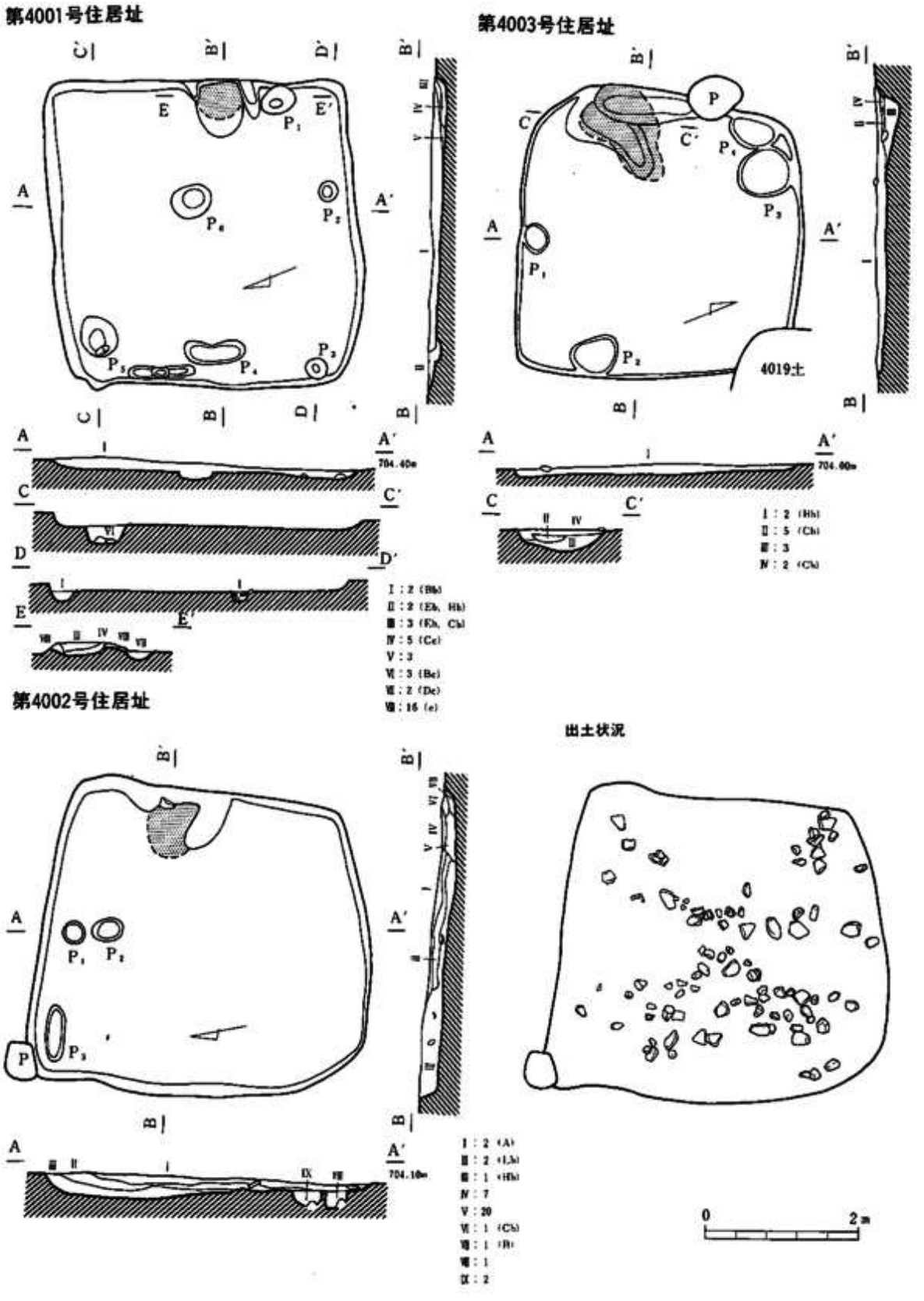
図版1　調査地の範囲



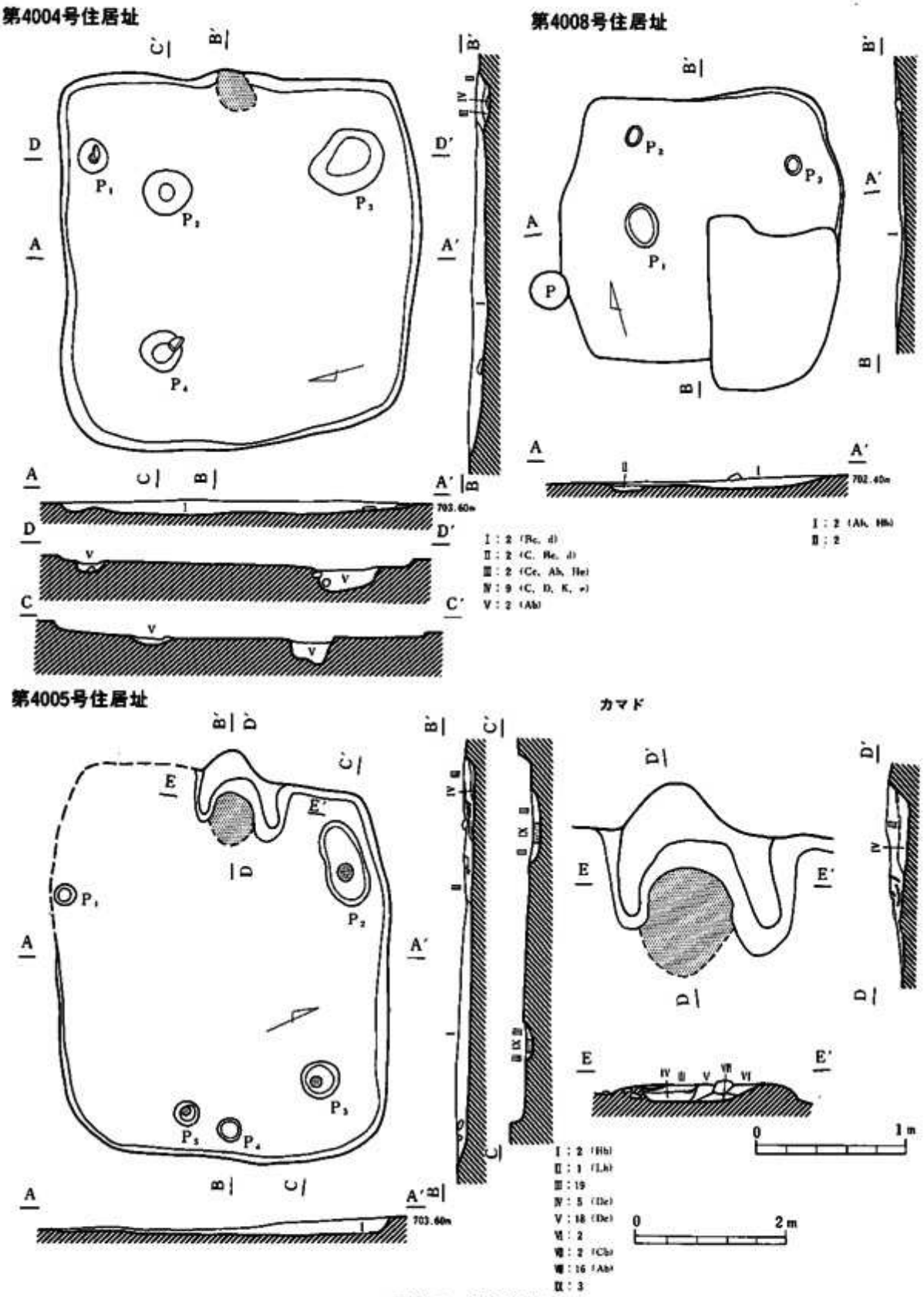
図版２　遺構配置全体図



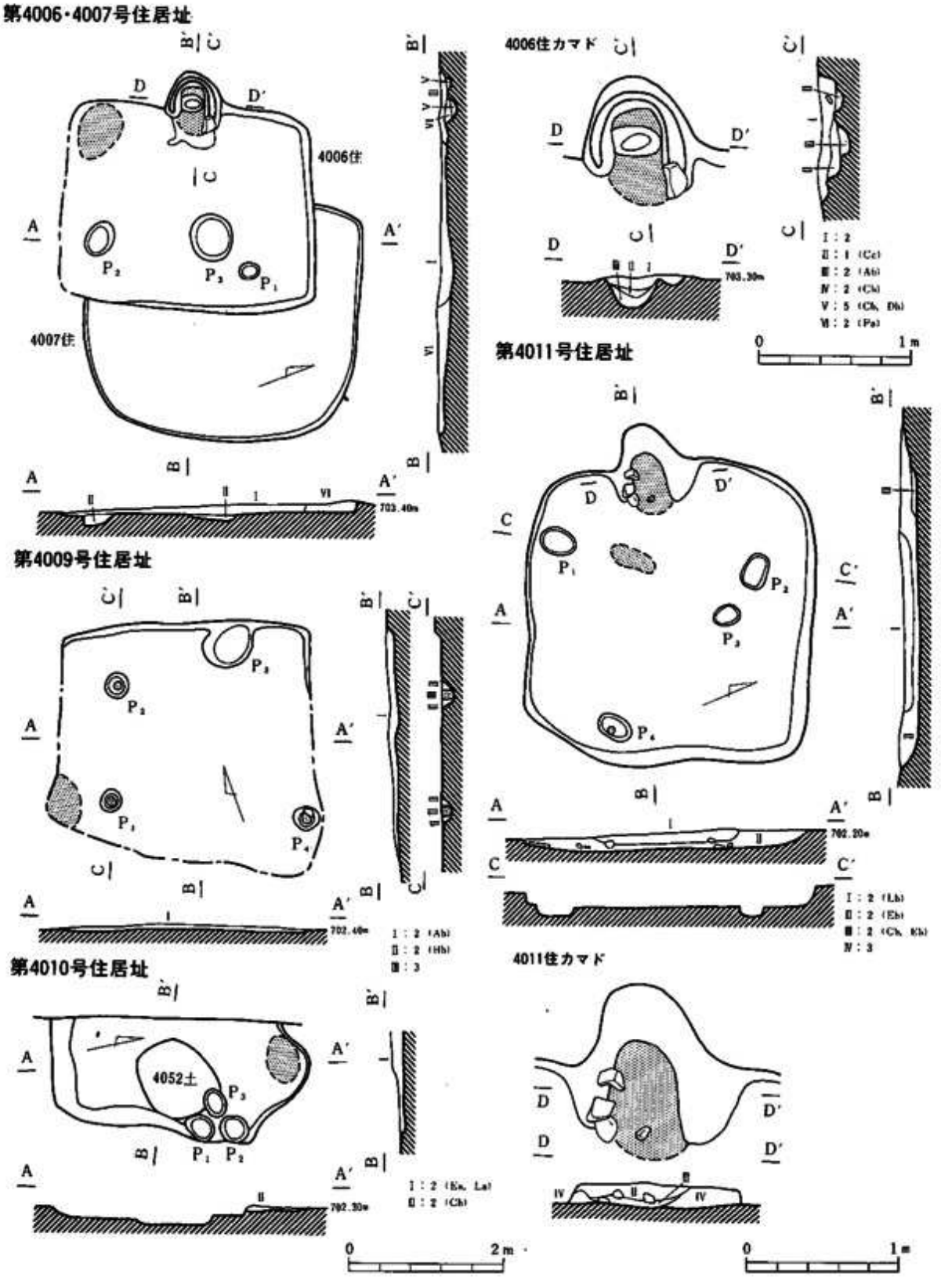
図版３　岡田町遺跡Ｅ地区全体図


第4001号住居址
第4003号住居址
第4002号住居址
出土状況
4019土
704.40m
704.00m
704.10m
0
2m

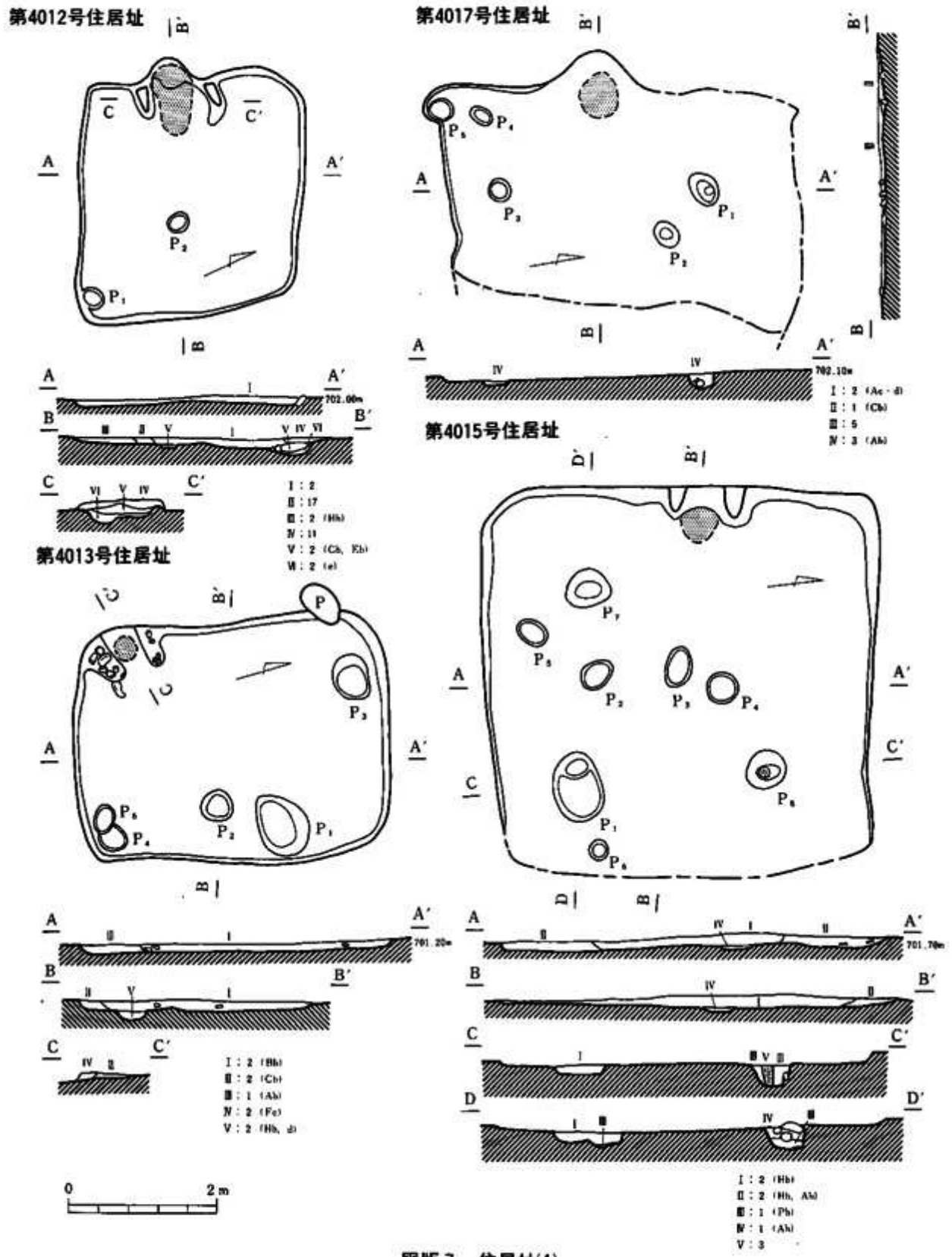
図版 4　住居址(1)



図版5　住居址(2)

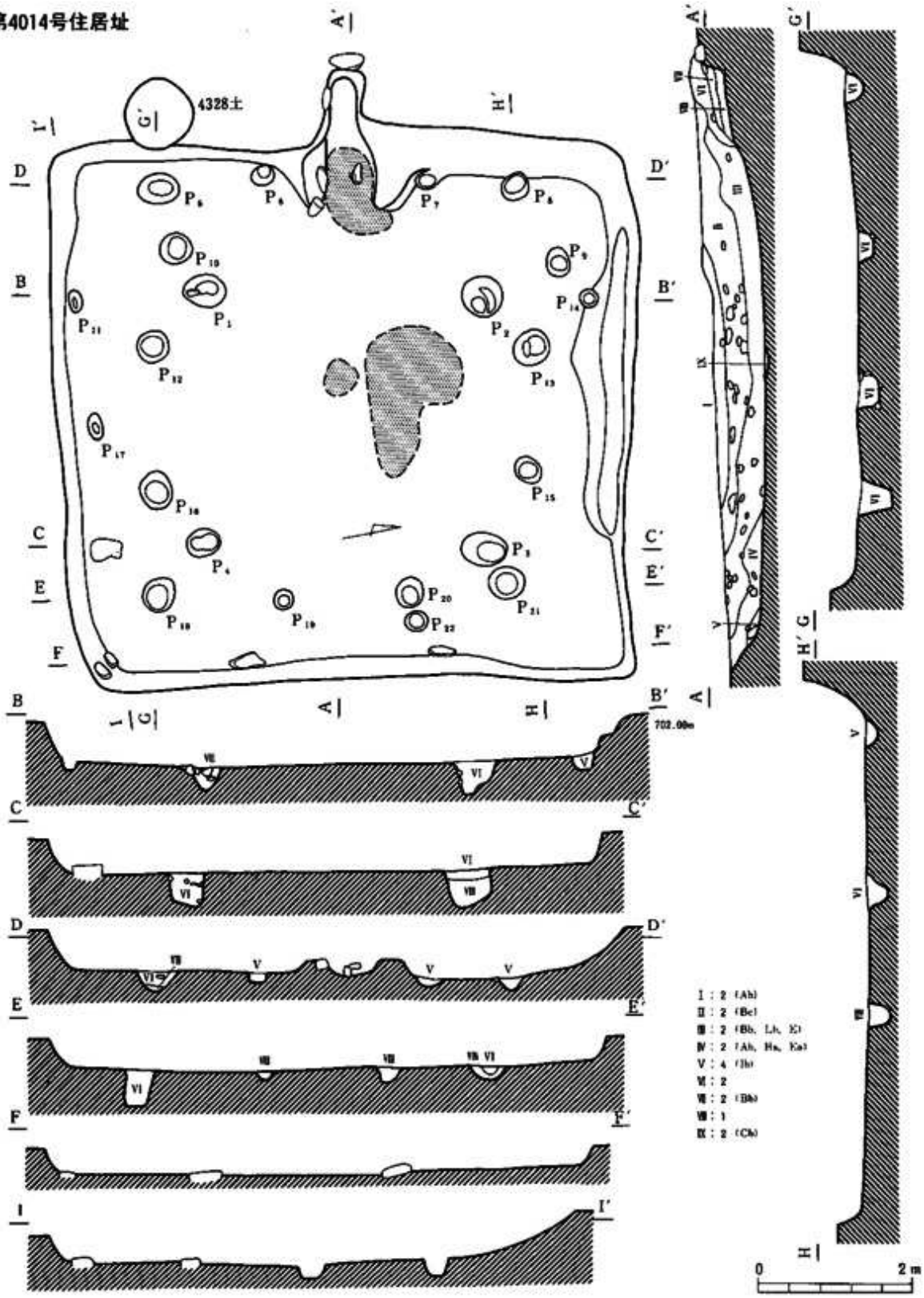

第4006・4007号住居址
4006住
4007住
4006住カマド
第4011号住居址
第4009号住居址
第4010号住居址
4052土
4011住カマド
0
1m
2m

図版6　住居址(3)


第4012号住居址
第4017号住居址
第4015号住居址
第4013号住居址
702.00m
702.10m
701.20m
701.70m
I : 2
II : 17
III : 2 (Hb)
IV : 11
V : 2 (Cb, Eb)
VI : 2 (e)
I : 2 (Ac - d)
II : 1 (Cb)
III : 5
IV : 3 (Ab)
I : 2 (Hb)
II : 2 (Cb)
III : 1 (Ab)
IV : 2 (Fe)
V : 2 (Hb, d)
I : 2 (Hb)
II : 2 (Hb, Ab)
III : 1 (Pb)
IV : 1 (Ab)
V : 3
0
2 m

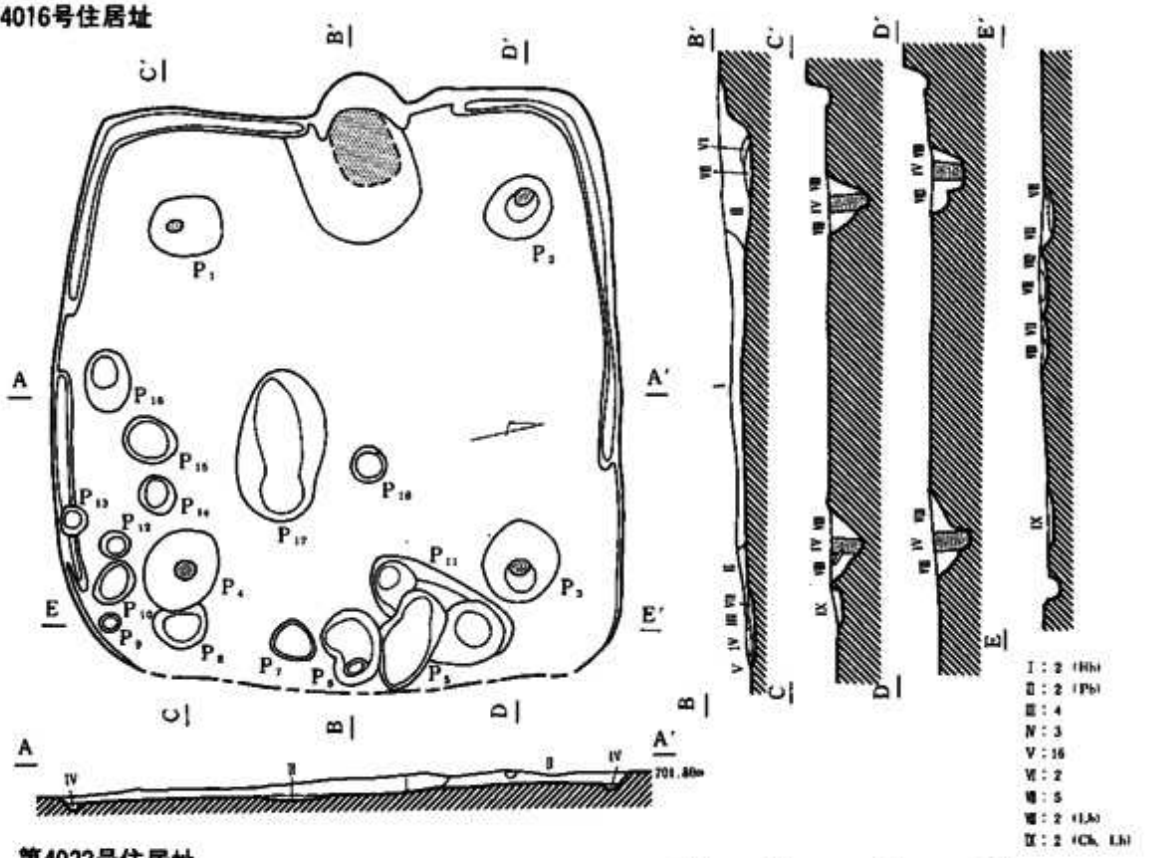
図版 7　住居址(4)

第4014号住居址

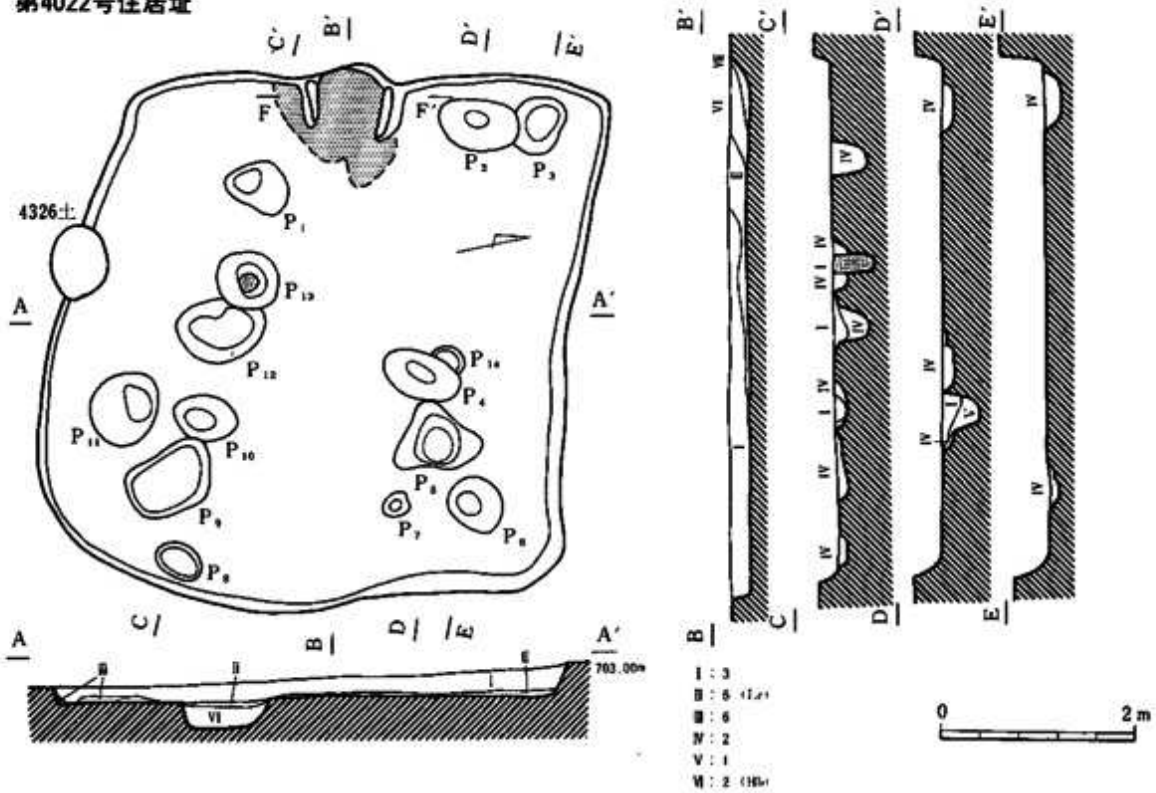


図版8　住居址(5)

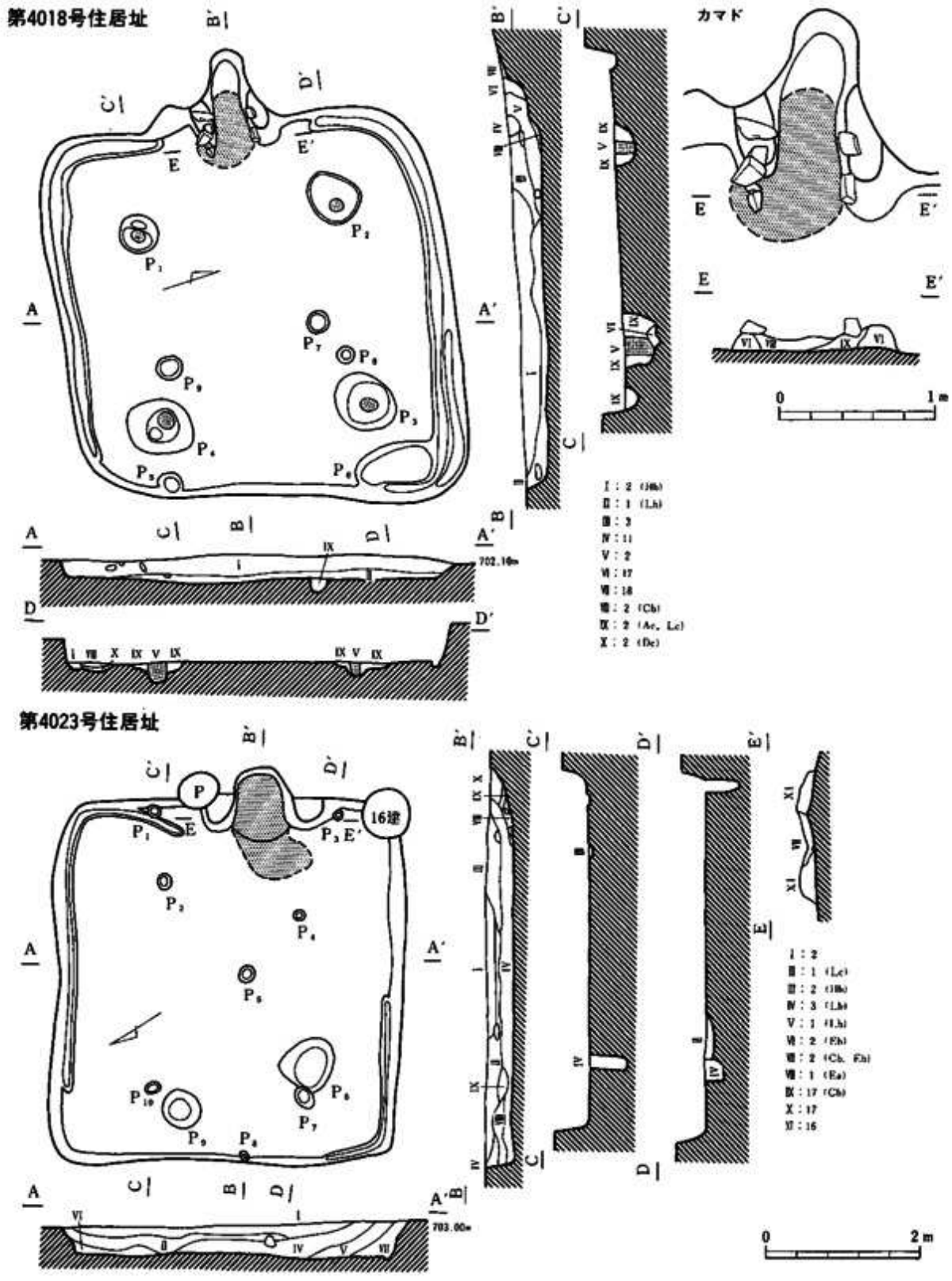
第4016号住居址



第4022号住居址

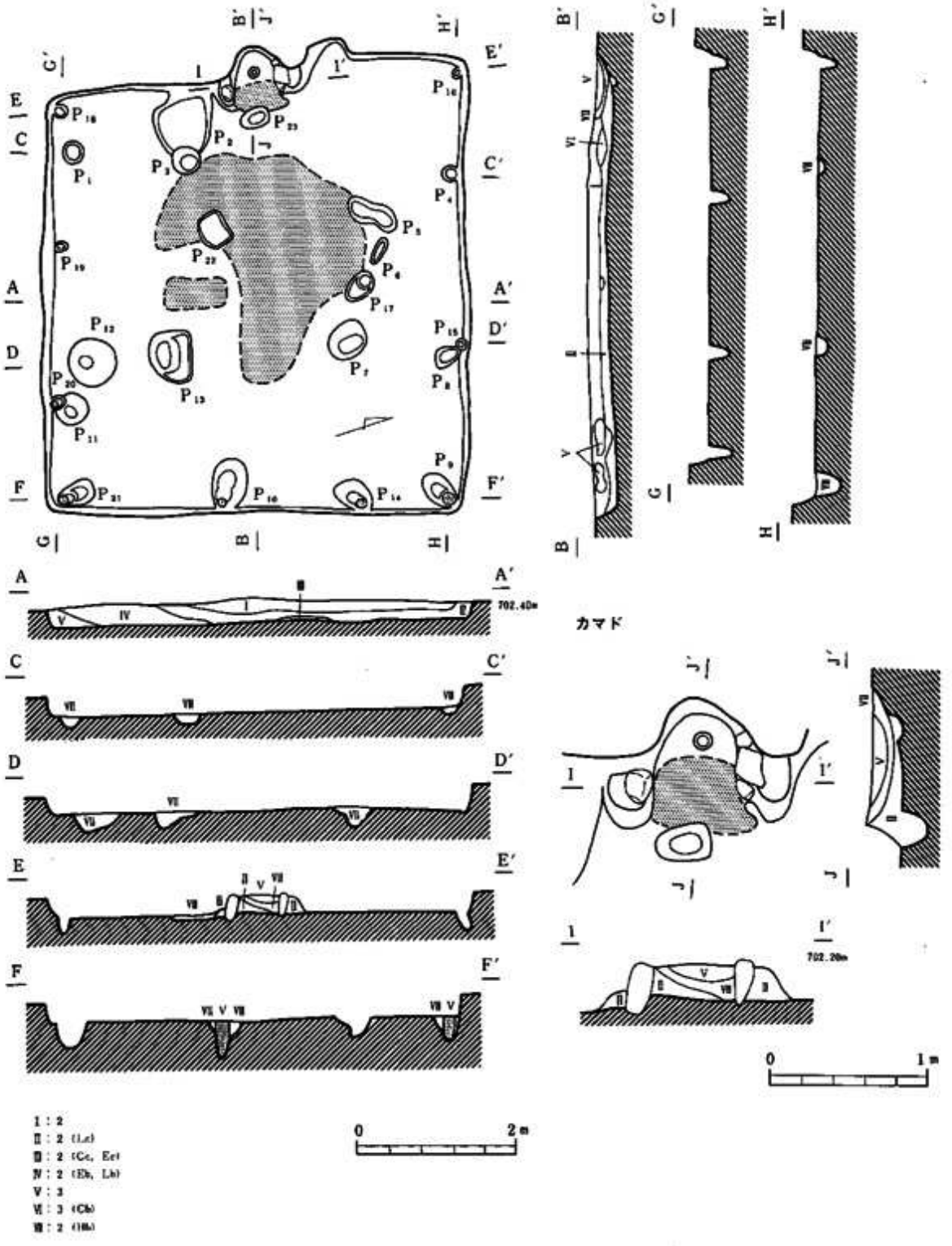


図版 9　住居址(6)



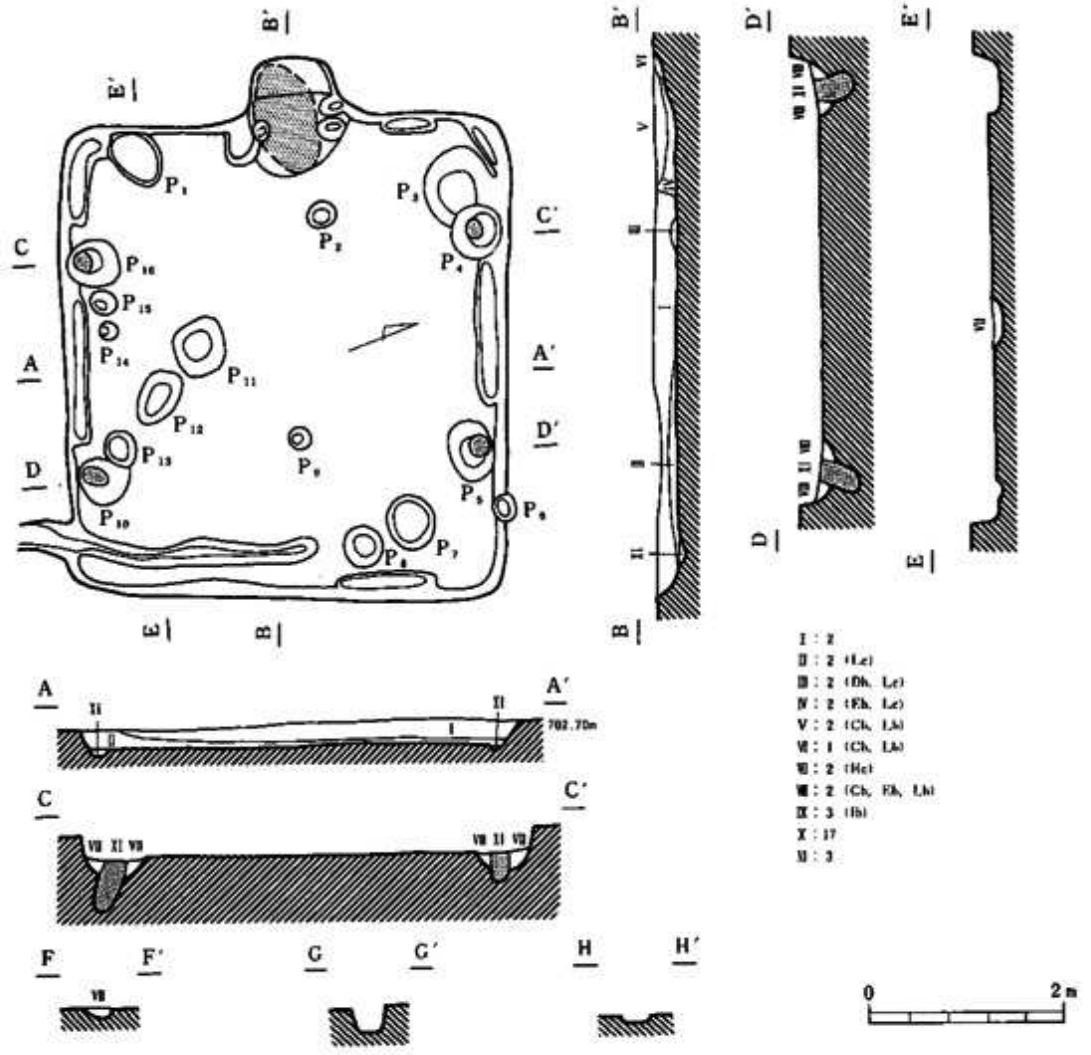
図版10　住居址(7)

第4019号住居址

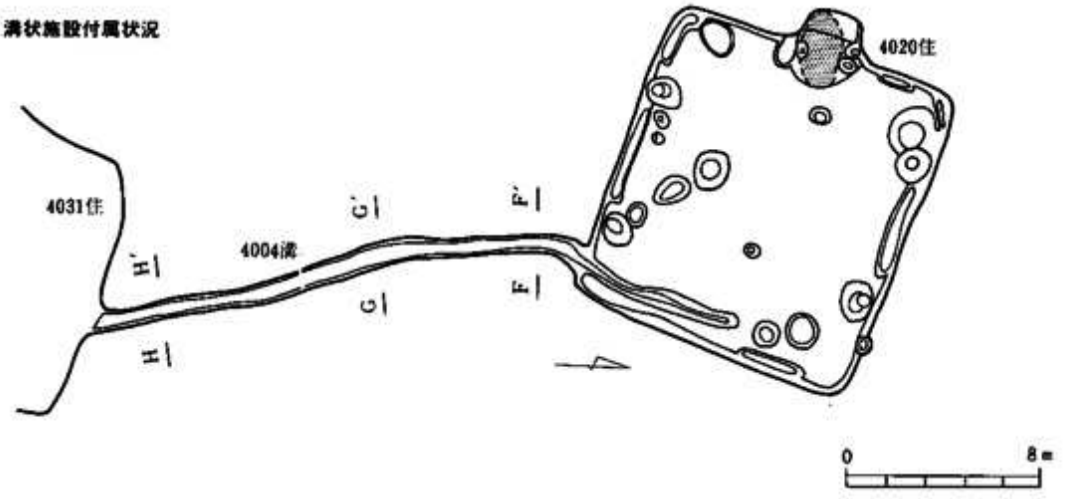


図版11　住居址(8)

第4020号住居址

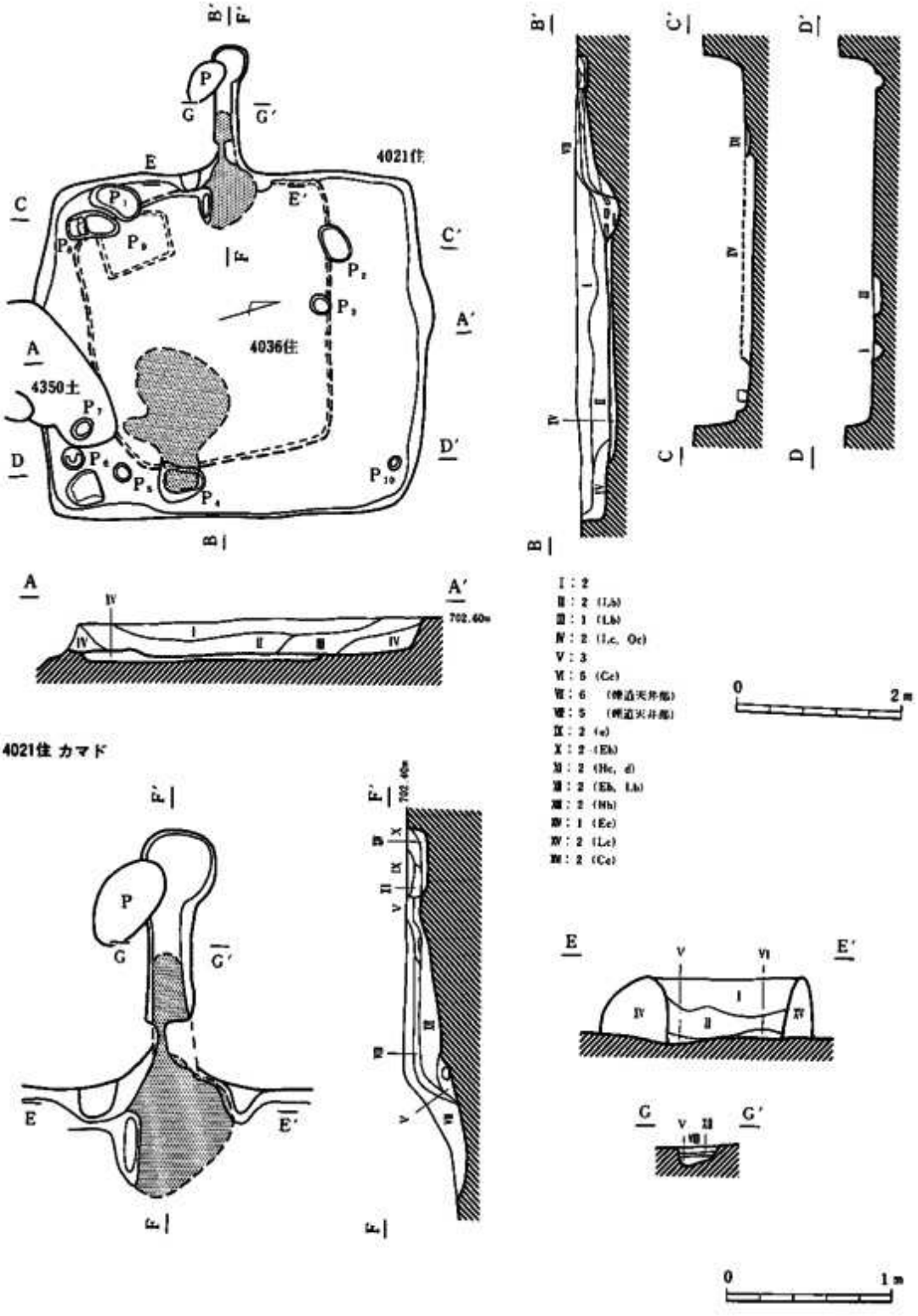


溝状施設付属状況



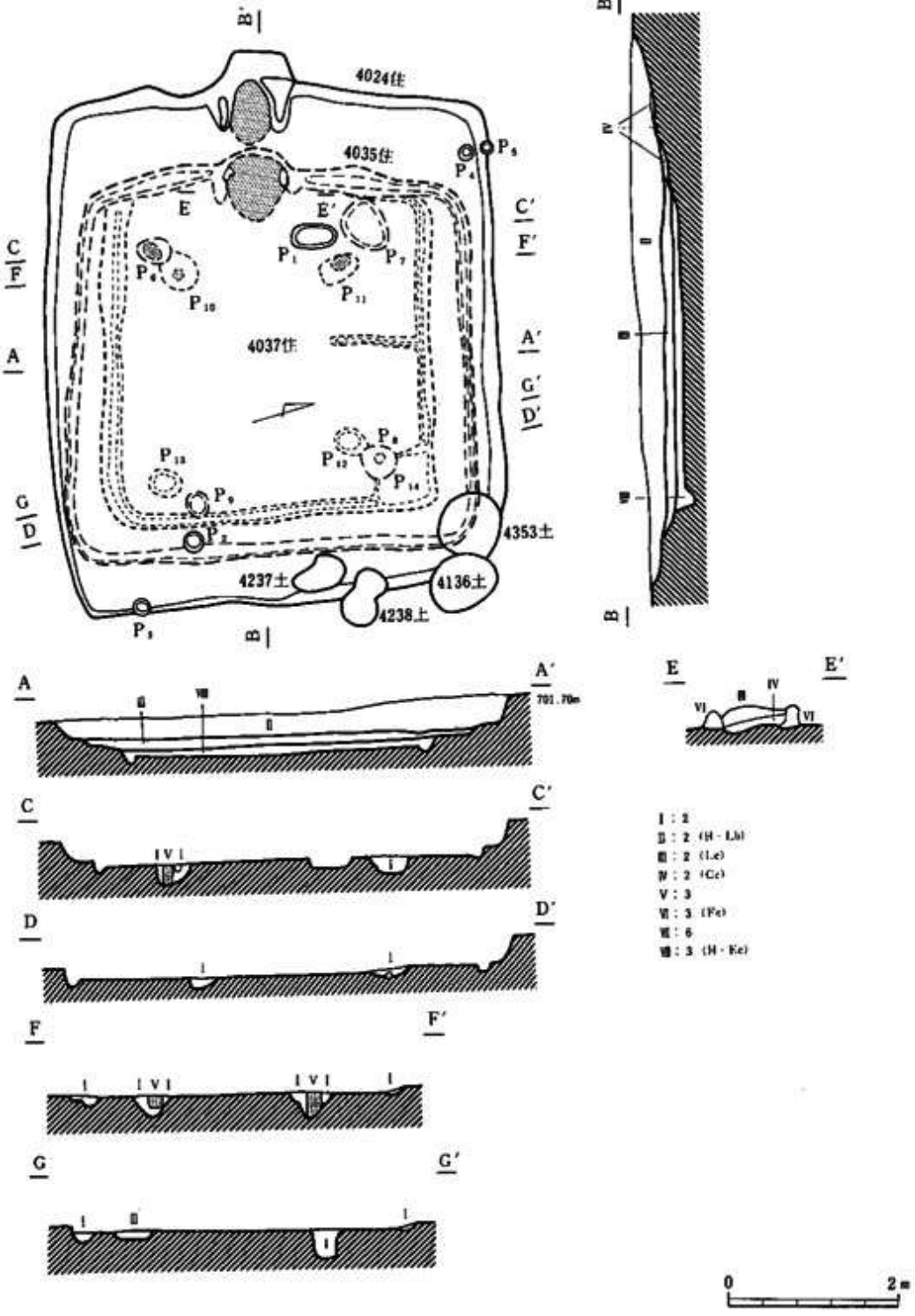
図版12　住居址(9)

第4021号・4036号住居址



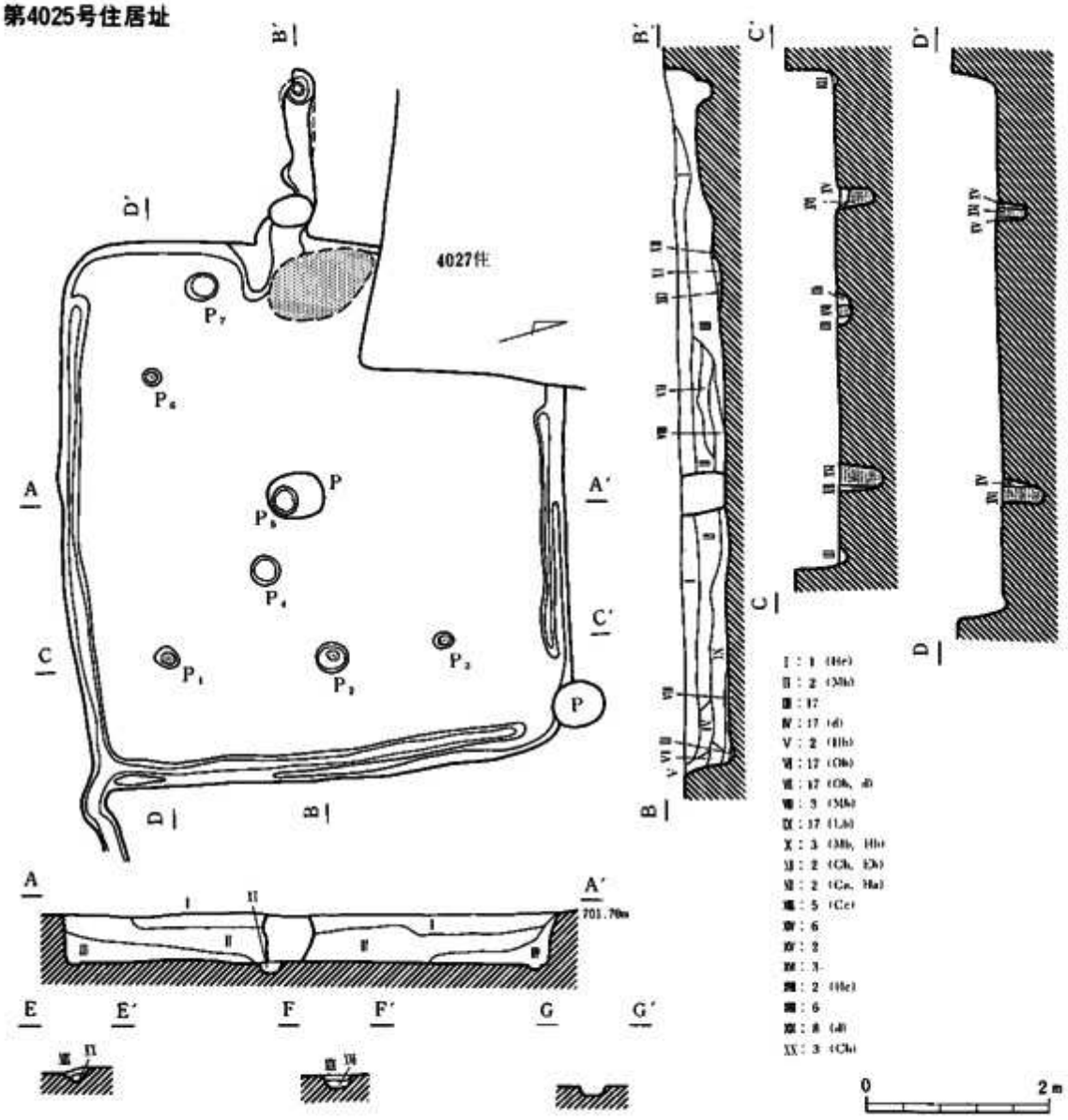
図版13　住居址(10)

第4024号・4035号・4037号住居址

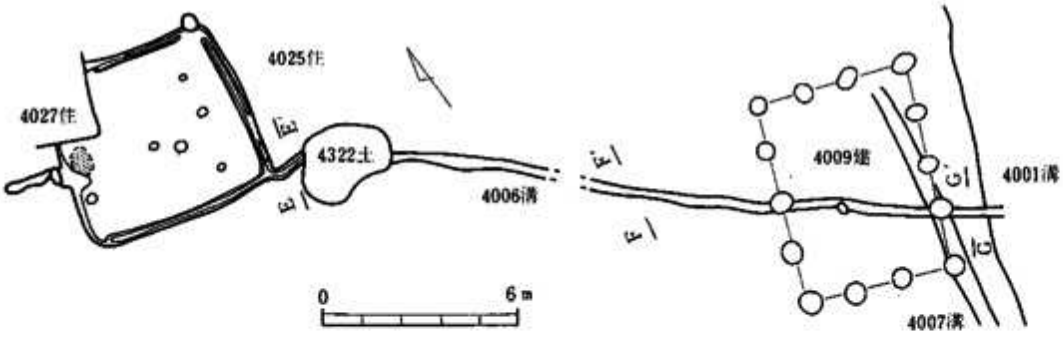


図版14　住居址(11)

第4025号住居址

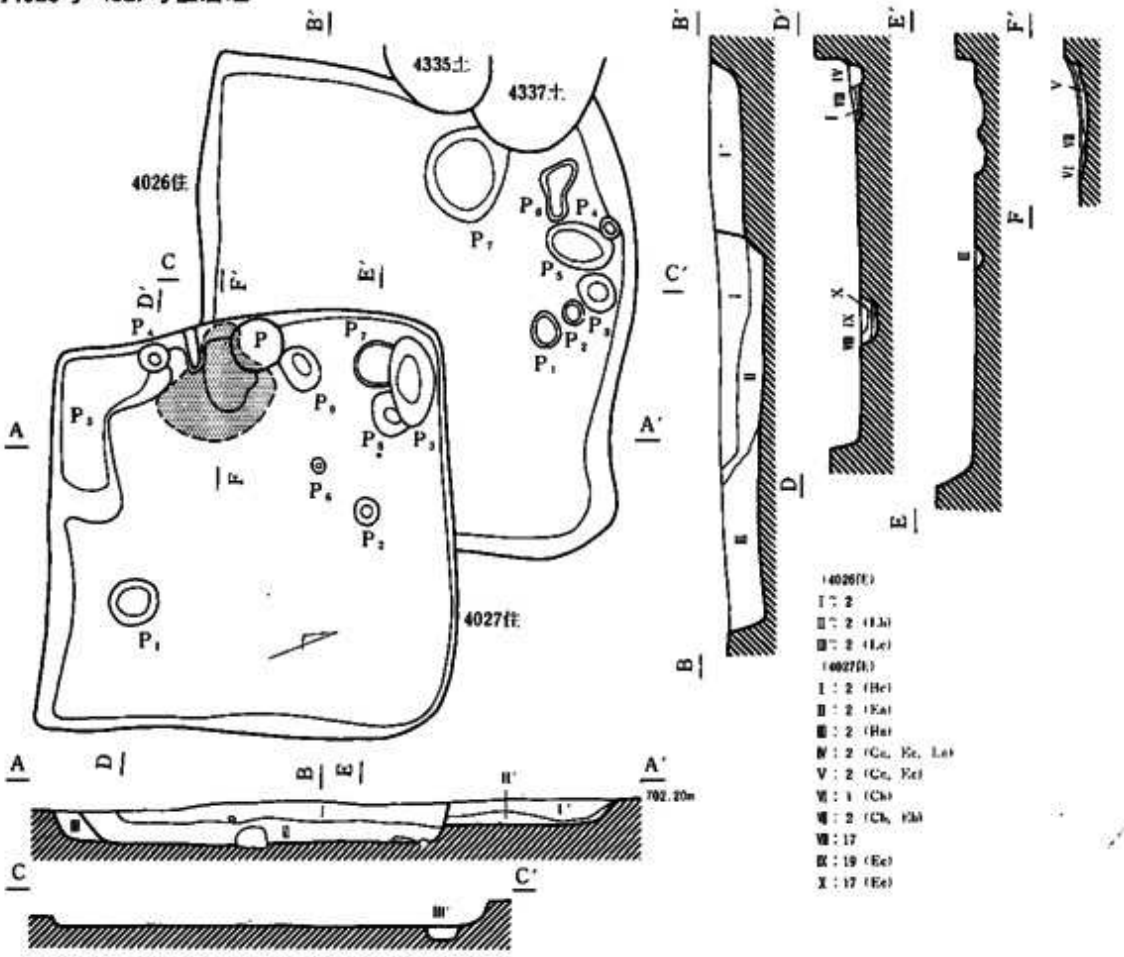


溝状施設付属状況

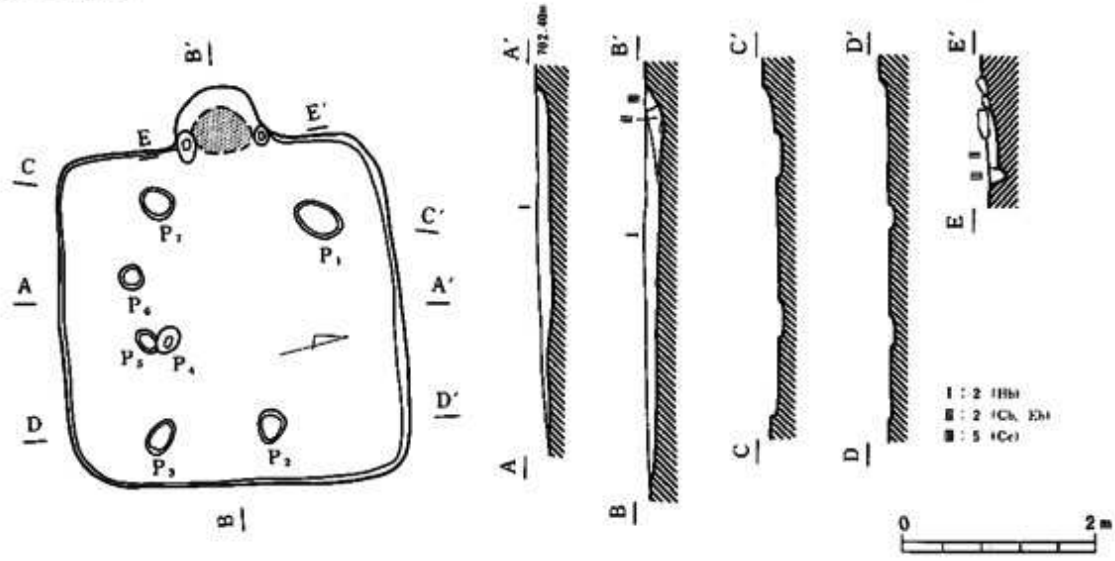


図版15　住居址(12)

第4026号・4027号住居址

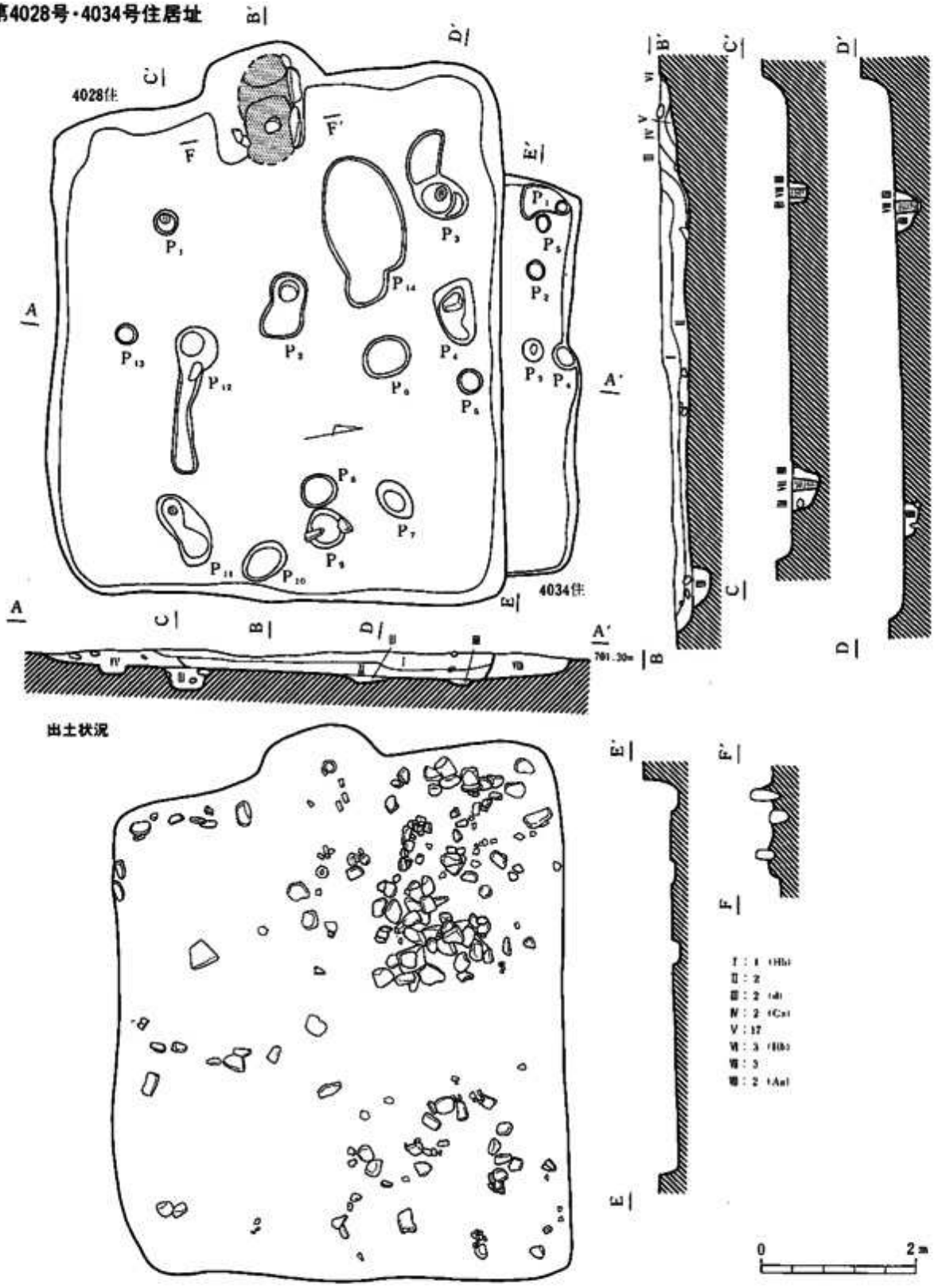


第4032号住居址



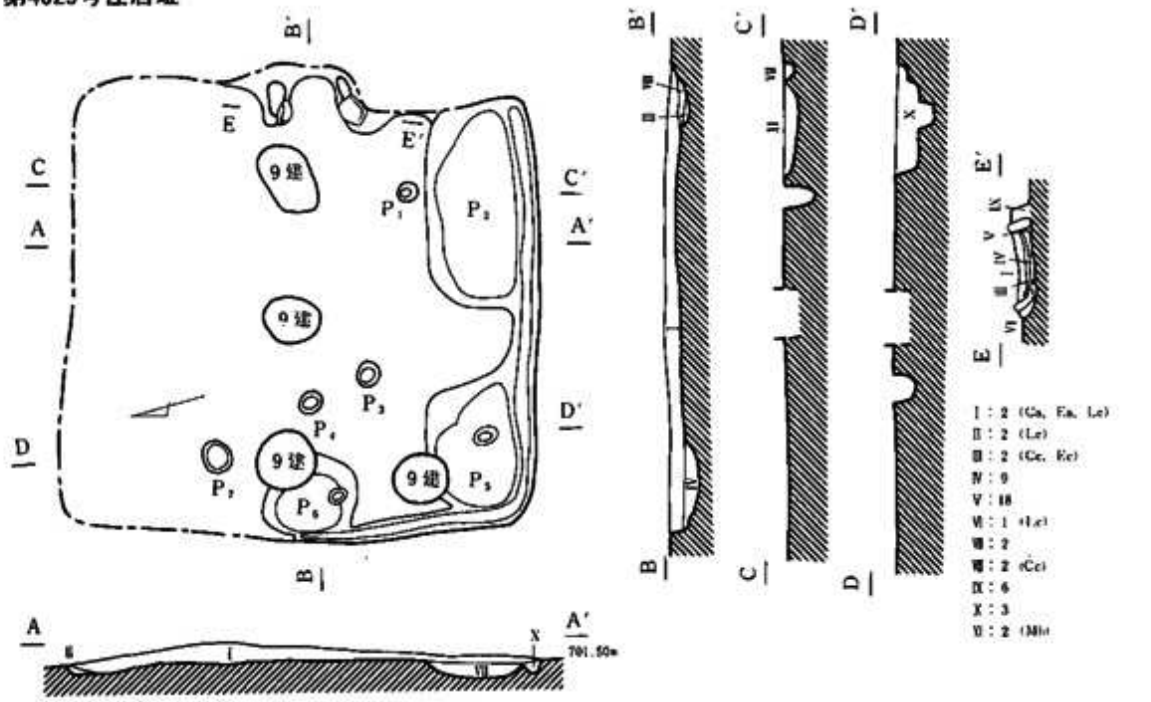
図版16　住居址(13)

第4028号・4034号住居址

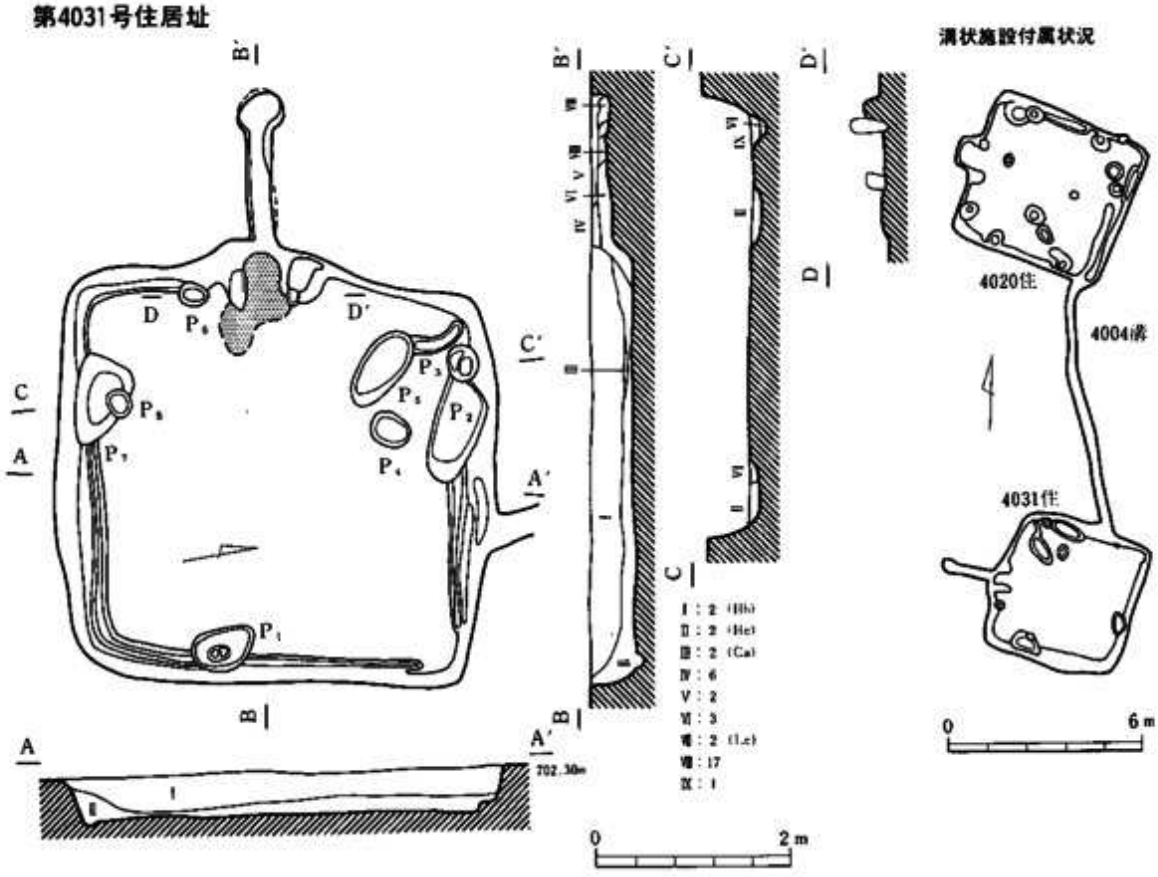


図版17　住居址(14)

第4029号住居址

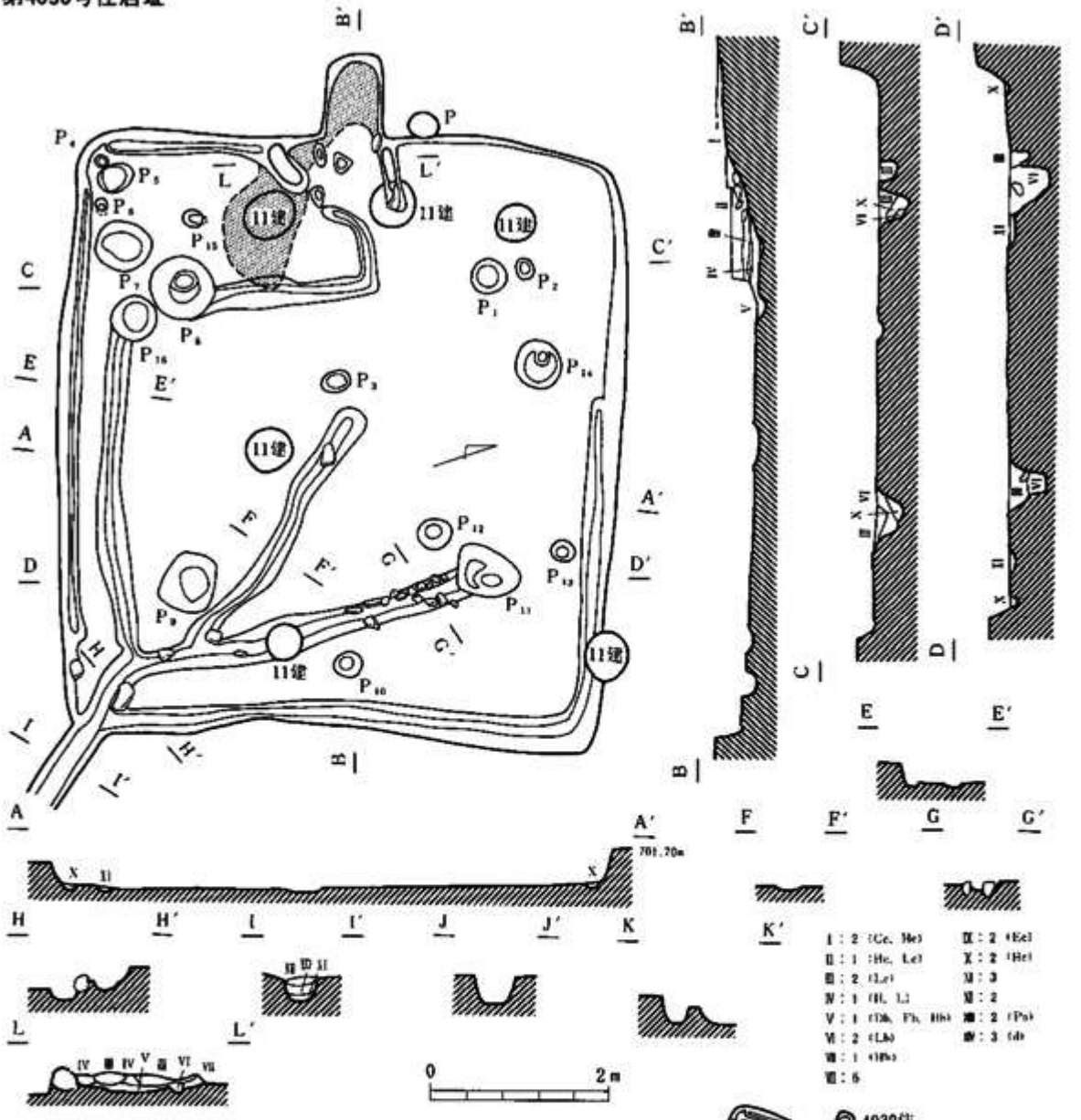


第4031号住居址

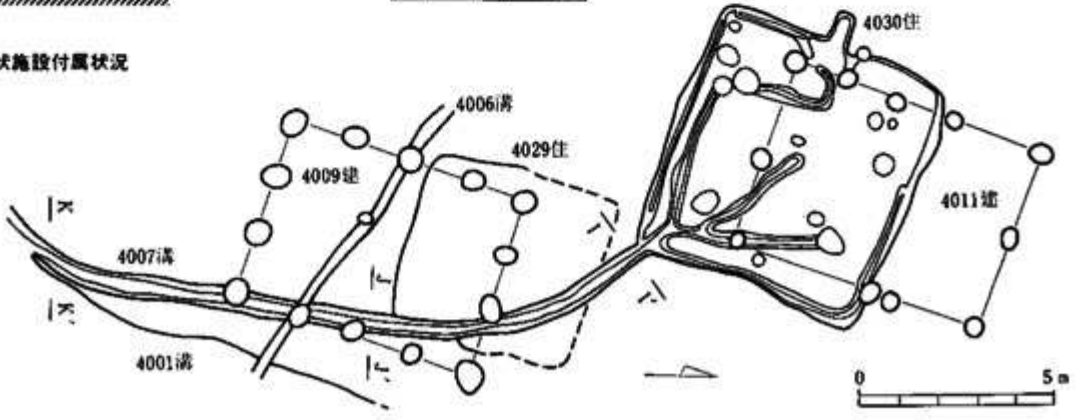


図版18　住居址(15)

第4030号住居址

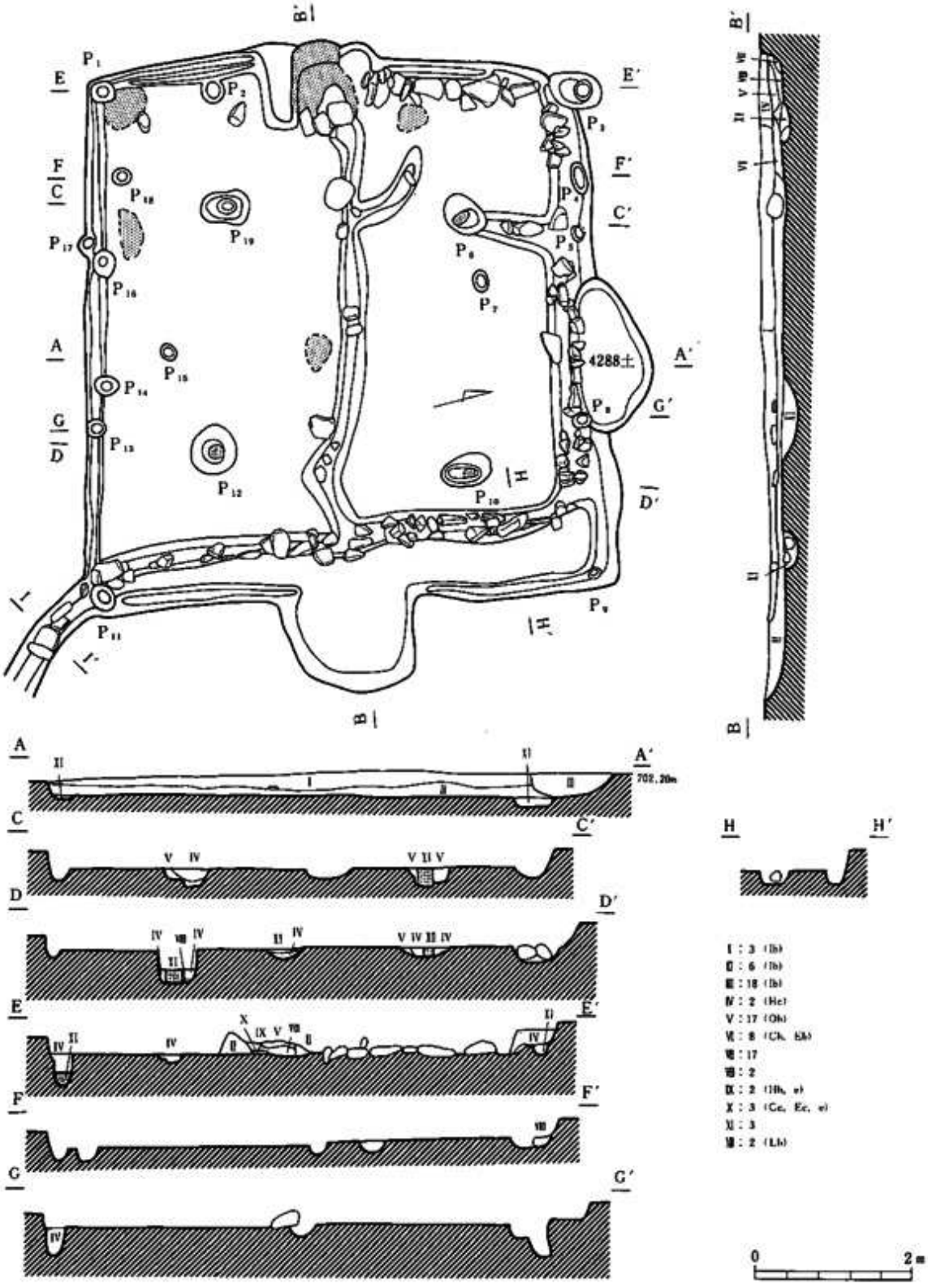


溝状施設付属状況



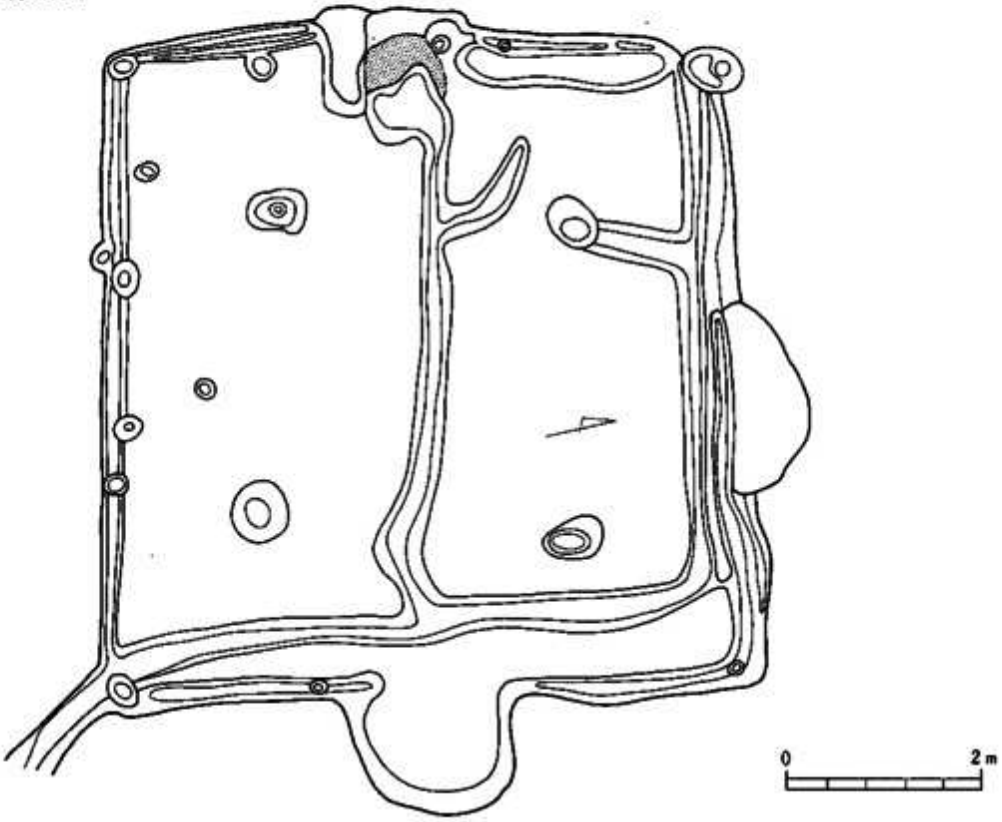
図版19　住居址(16)

第4033号住居址

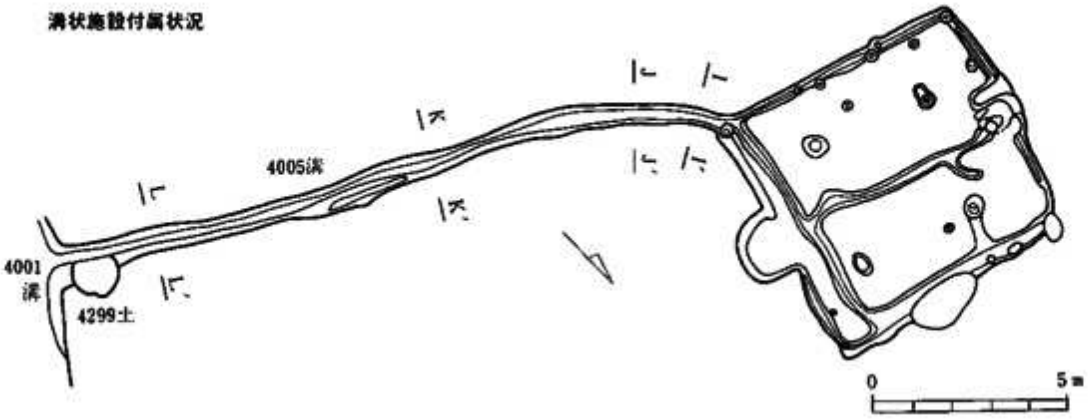


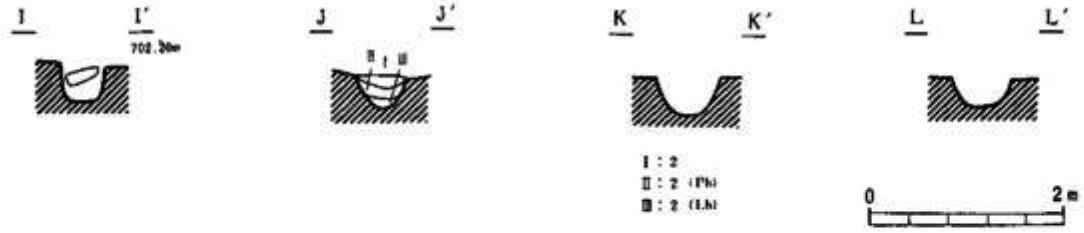
図版20　住居址(17)

4033住完掘状況



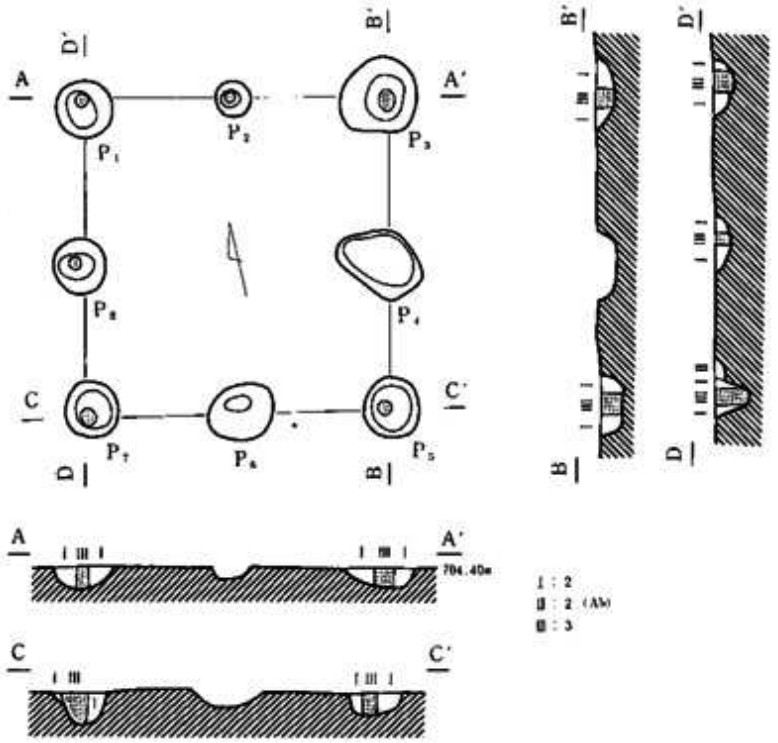
溝状施設付属状況



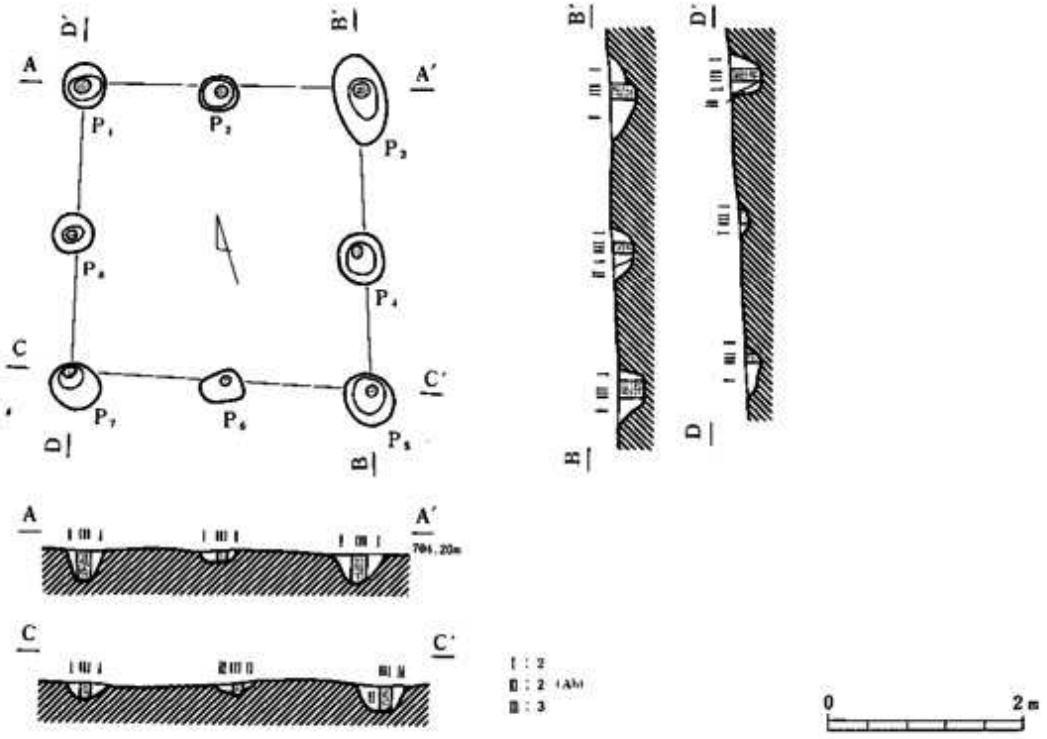


図版21　住居址(18)

第4001号建物址

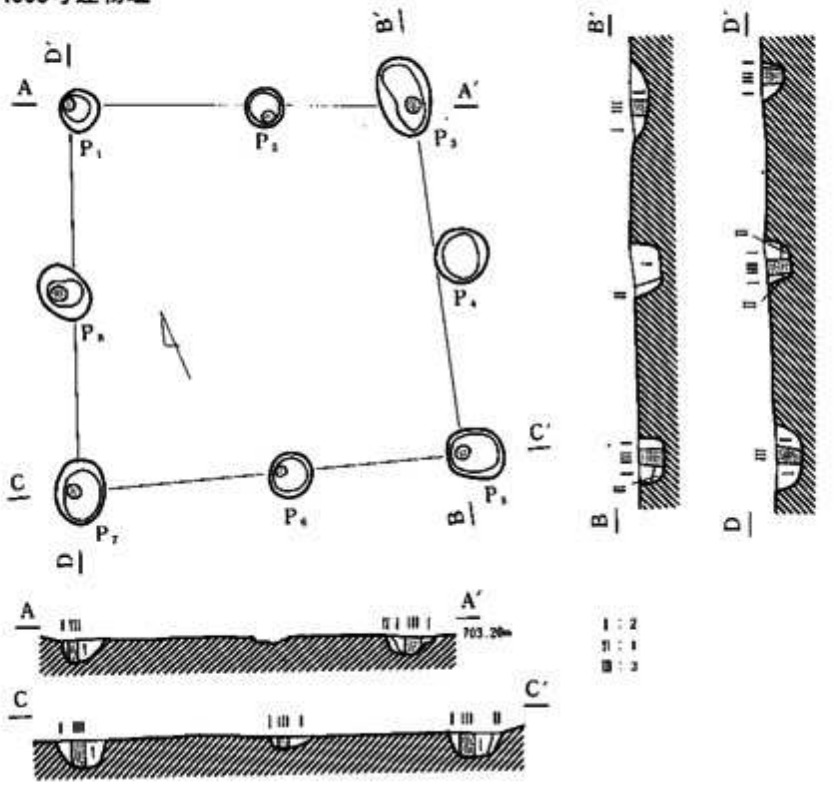


第4002号建物址

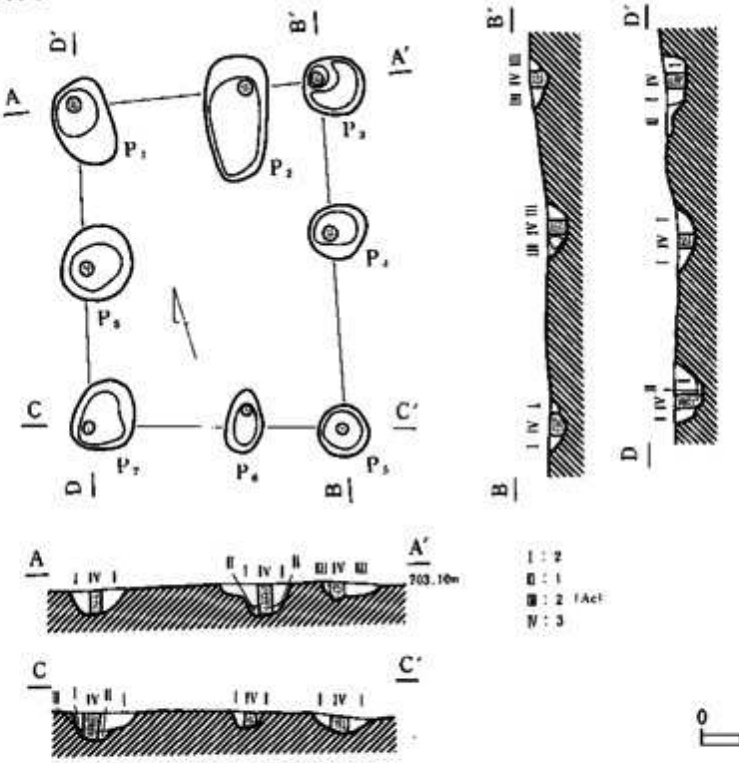


図版22　建物址(1)

第4003号建物址

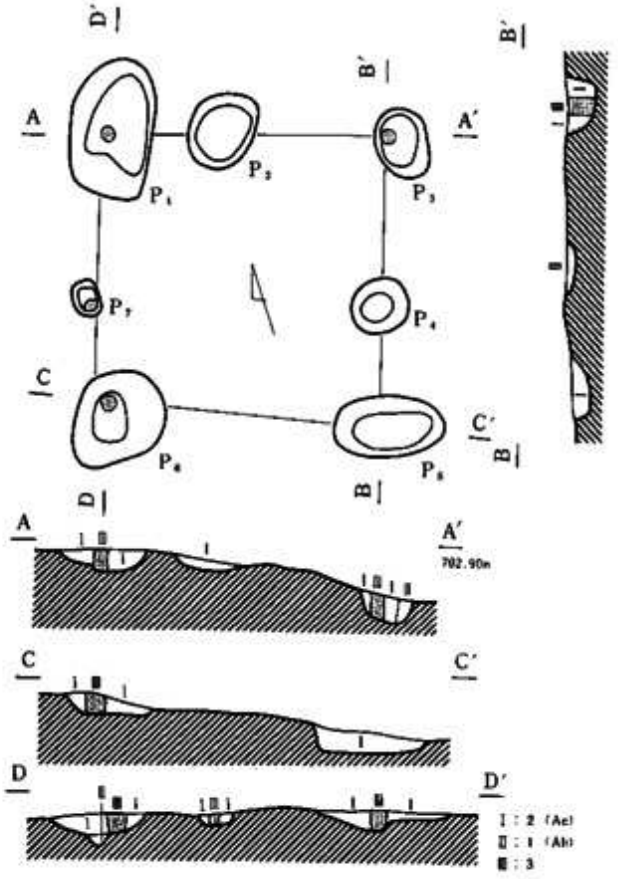


第4004号建物址

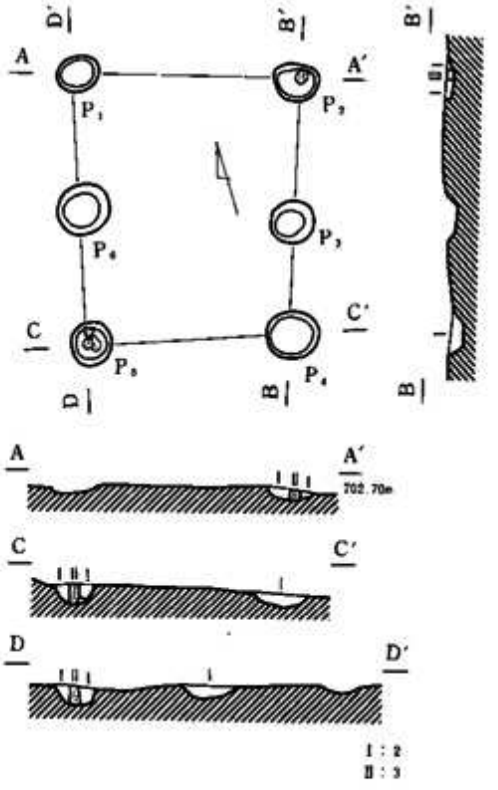


図版23　建物址(2)

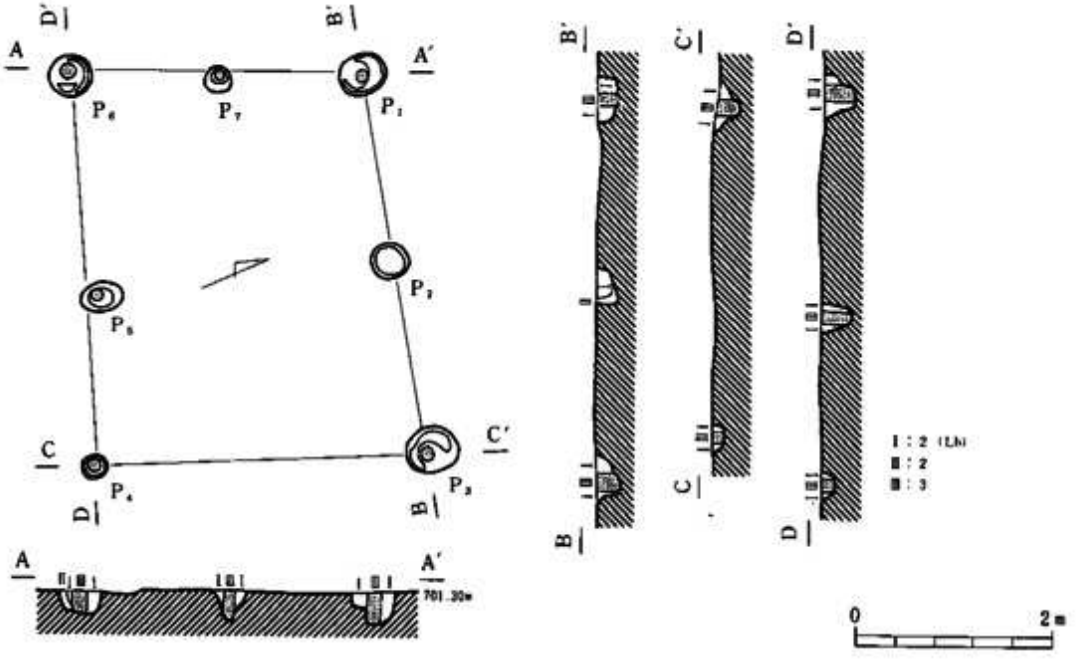
第4005号建物址



第4006号建物址

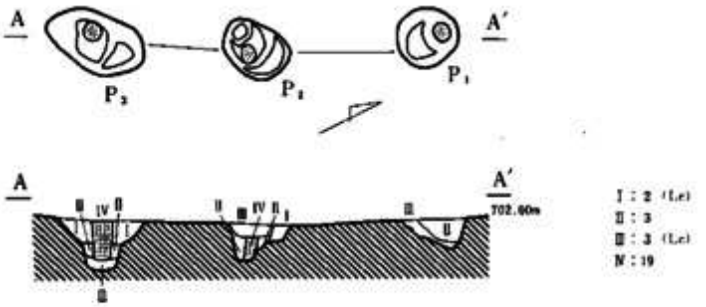


第4007号建物址

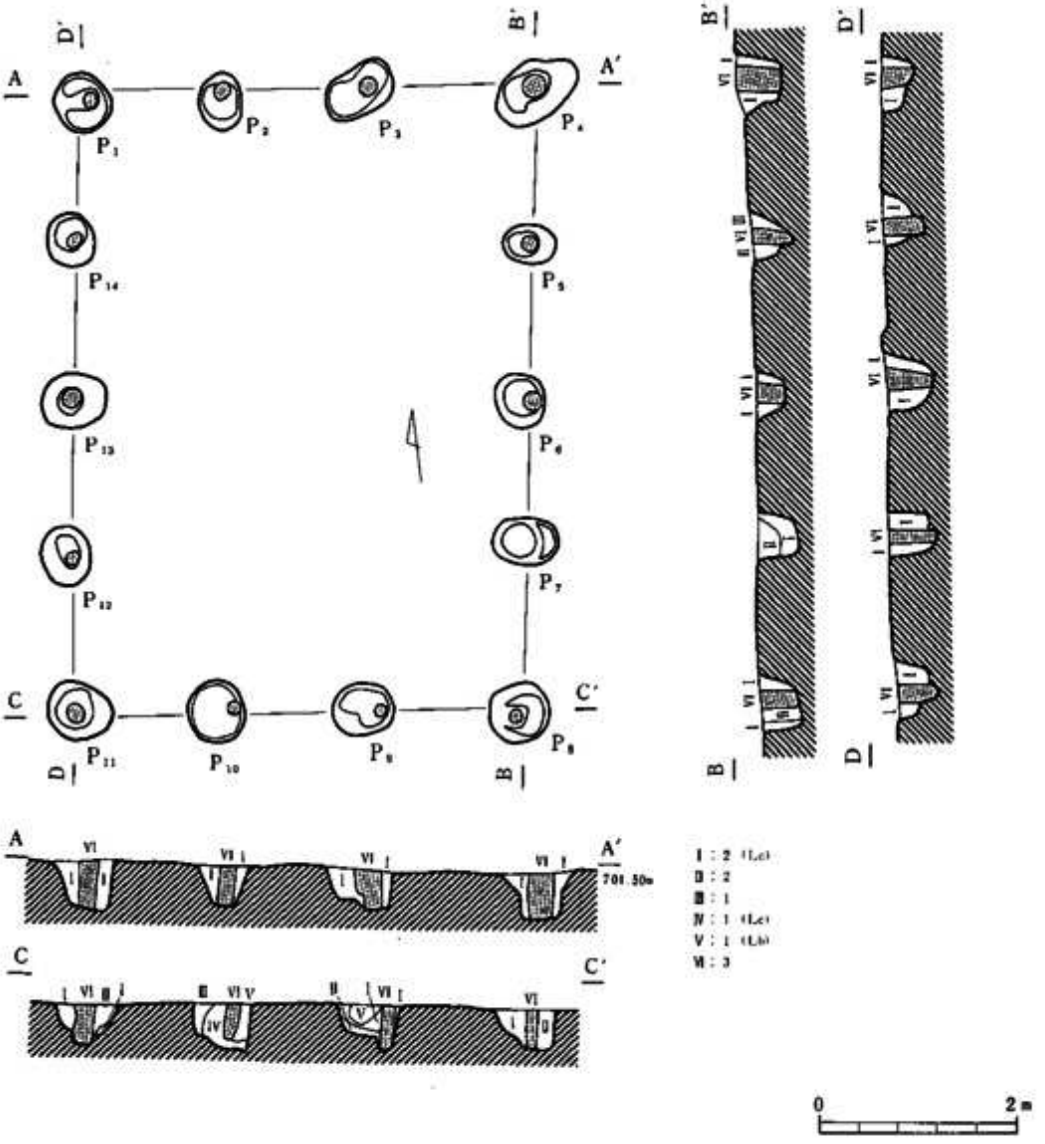


図版24　建物址(3)

第4008号建物址

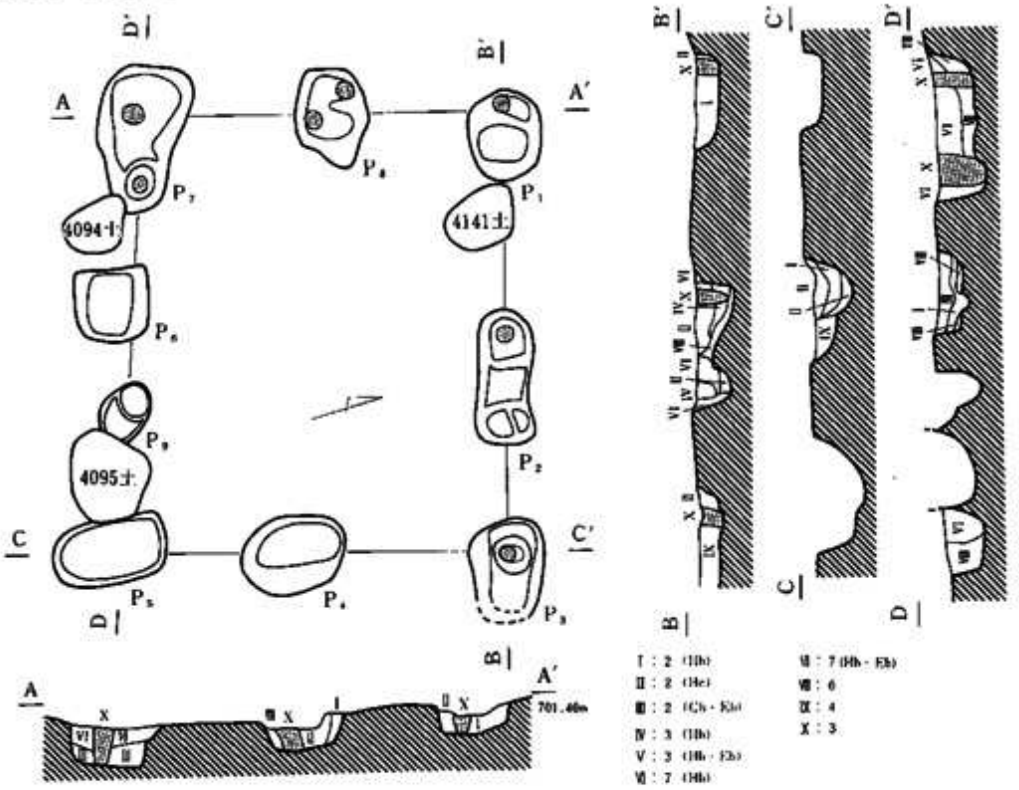


第4009号建物址

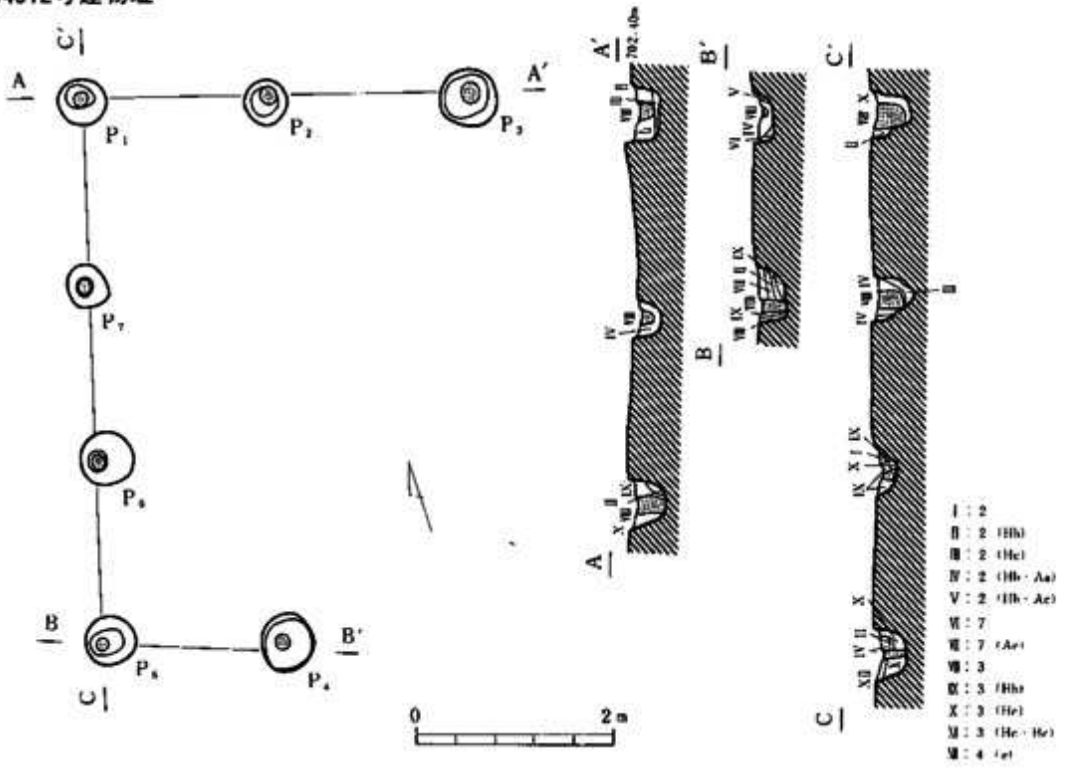


図版25　建物址(4)

第4010号建物址

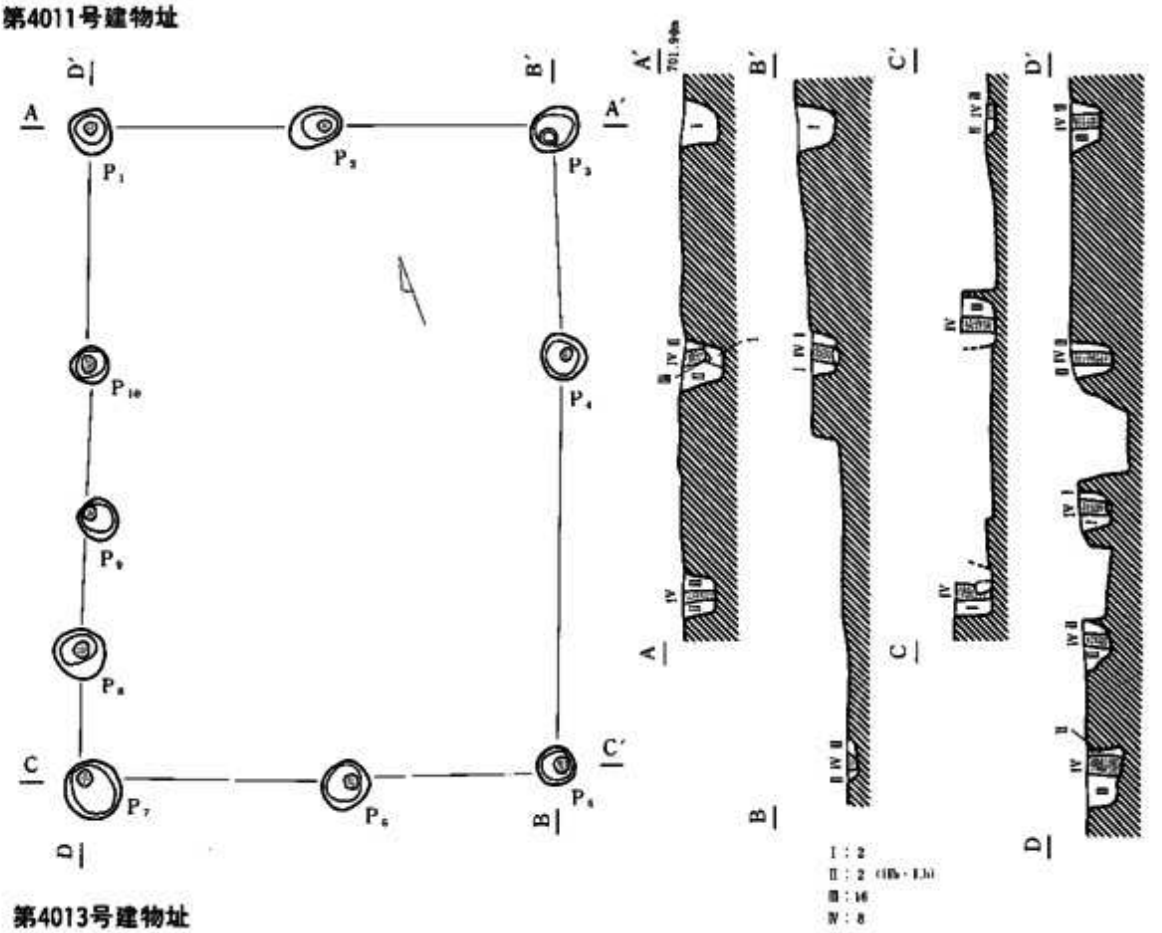


第4012号建物址

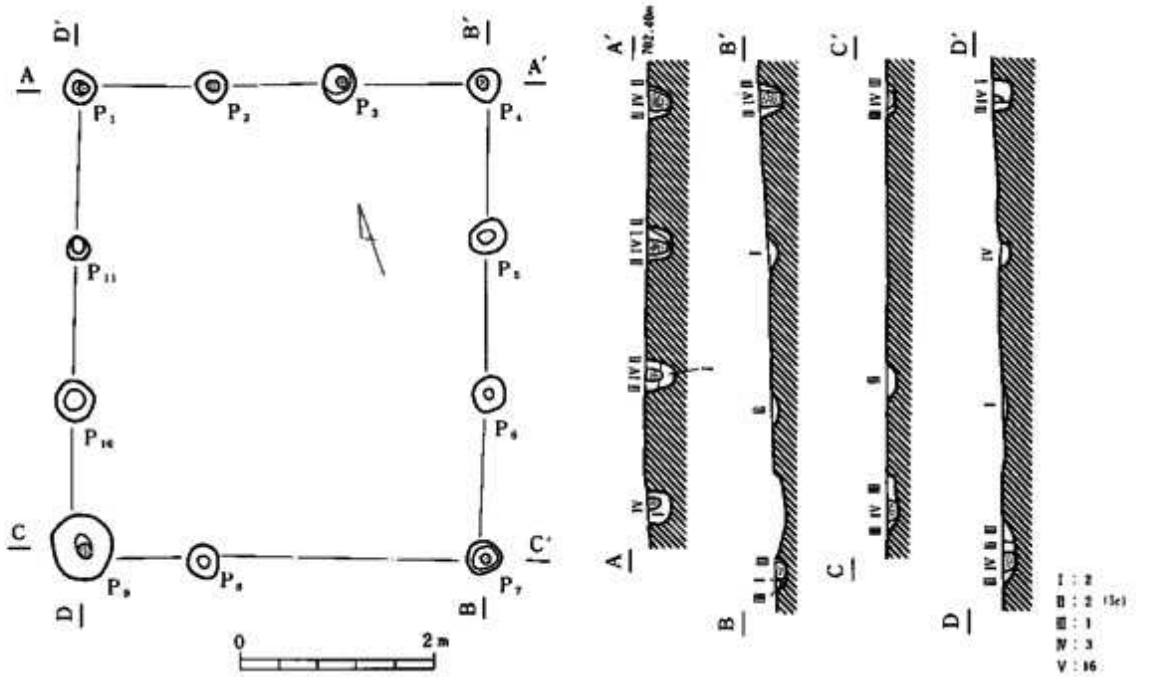


図版26　建物址(5)

第4011号建物址

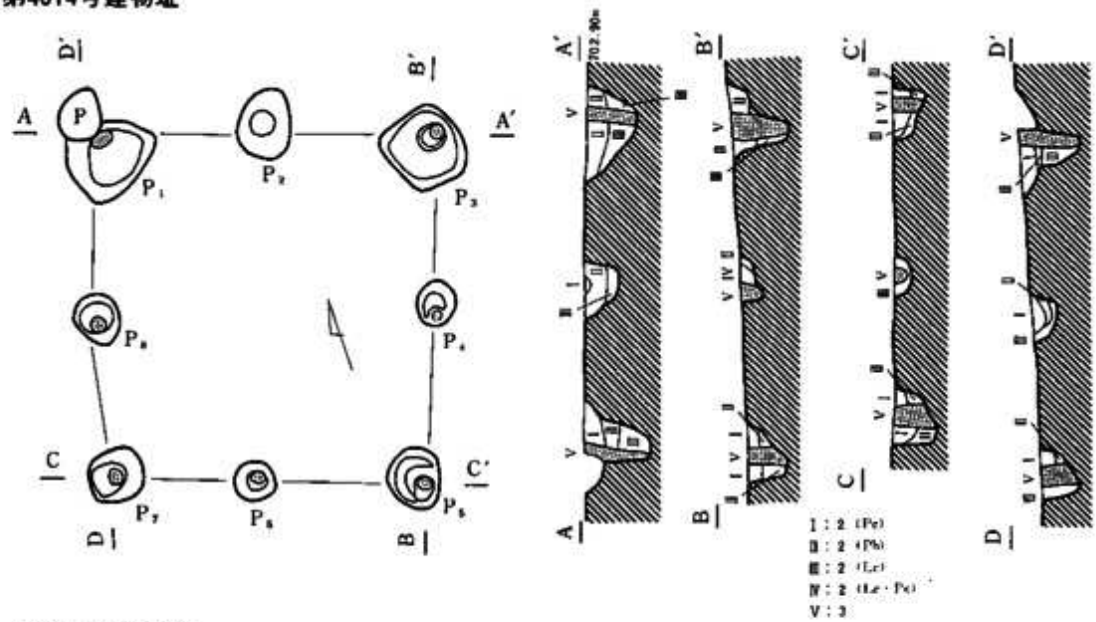


第4013号建物址

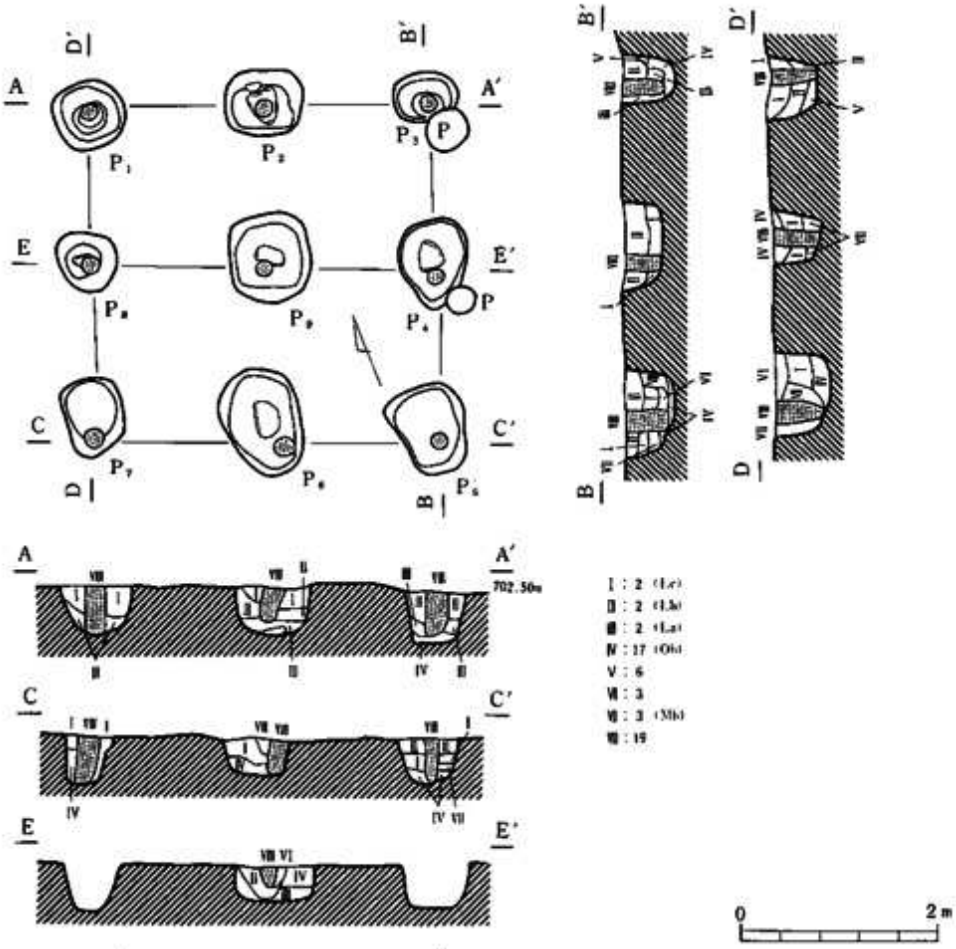


図版27　建物址(6)

第4014号建物址

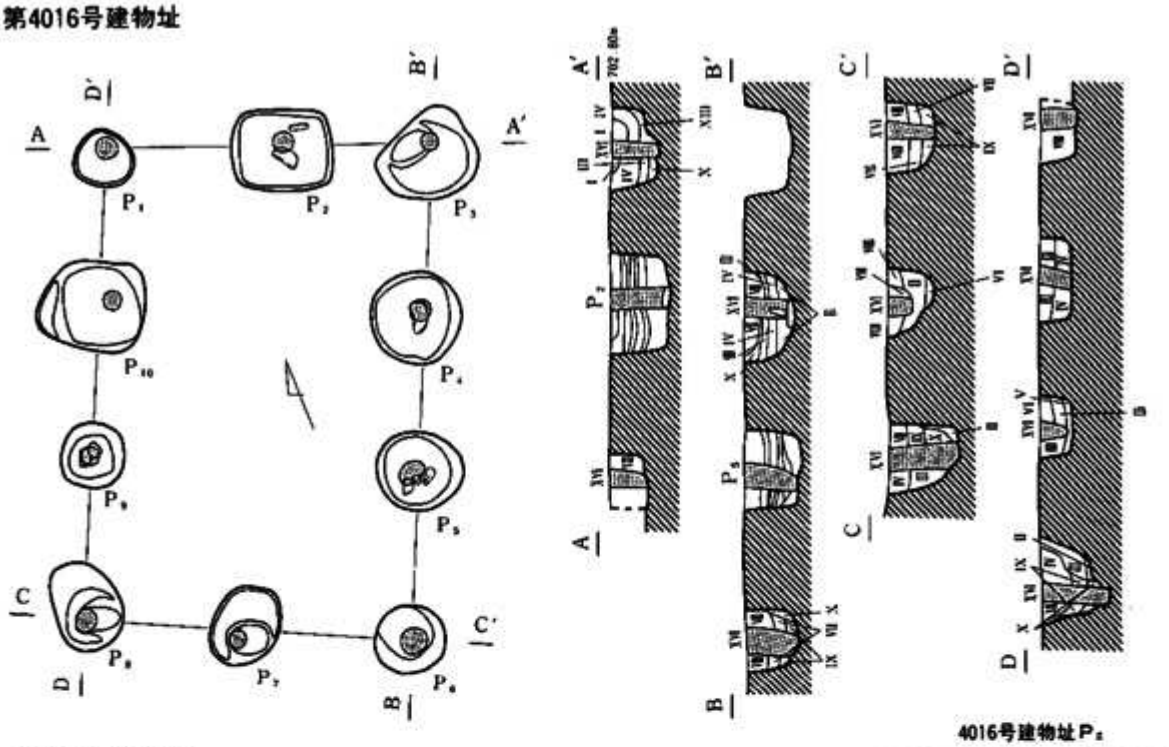


第4015号建物址

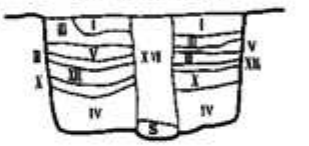


図版28　建物址(7)

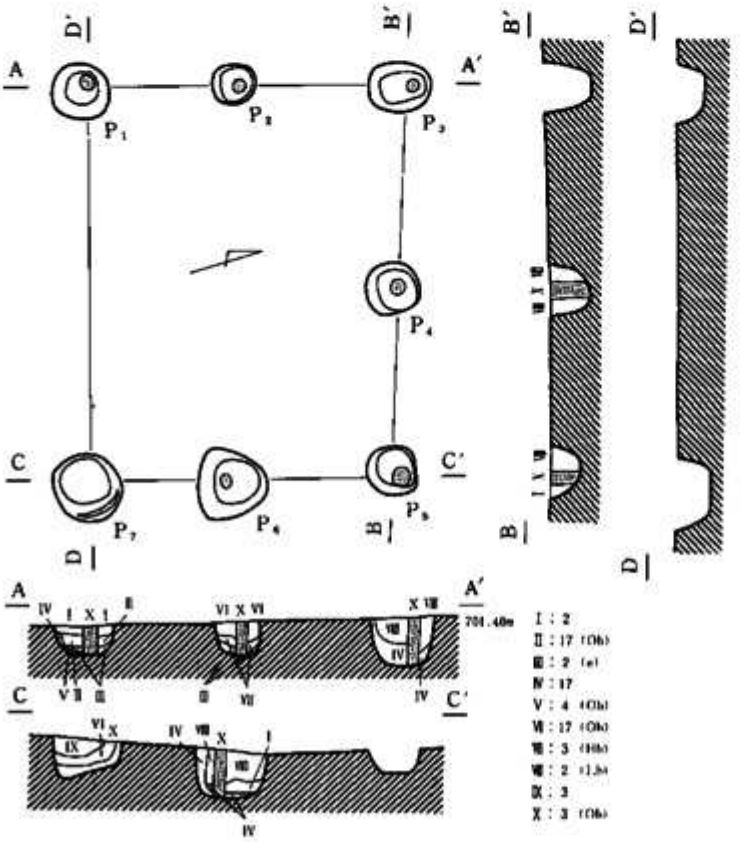
第4016号建物址



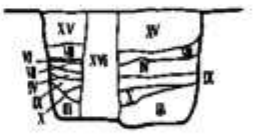
4016号建物址 P_2



第4017号建物址

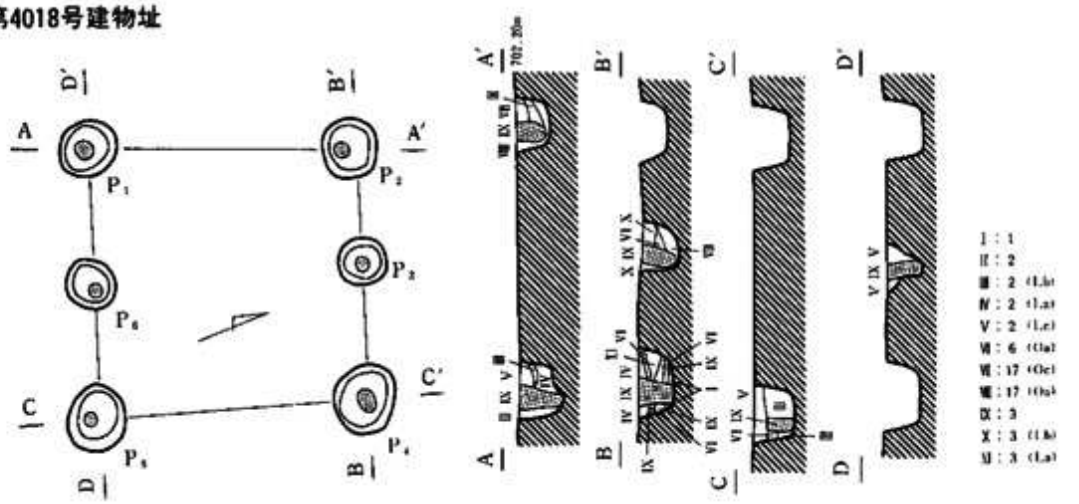


4016号建物址 P_5

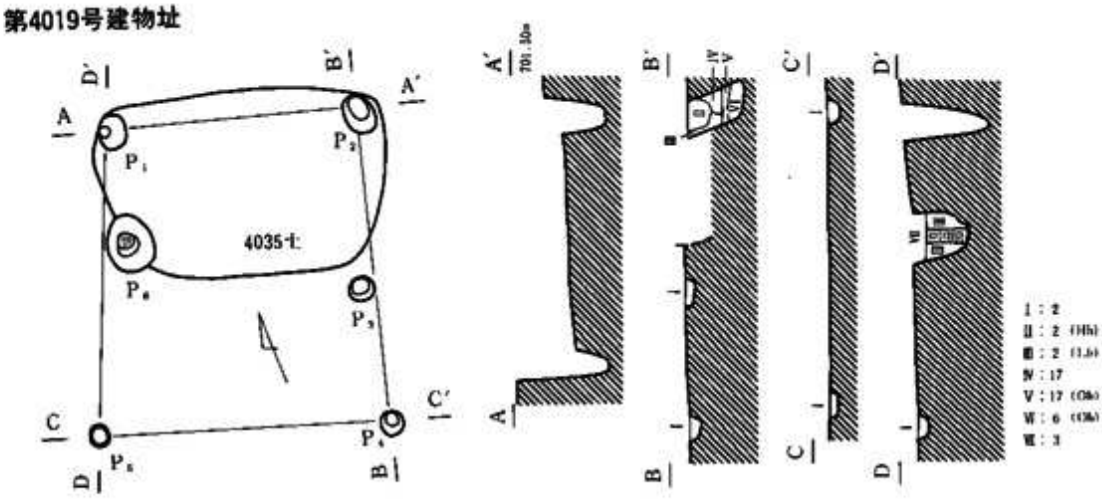


図版29　建物址(8)

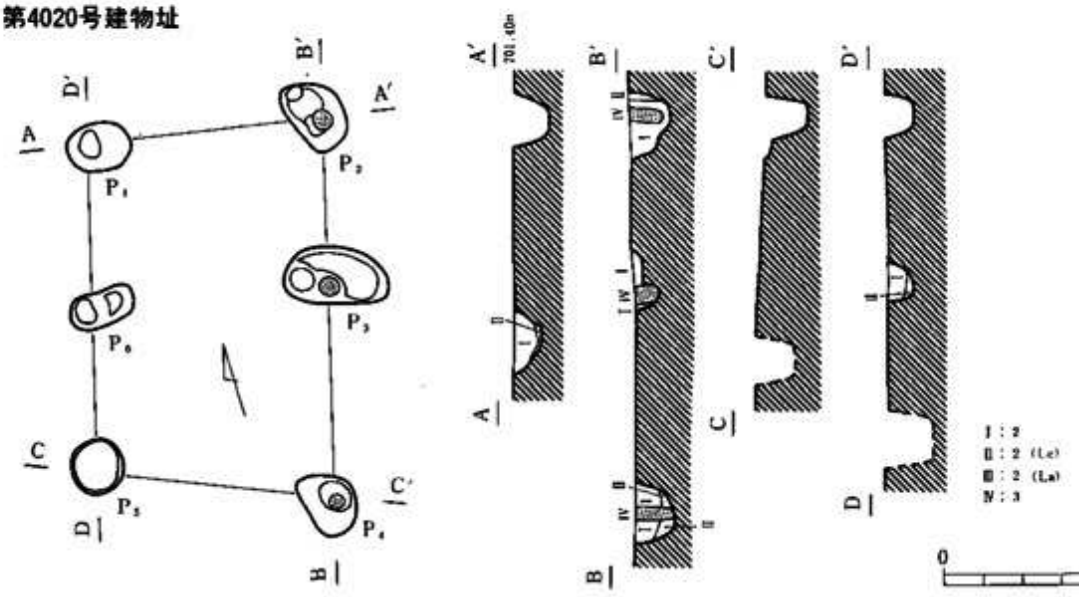
第4018号建物址



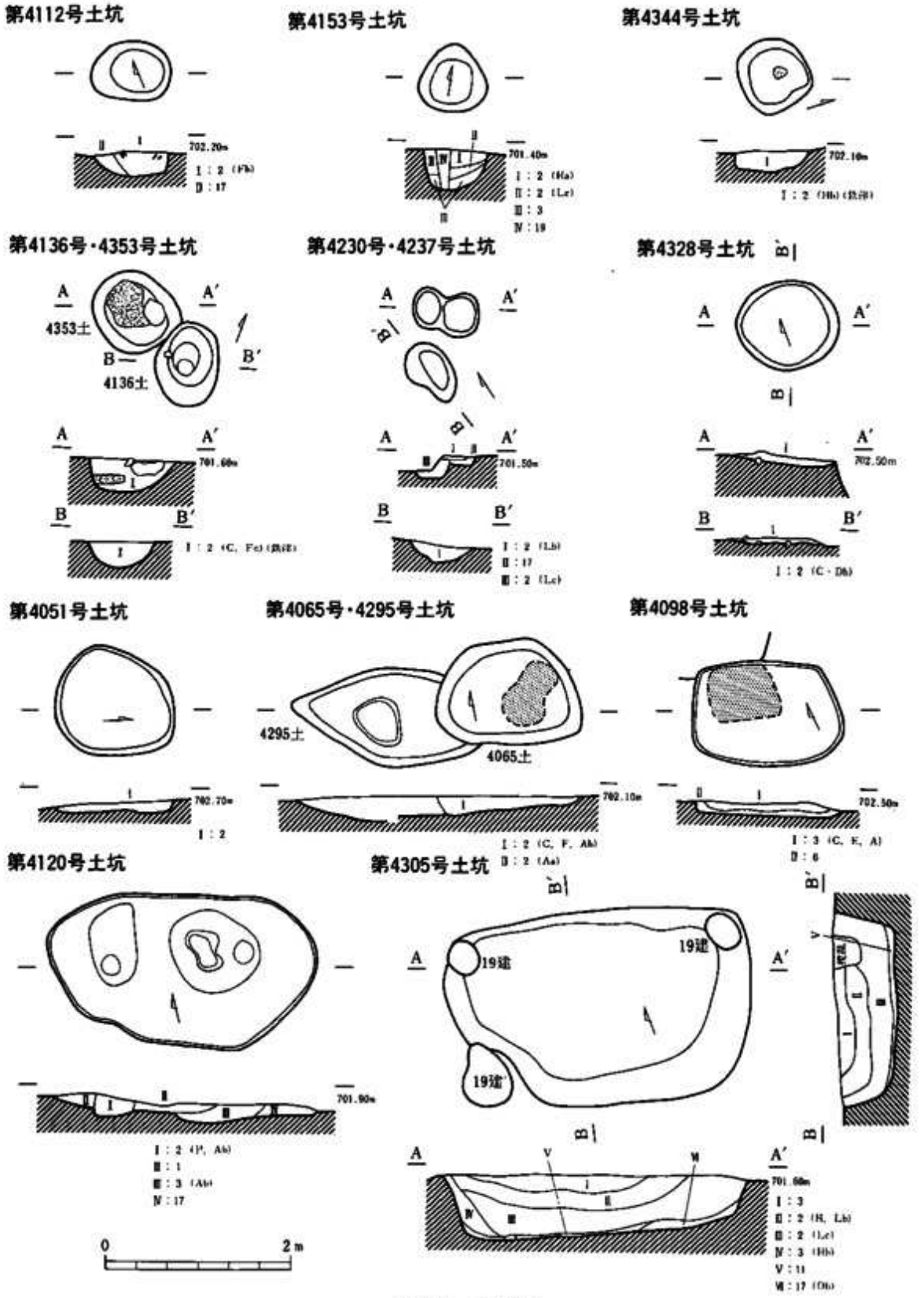
第4019号建物址



第4020号建物址

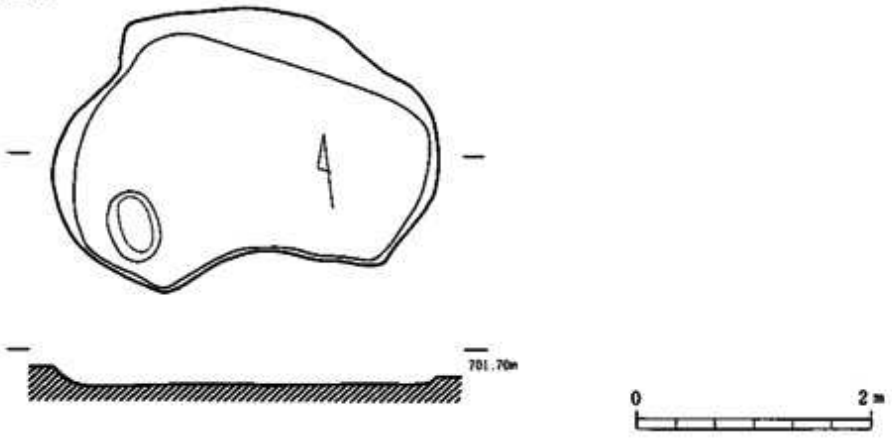


図版30　建物址(9)

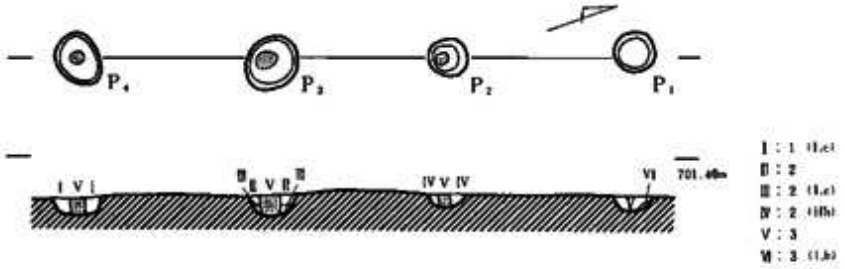

第4112号土坑
702.20m
Ⅰ：2（Fb）
Ⅱ：17
第4153号土坑
701.40m
Ⅰ：2（Ha）
Ⅱ：2（Lc）
Ⅲ：3
Ⅳ：19
第4344号土坑
702.10m
Ⅰ：2（Hb）（鉄滓）
第4136号・4353号土坑
4353土
4136土
701.60m
Ⅰ：2（C，Fe）（鉄滓）
第4230号・4237号土坑
701.50m
Ⅰ：2（Lb）
Ⅱ：17
Ⅲ：2（Lc）
第4328号土坑
702.50m
Ⅰ：2（C・Db）
第4051号土坑
702.70m
Ⅰ：2
第4065号・4295号土坑
4295土
4065土
702.10m
Ⅰ：2（C，F，Ab）
Ⅱ：2（Aa）
第4098号土坑
702.50m
Ⅰ：3（C，F，A）
Ⅱ：6
第4120号土坑
701.90m
Ⅰ：2（P，Ab）
Ⅱ：1
Ⅲ：3（Ab）
Ⅳ：17
0
2m
第4305号土坑
19建
19建
19建
701.60m
Ⅰ：3
Ⅱ：2（H，Lb）
Ⅲ：2（Lc）
Ⅳ：3（Hb）
Ⅴ：11
Ⅵ：17（Db）

図版31　土坑(1)

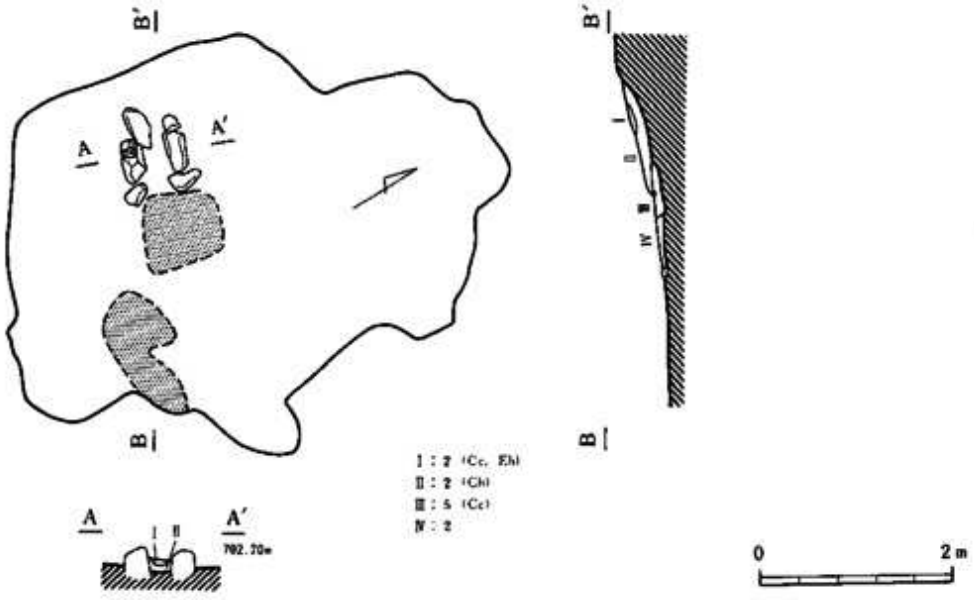
第4322号土坑



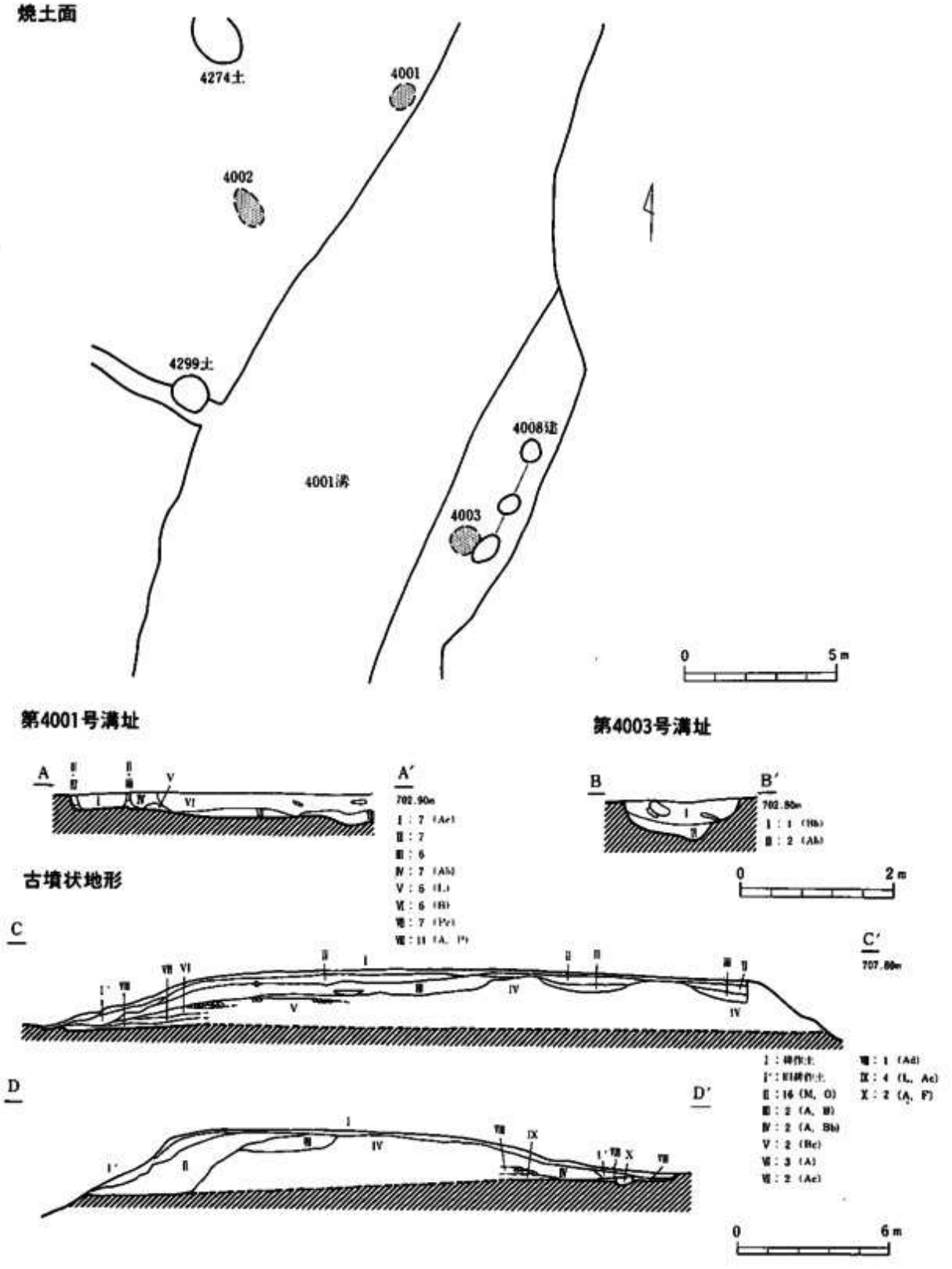
第4001号柵址



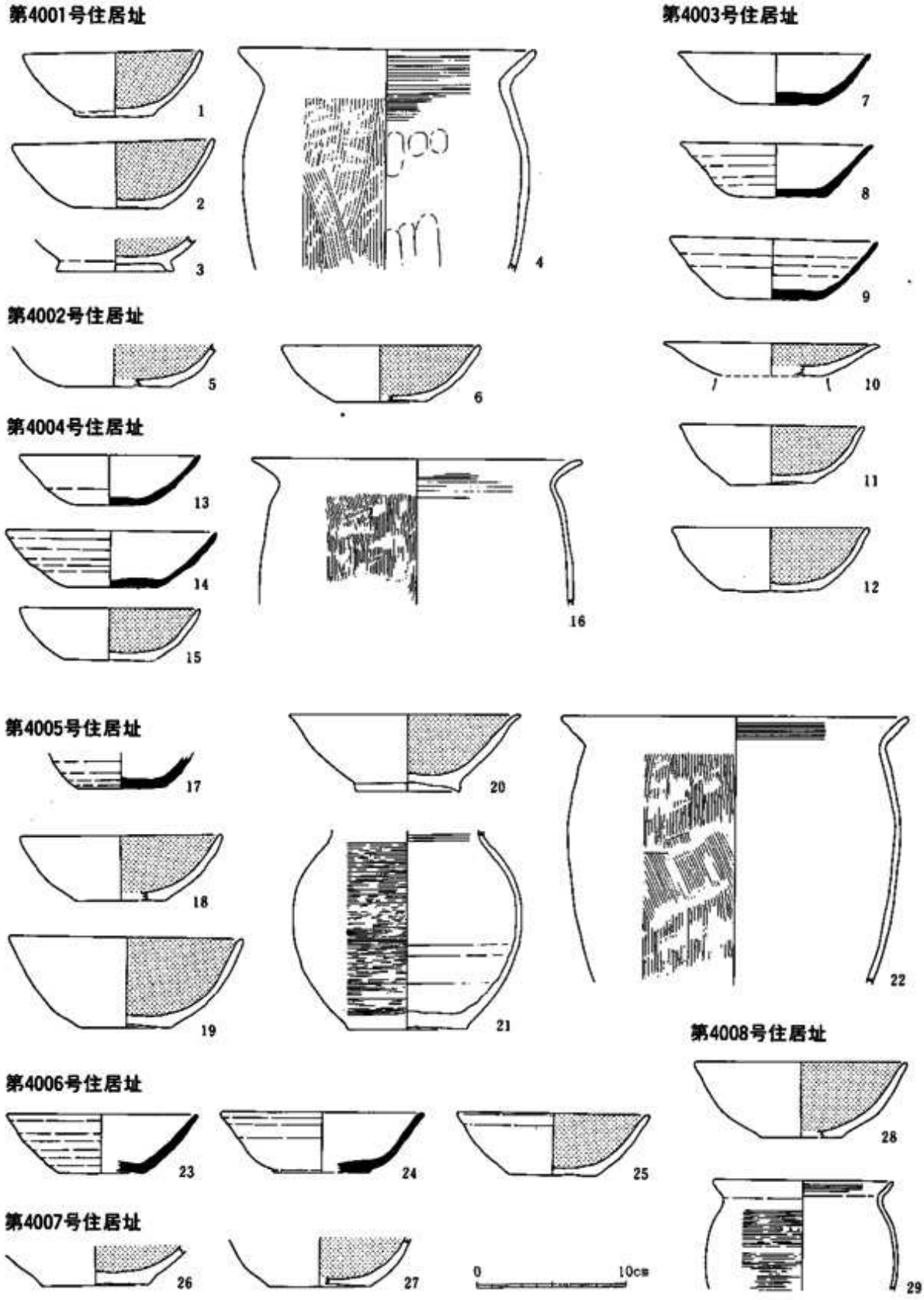
カマド状特殊遺構



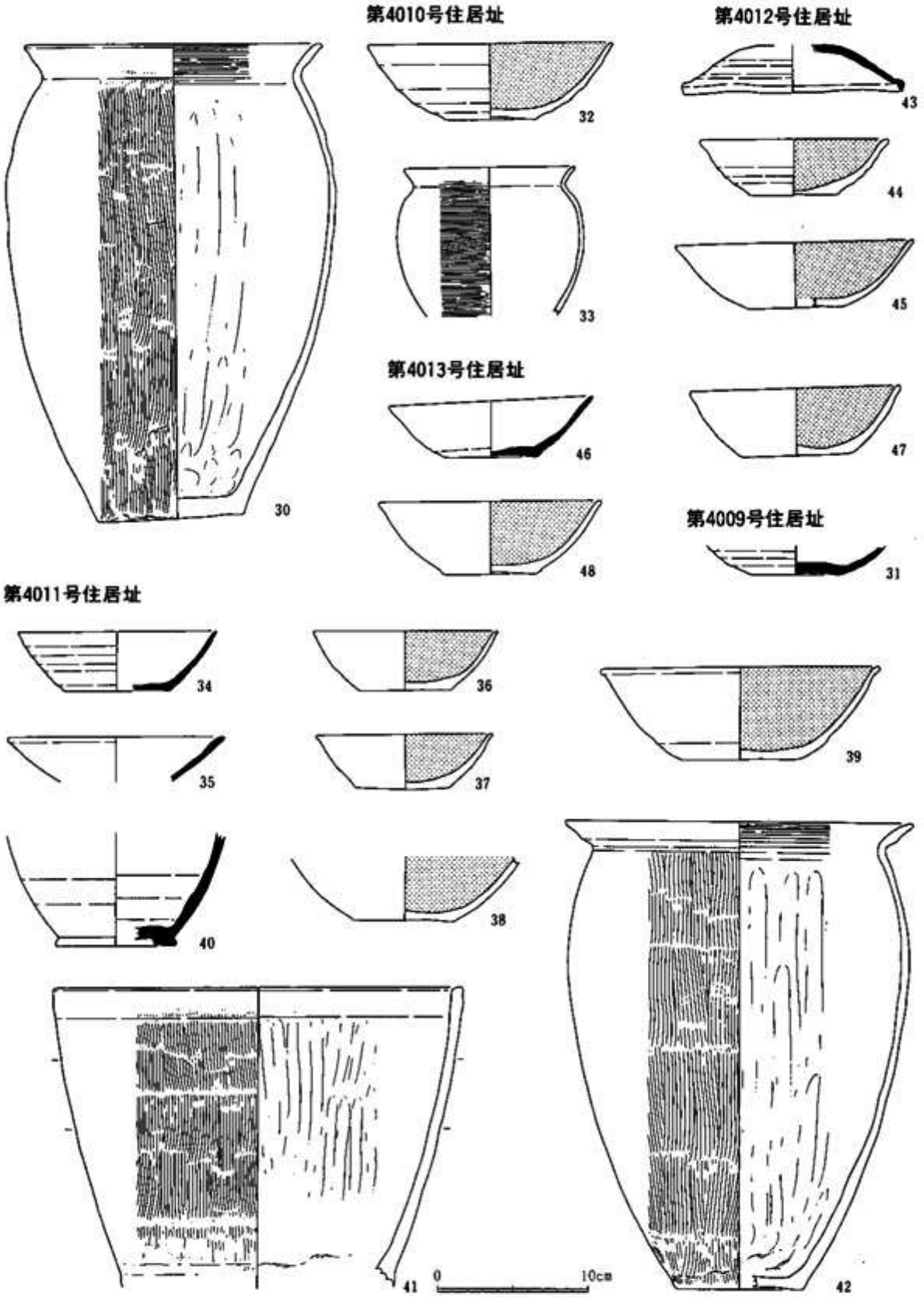
図版32　土坑(2)・柵址・カマド状特殊遺構



図版33　溝址・焼土面・古墳状地形

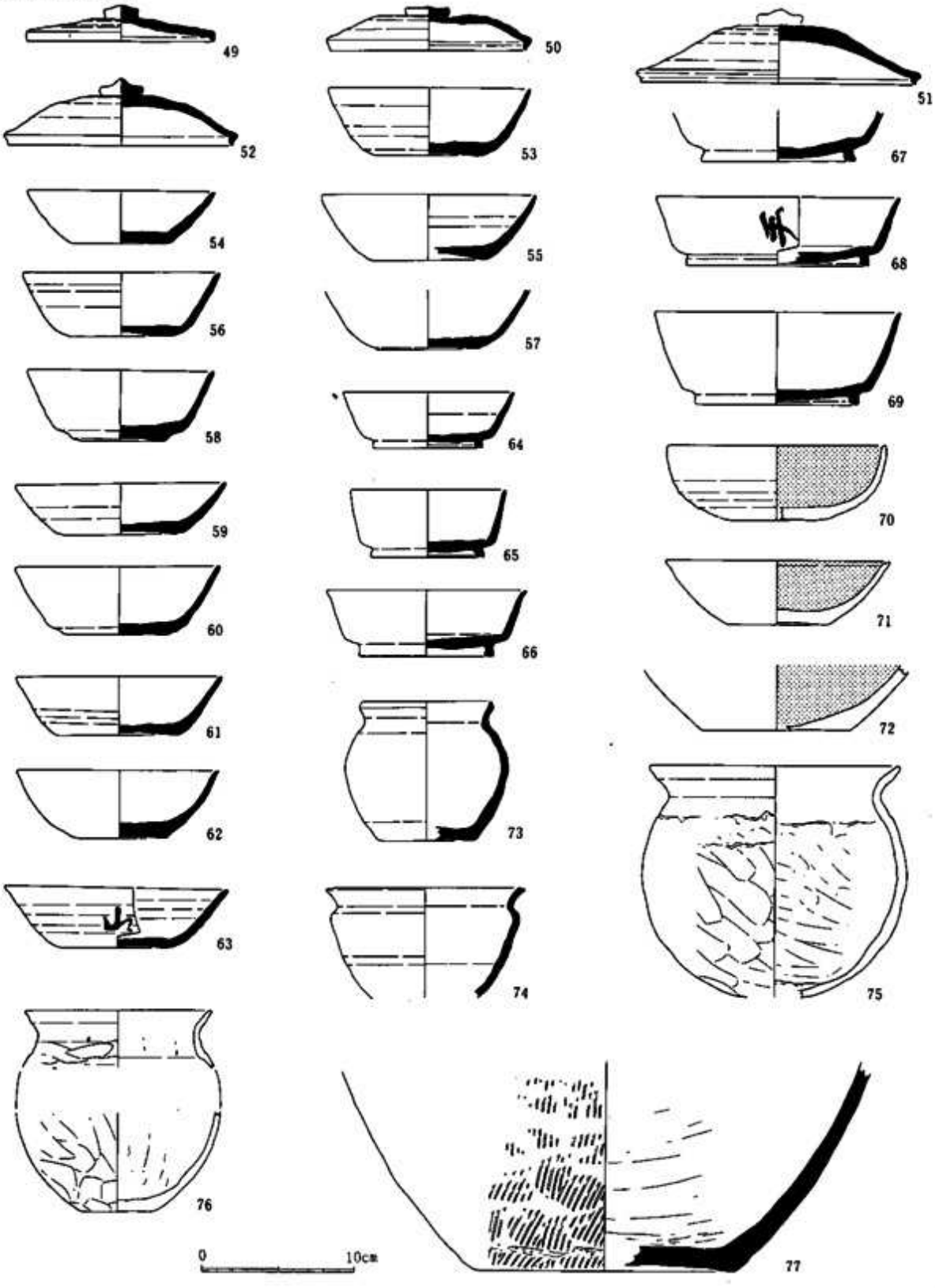

第4001号住居址
第4003号住居址
第4002号住居址
第4004号住居址
第4005号住居址
第4006号住居址
第4007号住居址
第4008号住居址
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10cm

図版34　土器(1)


第4010号住居址
第4012号住居址
第4013号住居址
第4009号住居址
第4011号住居址
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
0
10cm

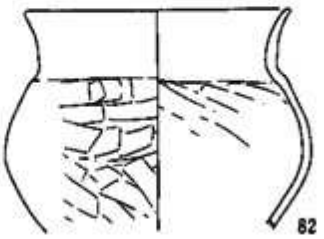
図版35　土器(2)

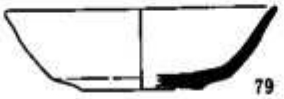
第4014号住居址



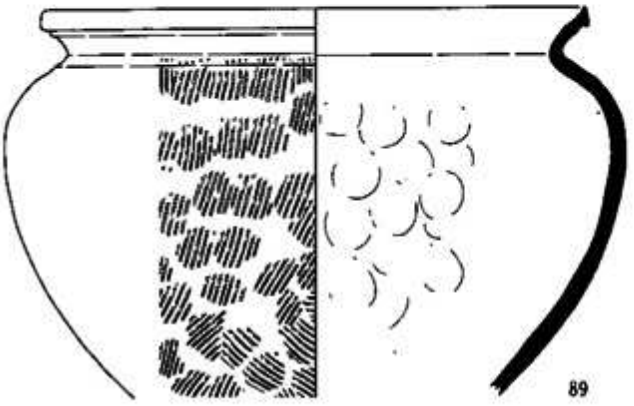
図版36　土器(3)

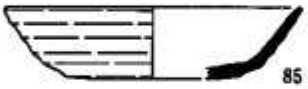
第4015号住居址

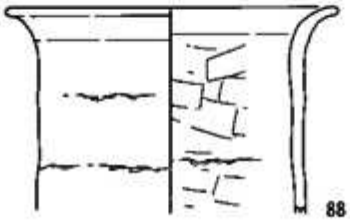




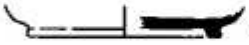
第4016号住居址

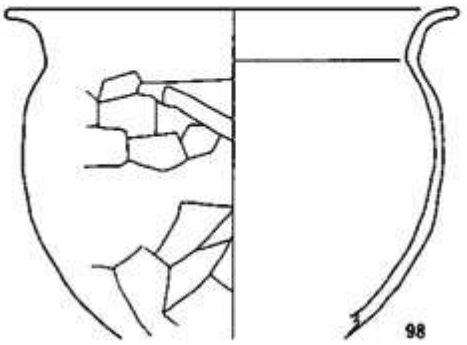




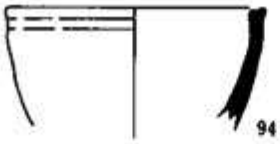


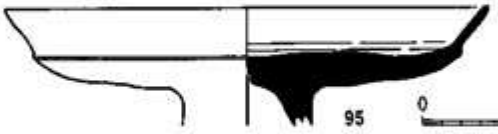
第4017号住居址





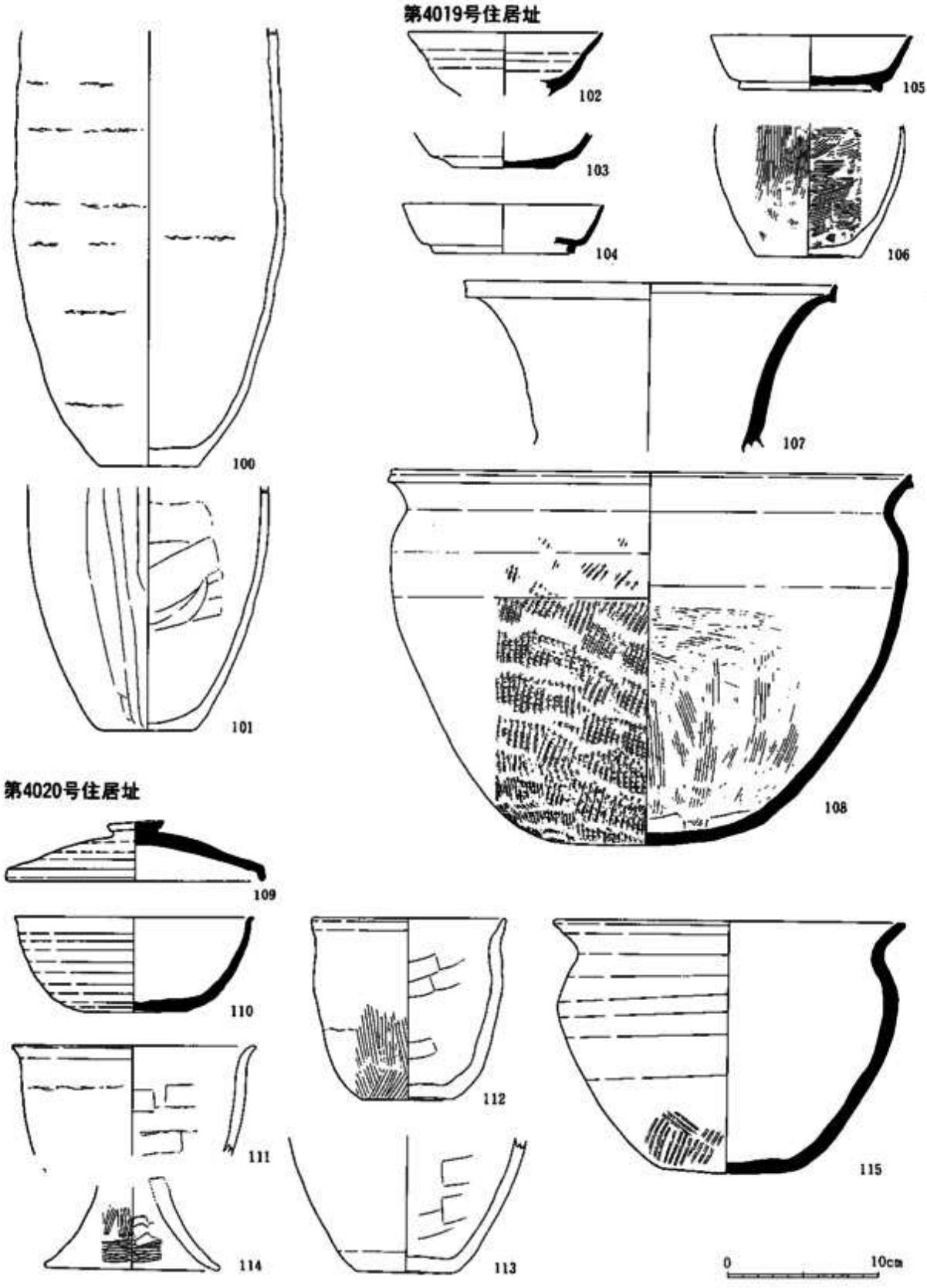
第4018号住居址



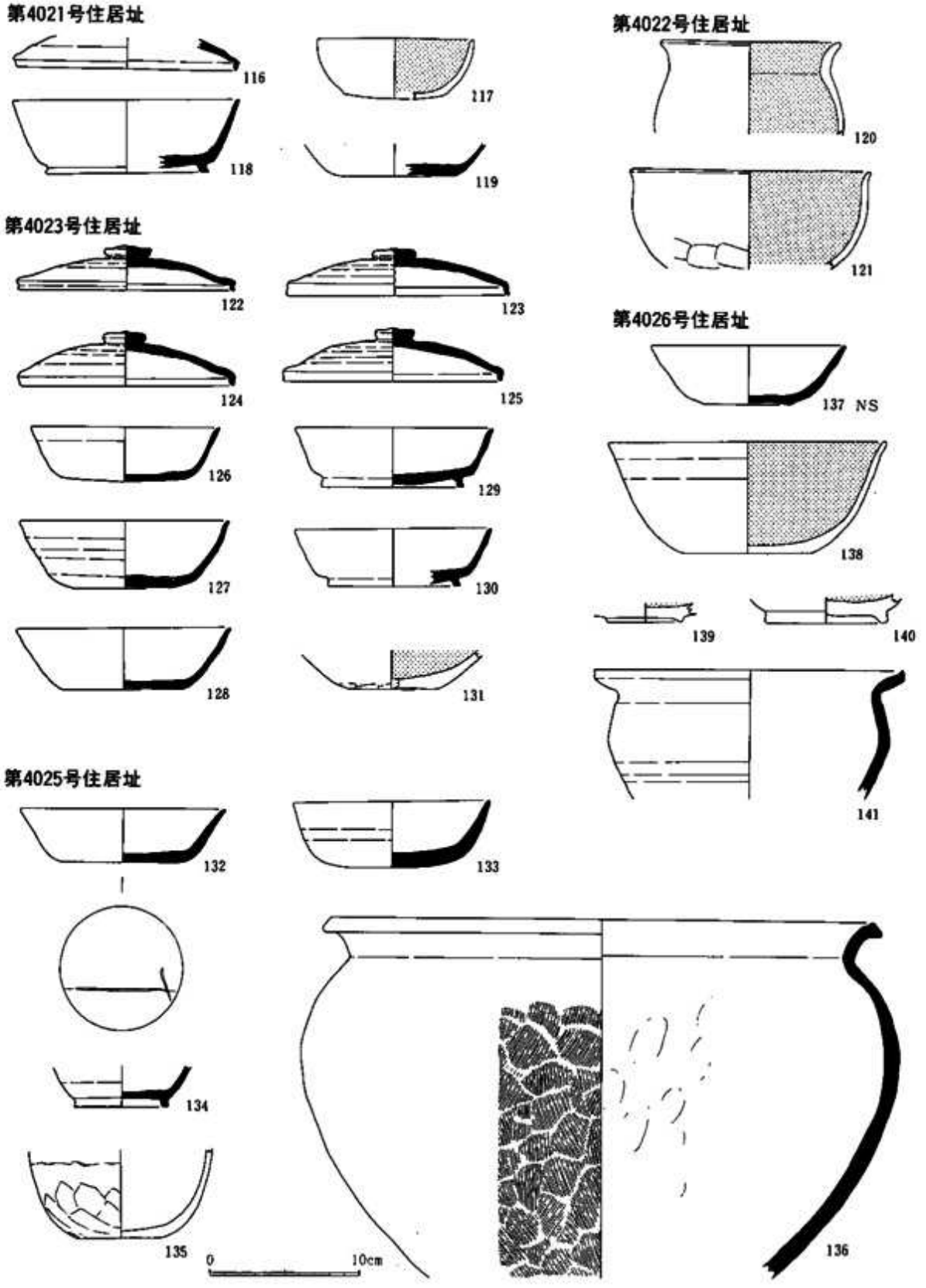


0 10cm

図版37　土器(4)

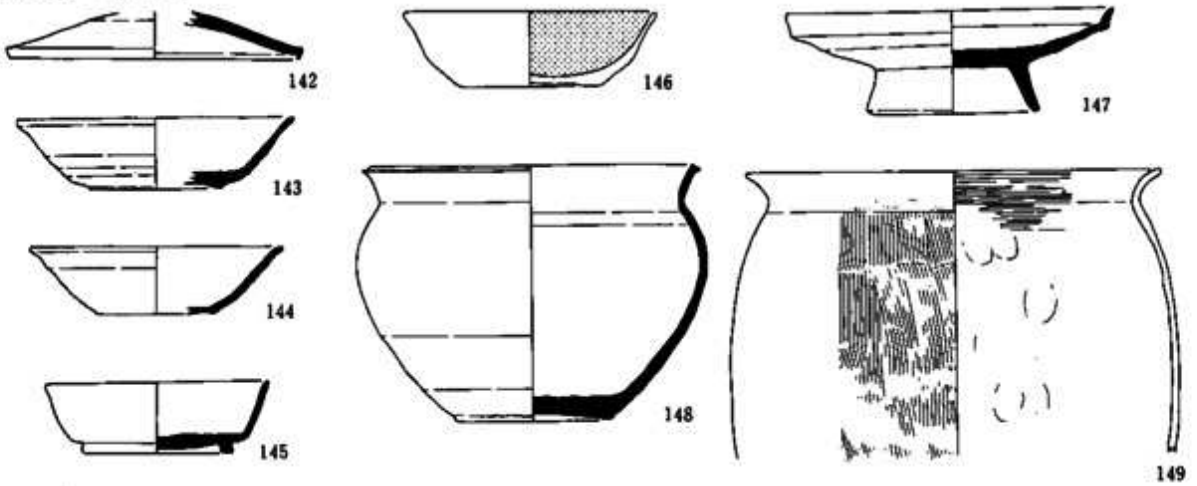

第4019号住居址
100
101
102
103
104
105
106
107
108
第4020号住居址
109
110
111
112
113
114
115
0
10cm

図版38　土器(5)

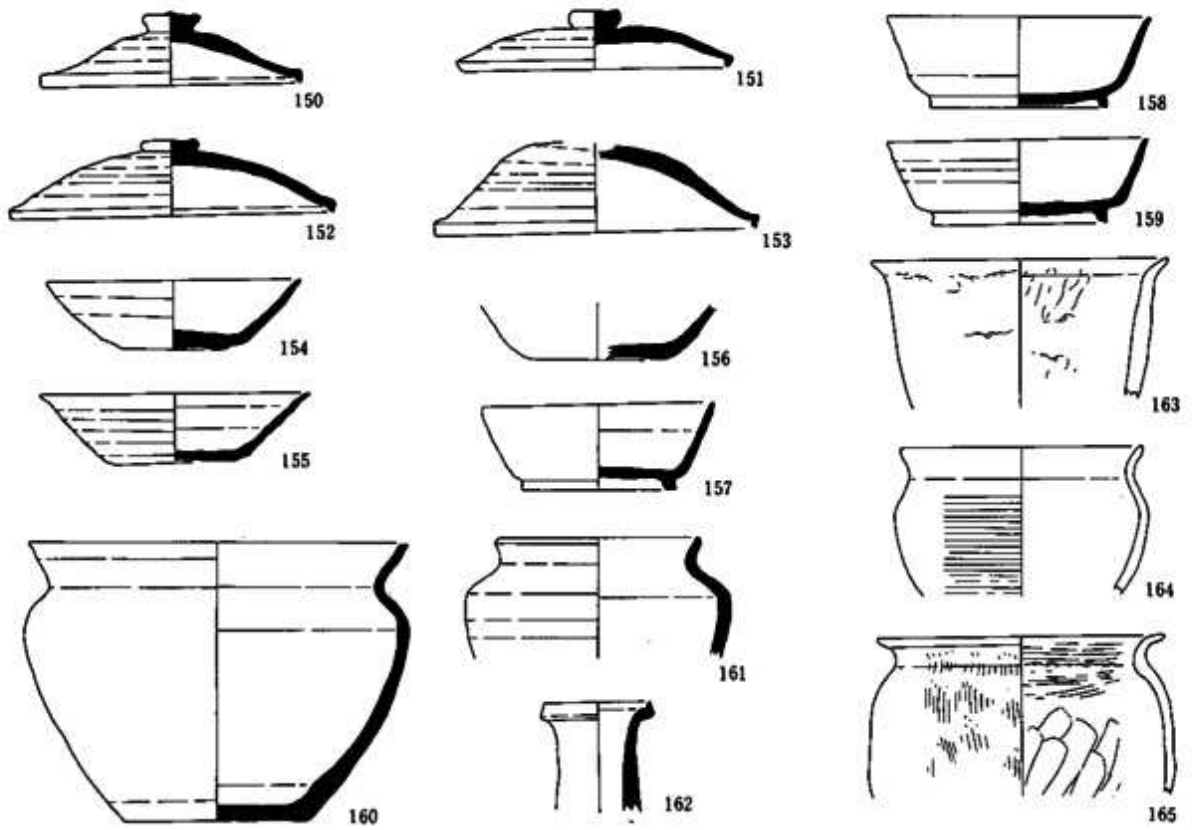

第4021号住居址
116
117
118
119
第4022号住居址
120
121
第4023号住居址
122
123
124
125
126
129
127
130
128
131
第4026号住居址
137 NS
138
139
140
141
第4025号住居址
132
133
134
135
136
0
10cm

図版39　土器(6)

第4027号住居址

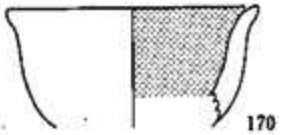


第4028号住居址

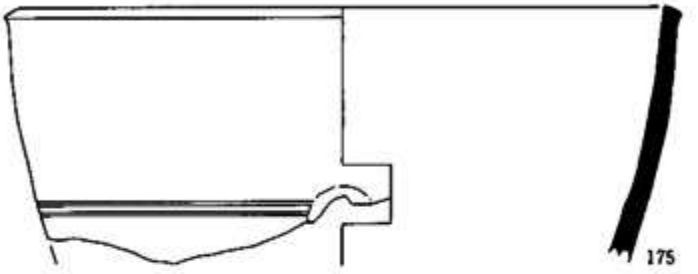


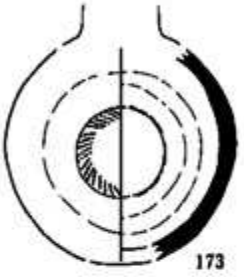
第4031号住居址

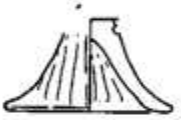
図版40　土器(7)

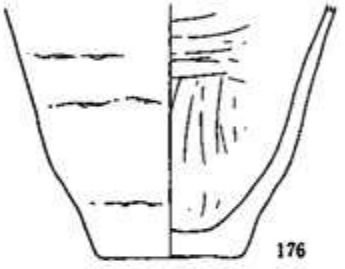


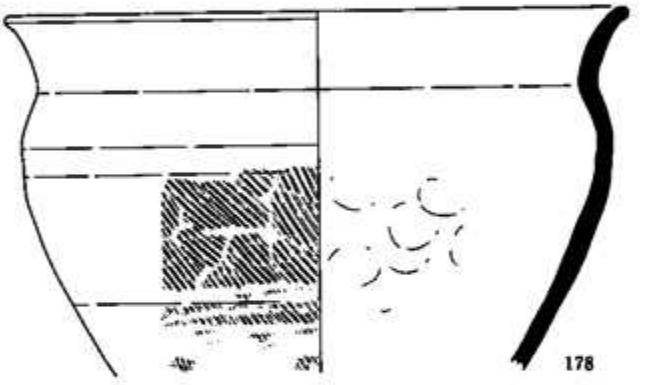
第4030号住居址

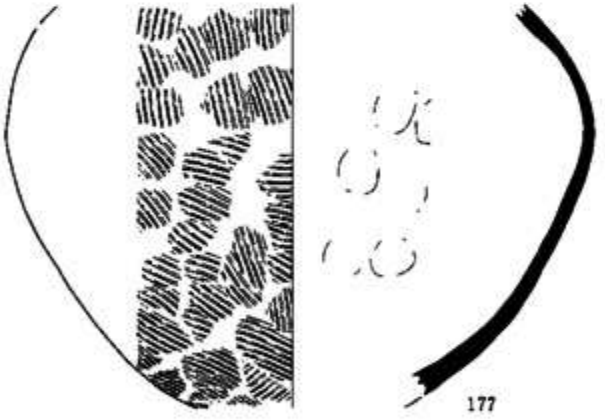


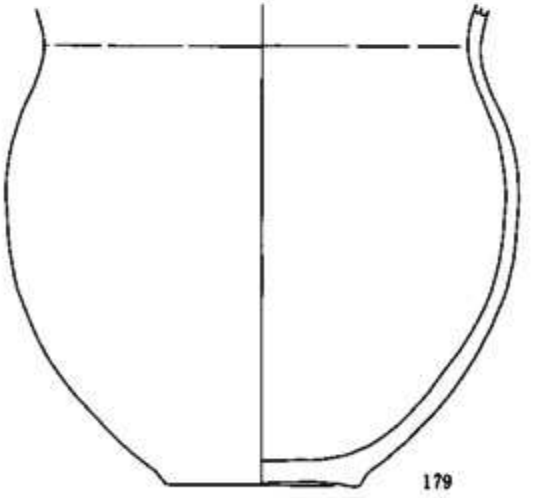




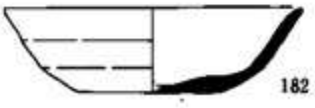


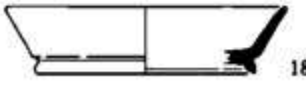




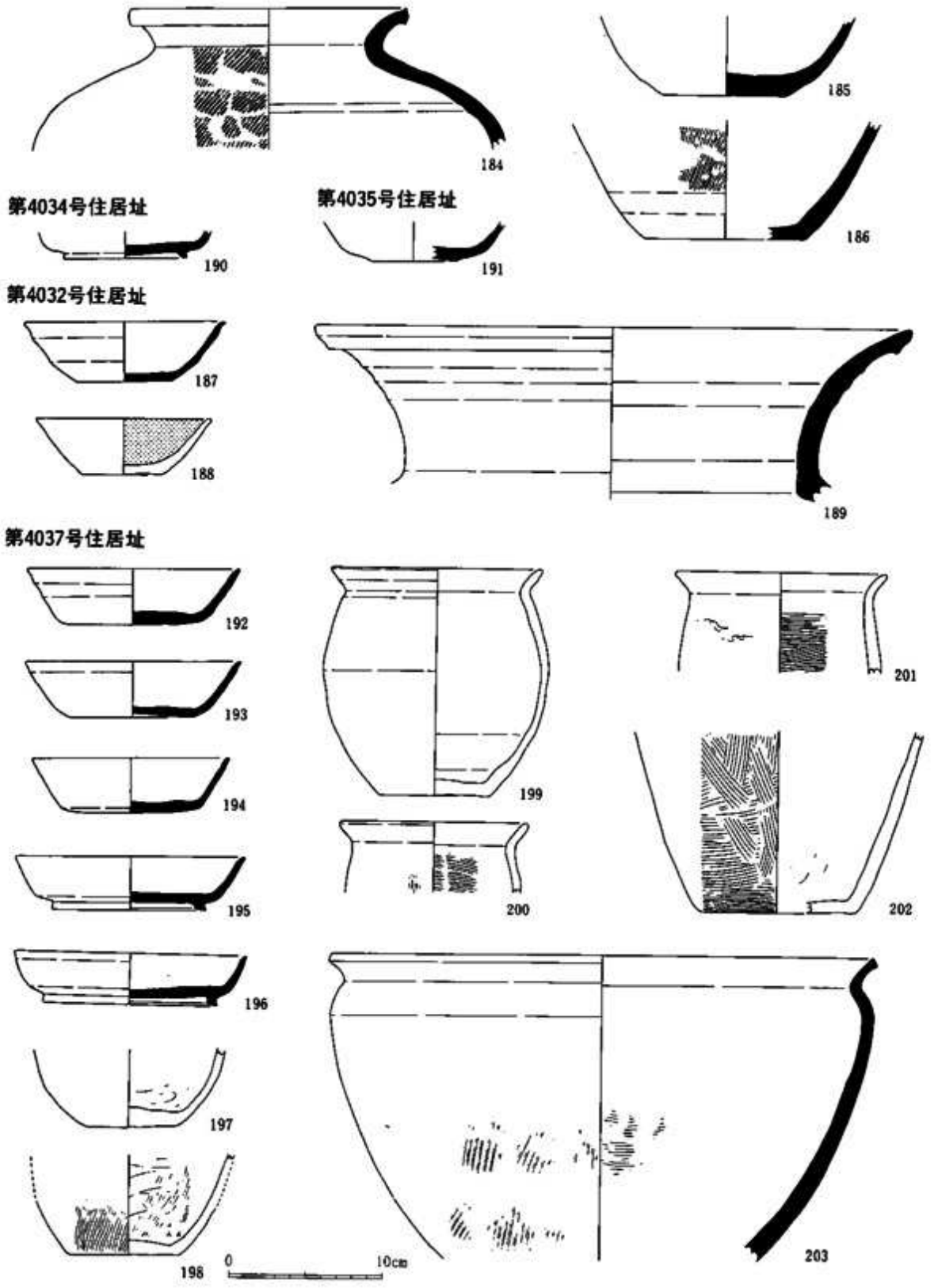


第4033号住居址

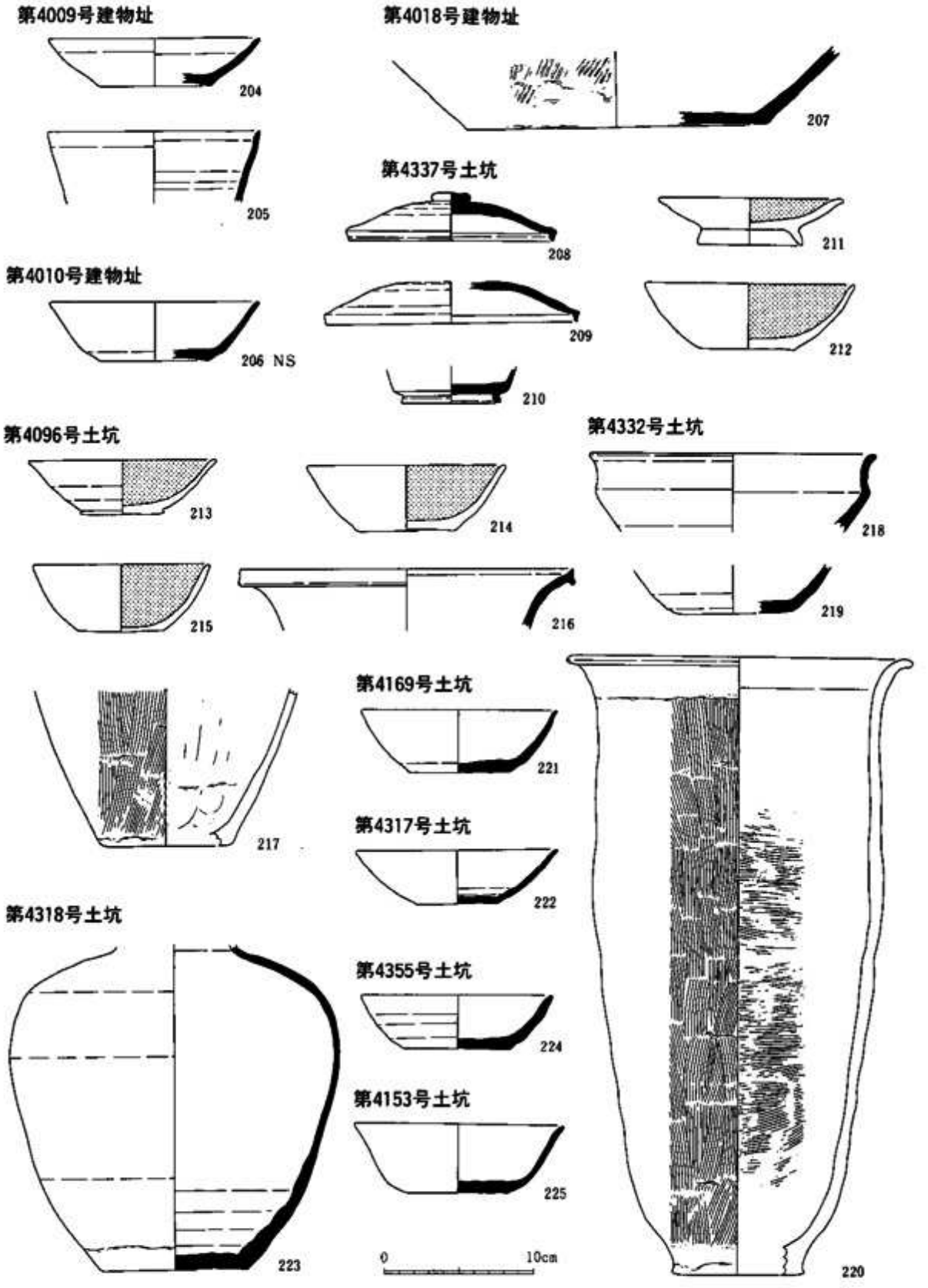




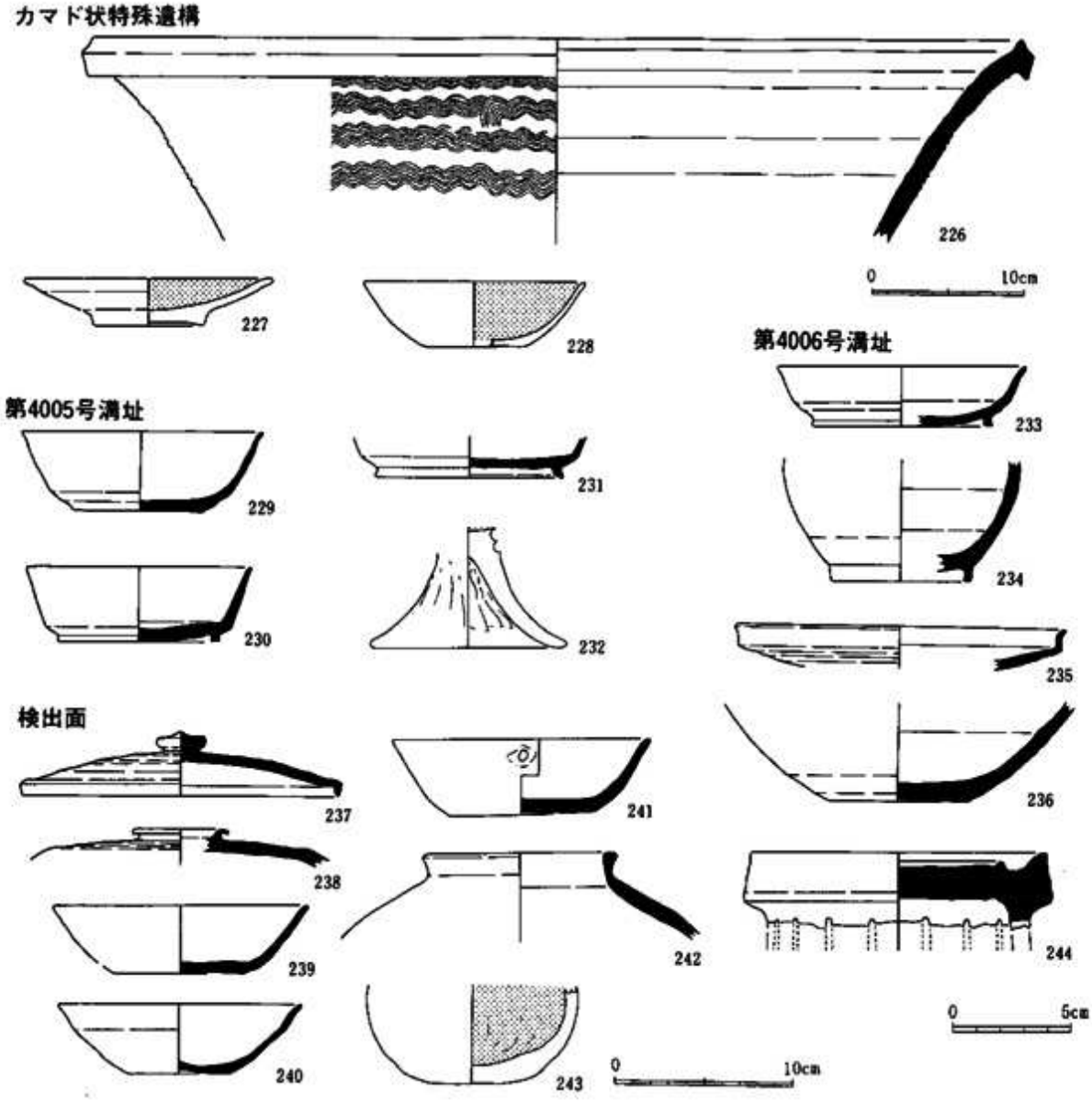
図版41　土器(8)


184
185
186
第4034号住居址
190
第4035号住居址
191
第4032号住居址
187
188
189
第4037号住居址
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
0
10cm

図版42　土器(9)

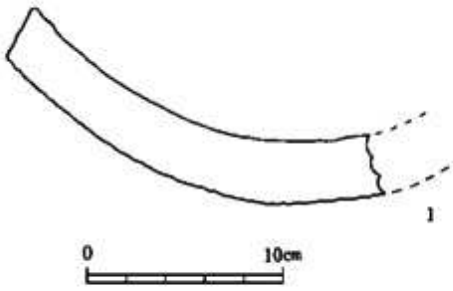

第4009号建物址
204
205
第4018号建物址
207
第4337号土坑
208
209
210
211
212
第4010号建物址
206 NS
第4096号土坑
213
214
215
216
第4332号土坑
218
219
217
第4169号土坑
221
第4317号土坑
222
第4318号土坑
223
第4355号土坑
224
第4153号土坑
225
0
10cm
220

図版43　土器(10)

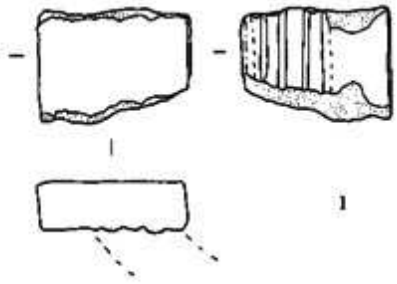

カマド状特殊遺構
226
0
10cm
227
228
第4006号溝址
233
第4005号溝址
229
231
234
230
232
235
検出面
237
241
236
238
242
244
239
240
243
0
10cm
0
5cm

図版44　土器(11)

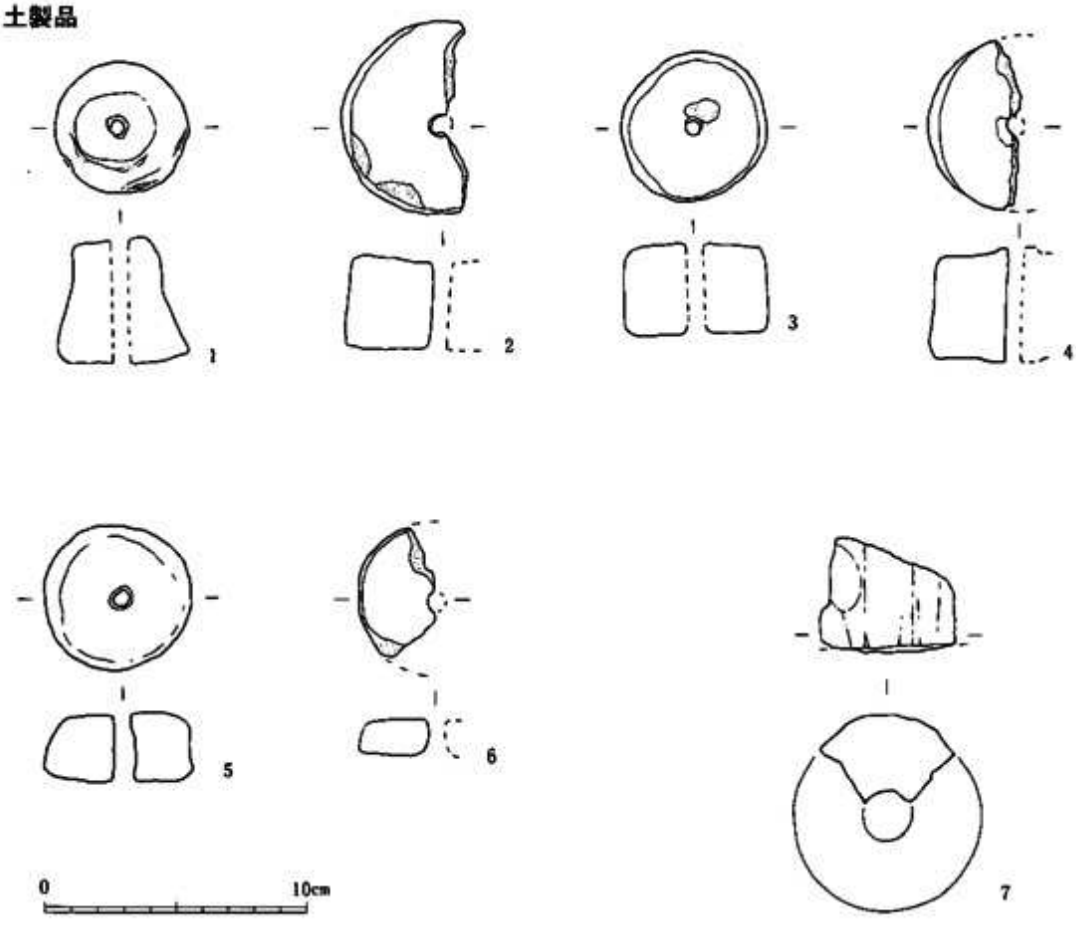
瓦



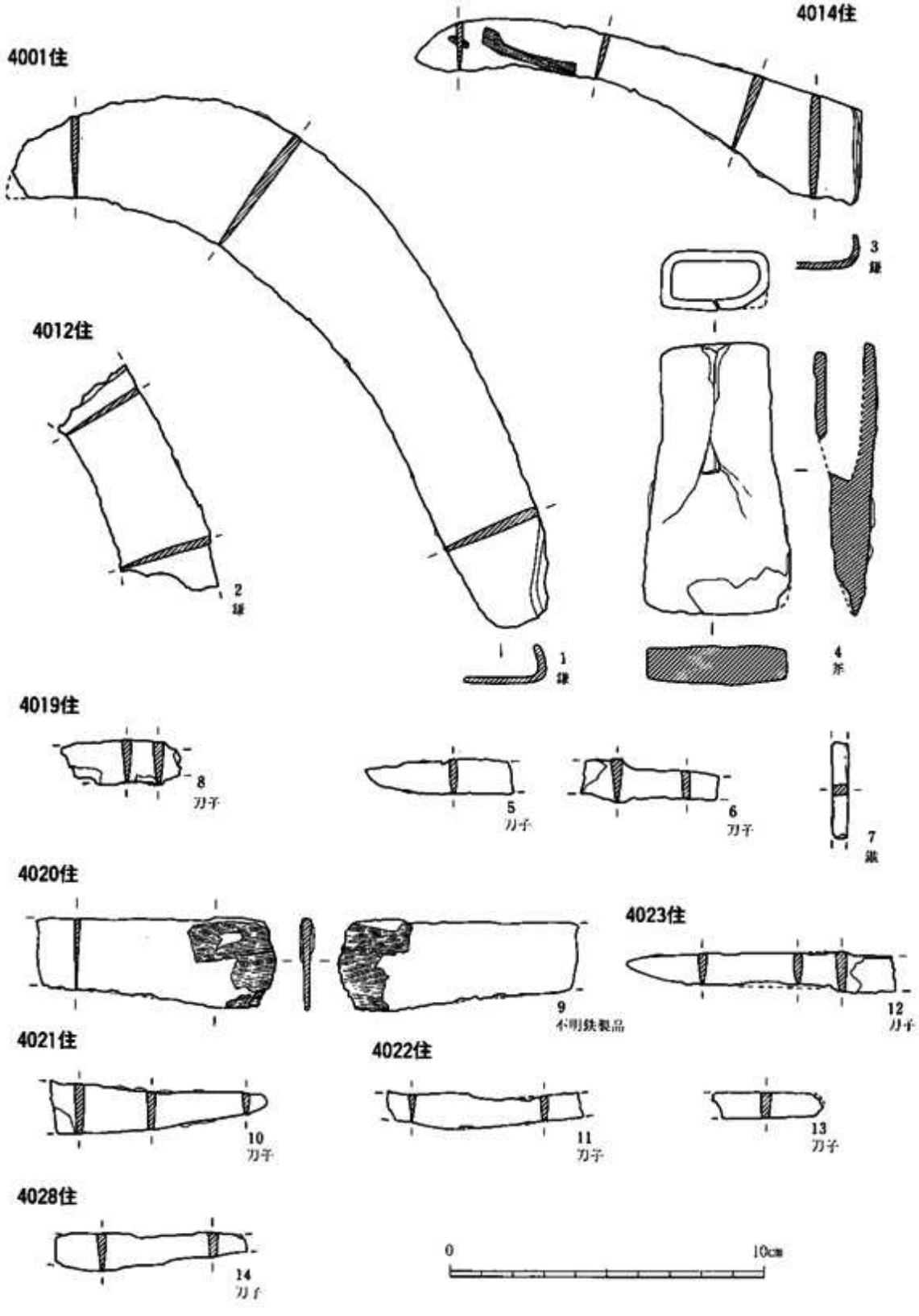
瓦塔



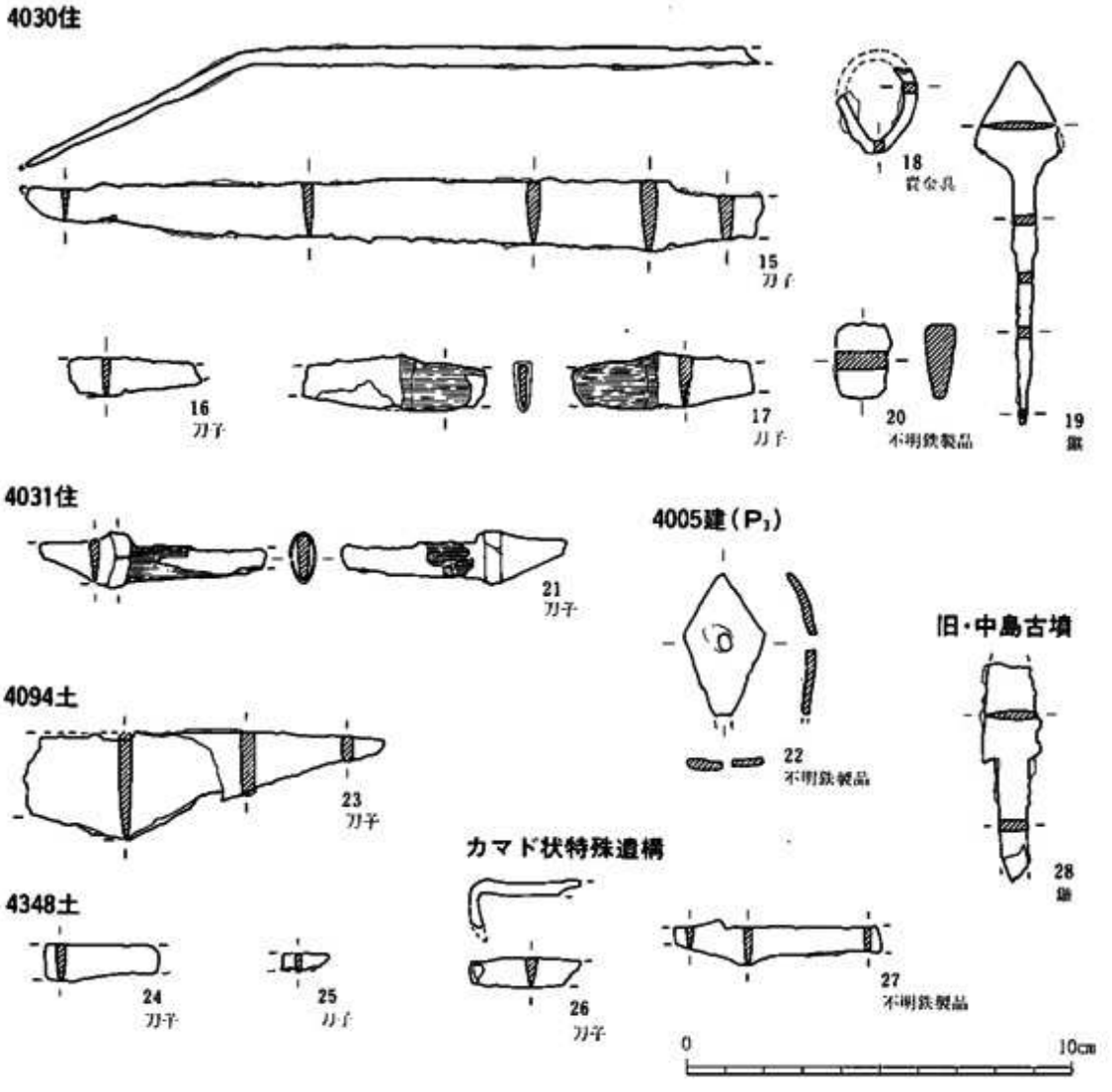
土製品



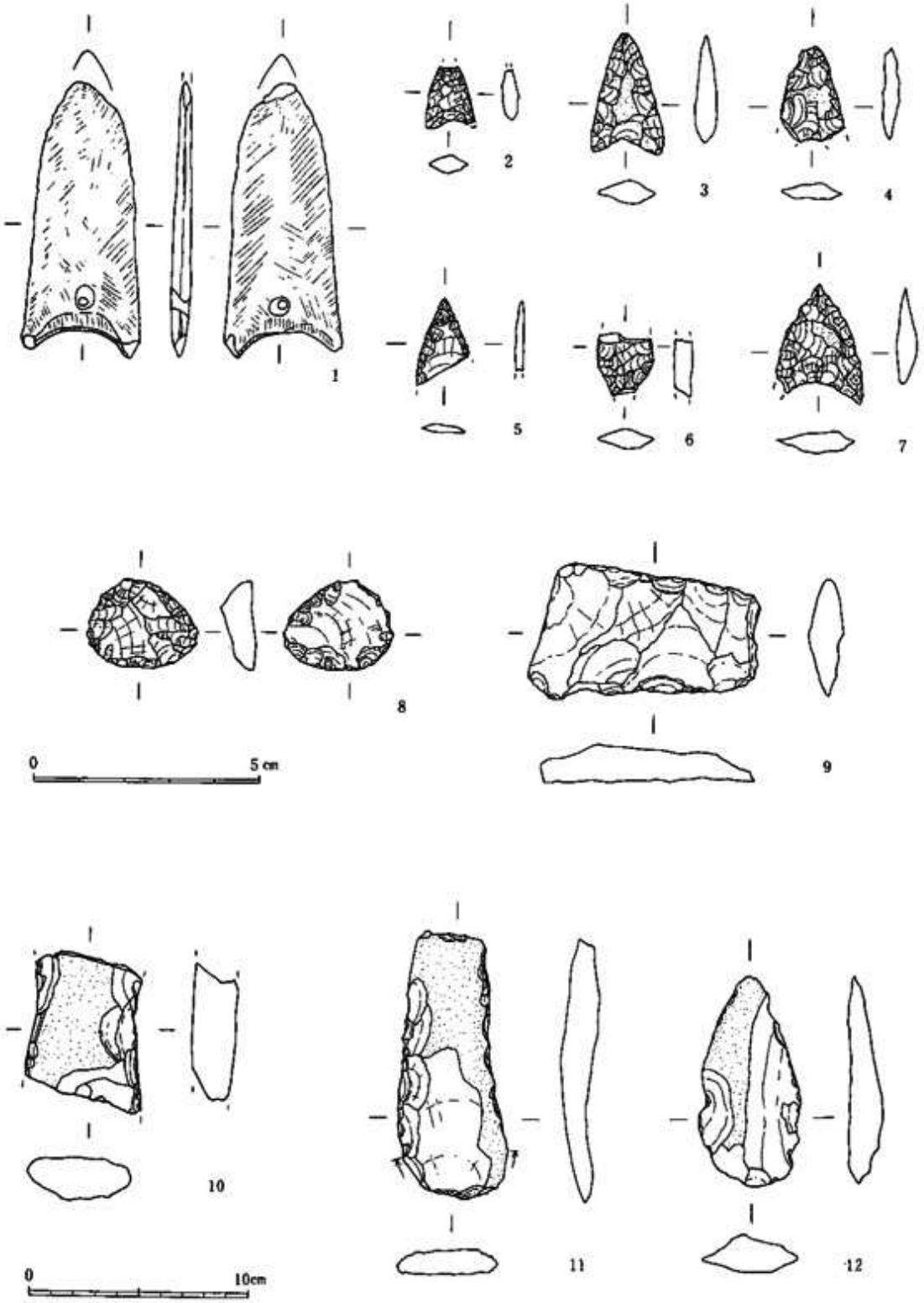
図版45　瓦・瓦塔・土製品


4001住
4014住
4012住
4019住
4020住
4023住
4021住
4022住
4028住
1
鎌
2
鎌
3
鎌
4
斧
5
刀子
6
刀子
7
鎌
8
刀子
9
不明鉄製品
10
刀子
11
刀子
12
刀子
13
刀子
14
刀子
0
10cm

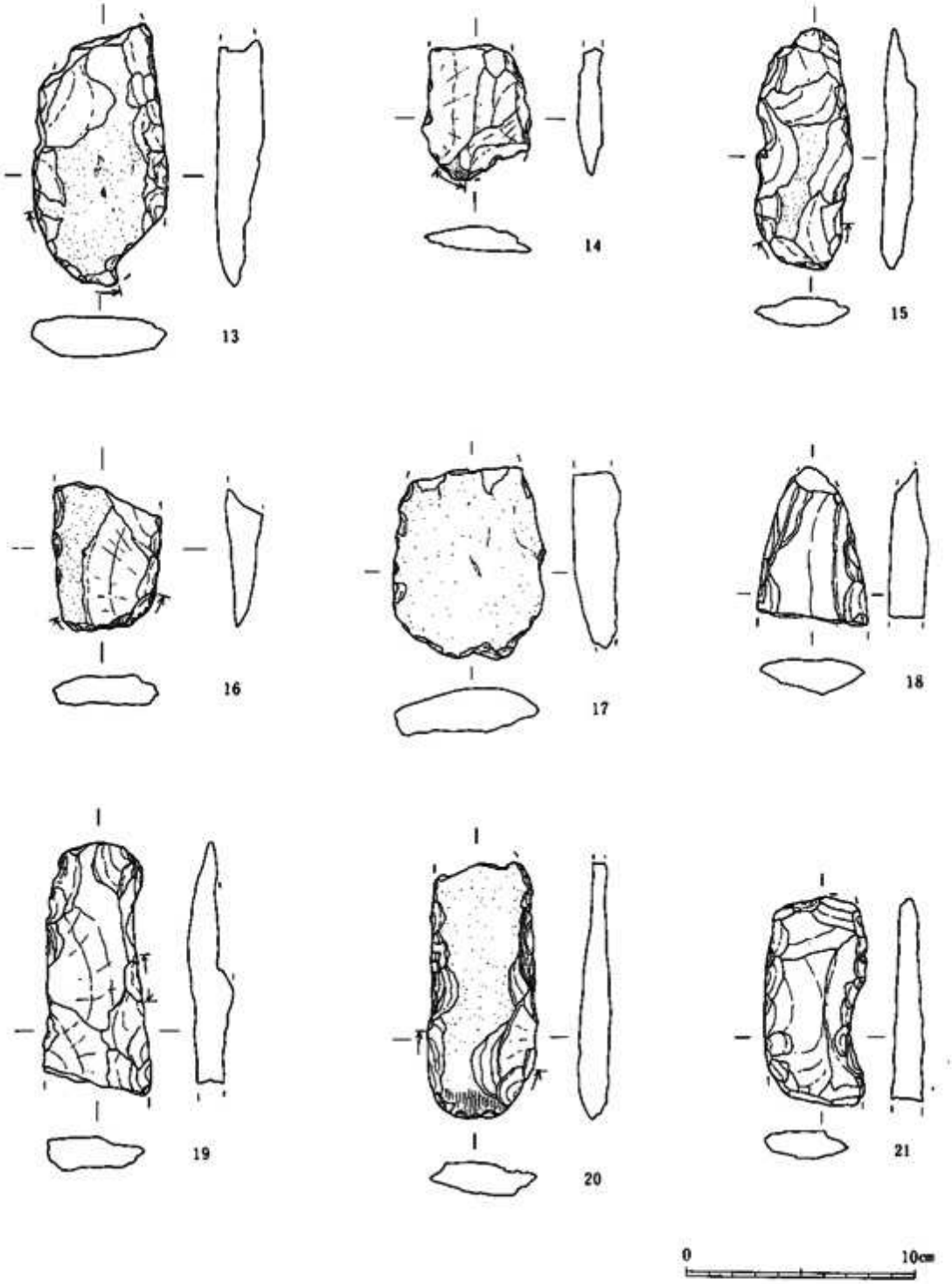
図版46　鉄器(1)


4030住
15
刀子
18
貴金具
16
刀子
17
刀子
20
不明鉄製品
19
鏃
4031住
21
刀子
4005建（P1）
22
不明鉄製品
旧・中島古墳
28
鏃
4094土
23
刀子
カマド状特殊遺構
26
刀子
27
不明鉄製品
4348土
24
刀子
25
刀子
0
10cm

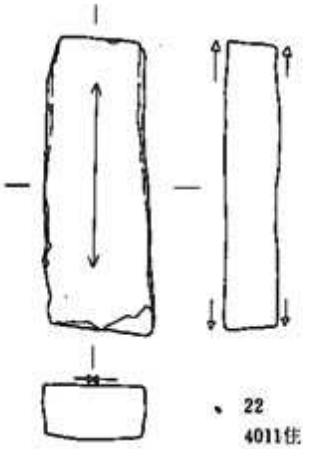
図版47　鉄器(2)

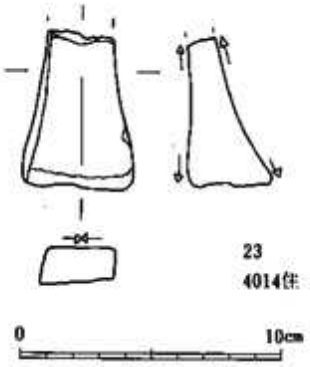


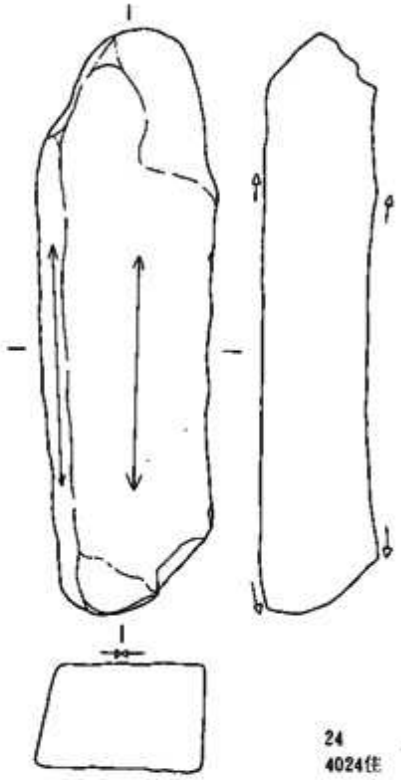
図版48　石器(1)

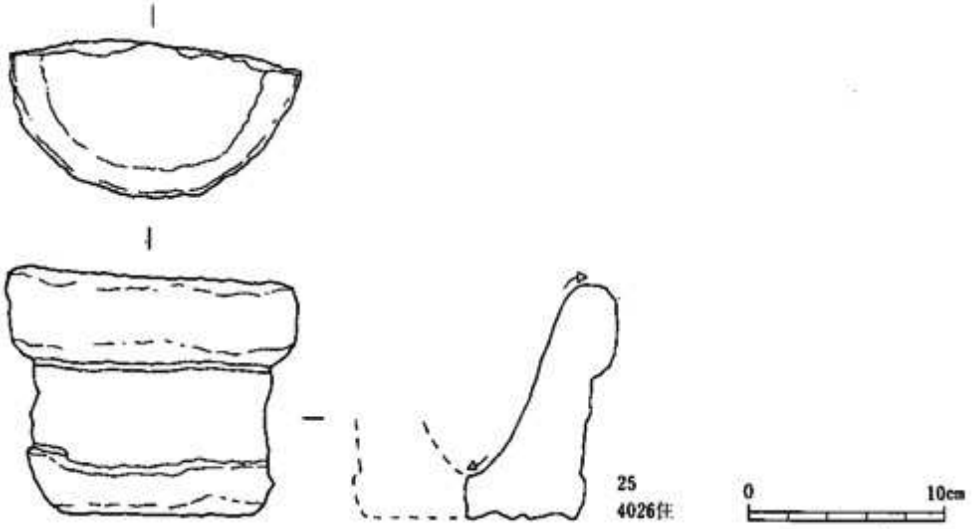


図版49　石器(2)









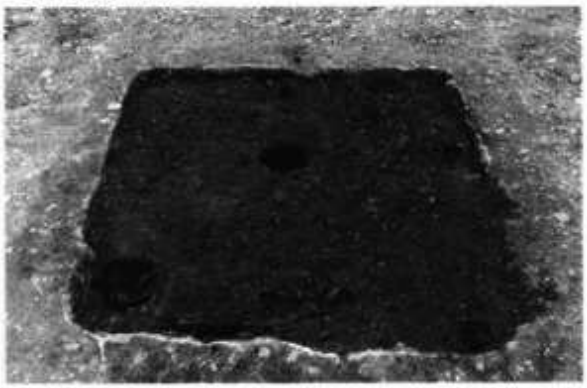
図版50　石器(3)

調査前近景

E地区全景（南西から）

E地区全景（南から）

E地区中部全景（東から）



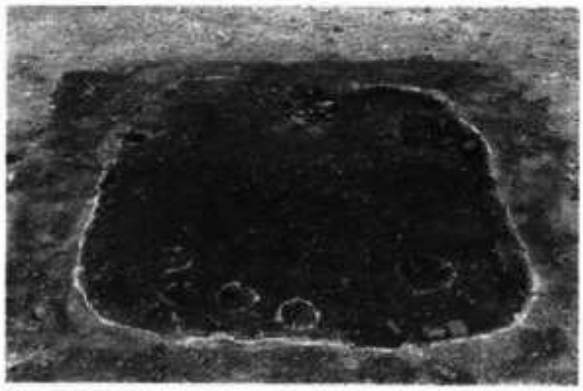
第4001号住居址

第4002号住居址

第4003号住居址・4009土

第4004号住居址

図版51



第4005号住居址

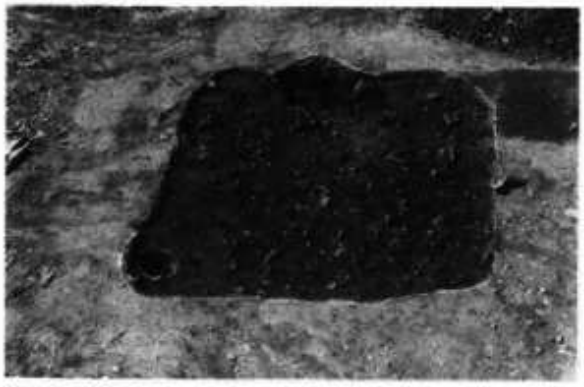
第4009・4007号住居址

第4008号住居址

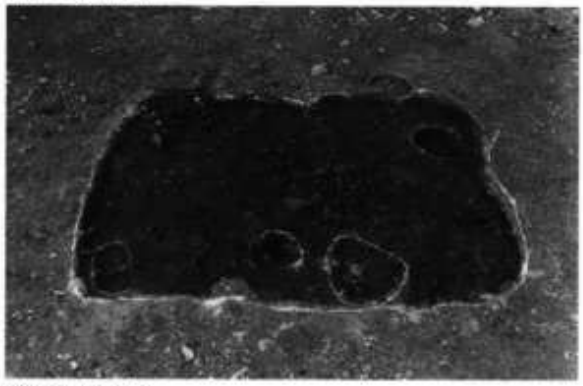
第4009号住居址

第4010号住居址

第4011号住居址



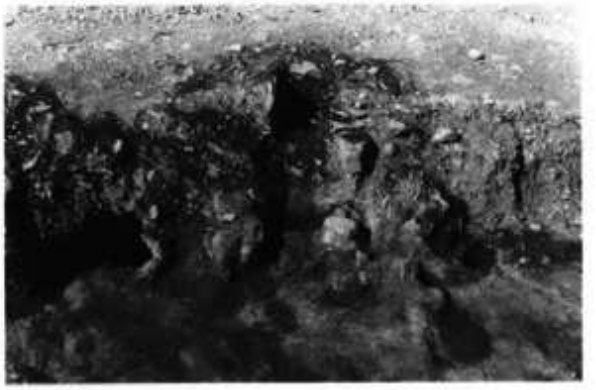
第4012号住居址



第4013号住居址

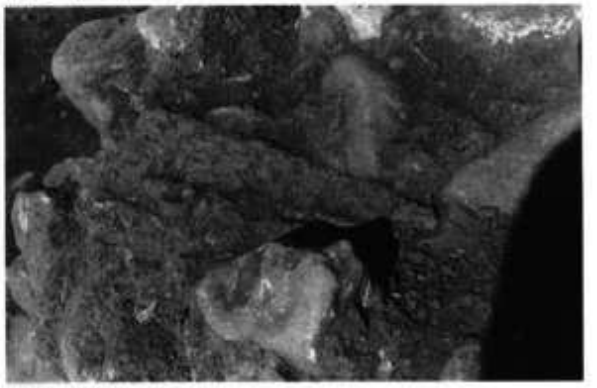
図版52

第4014号住居址

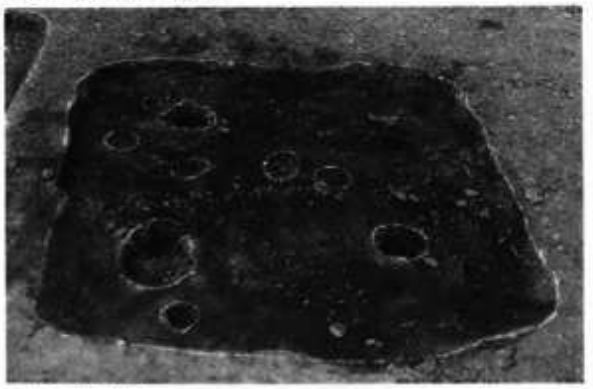


同左　カマド

同上　紡錘車出土状況



同左　鉄器出土状況



第4015号住居址

第4016号住居址

第4016号住居址　紡錘車出土状況

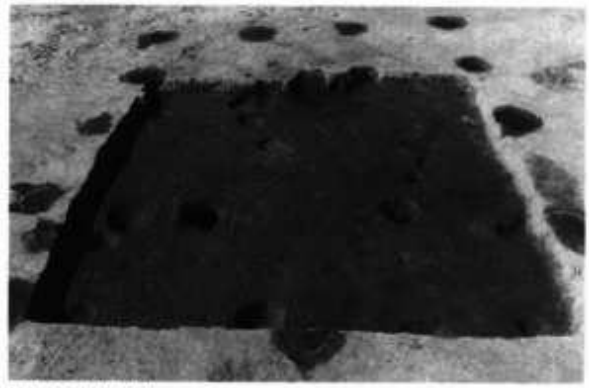
第4017号住居址

図版53

第4018号住居址

同左　紡錘車出土状況

同上　盤出土状況



第4019号住居址

第4020号住居址

第4021号住居址

第4021号住居址　カマド

同左　煙道先端部

図版54

第4022号住居址

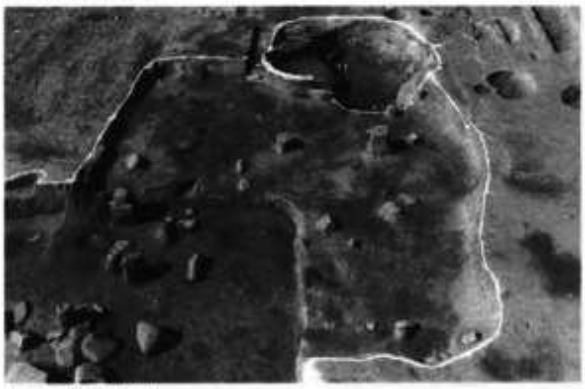
第4023号住居址

第4023号住居址　カマド

同左　ピット９内礫出土状況

第4024号住居址

第4025号住居址



第4026号住居址

同左　壓白出土状況

図版55

第4027号住居址

第4028号住居址

第4028号住居址　カマド

第4029号住居址

第4030号住居址

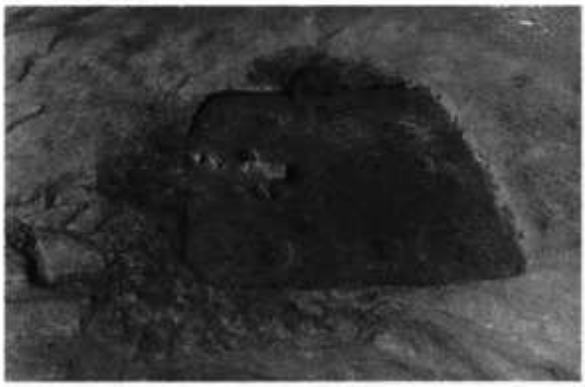
同左　甕出土状況

第4030号住居址　鉄器出土状況

同左

第4031号住居址

同左　カマド



第4032号住居址

第4033号住居址

第4033号住居址　完掘状況

同左　住居内の溝（北壁際）

同上　住居内の溝（カマド脇の石蓋）

同左　住居内の溝（右）と周溝（左）

図版57

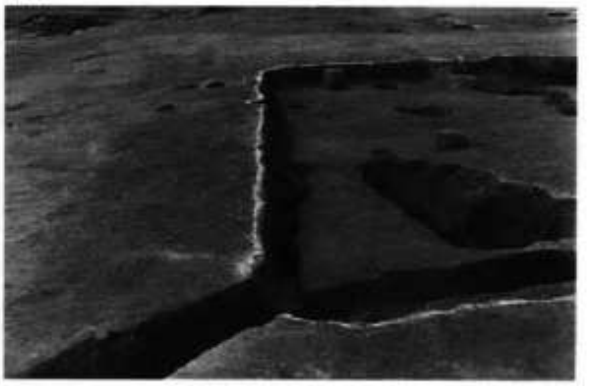
第4033号住居址内の溝（東壁際）

同左

同上　南東隅部分

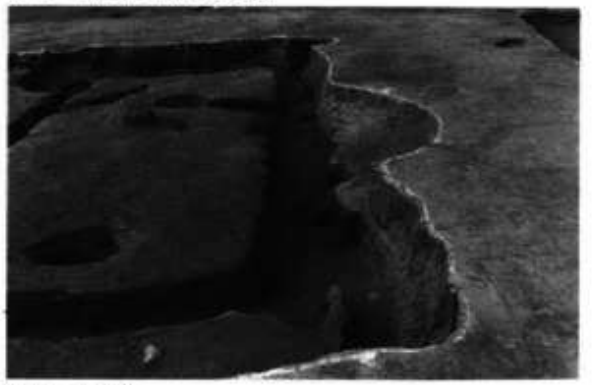
同左

同上　住居内の溝（左）と周溝（右）完掘



同上　住居内の溝（南東隅）

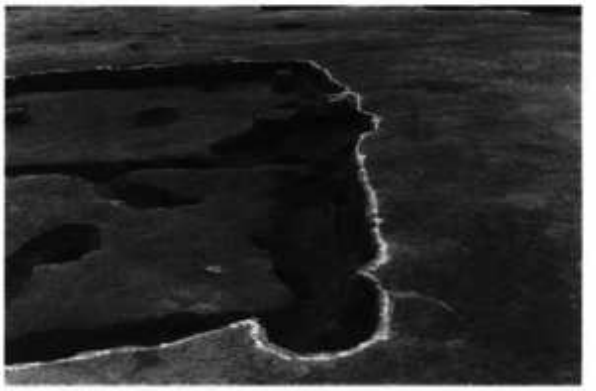
同上　住居内の溝（中央部）



同上　北壁際

図版58

第4033号住居址（北壁際）



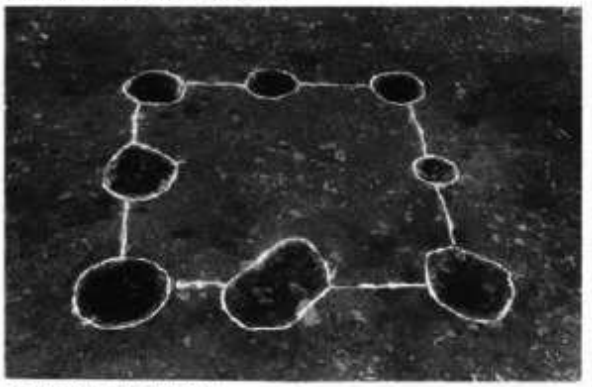
同左　住居内の溝（西壁）

同上　北壁際

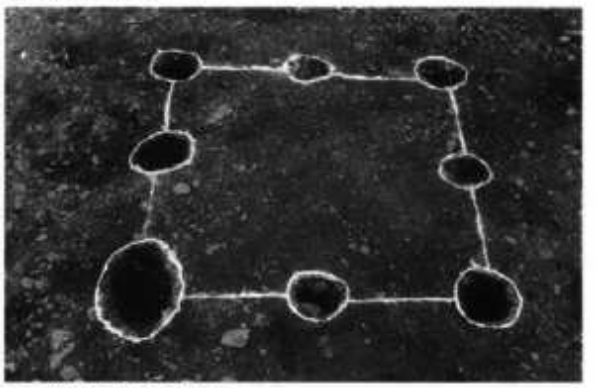
同上　南東隅

第4035・4037・4024号住居址

第4036号住居址

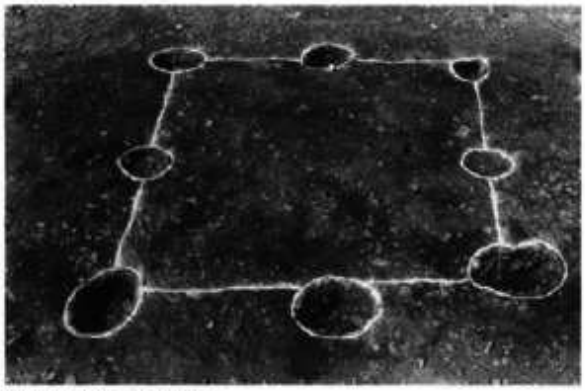


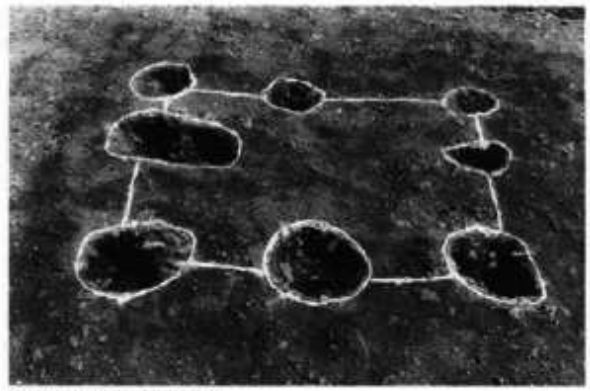
第4001号掘立柱建物址

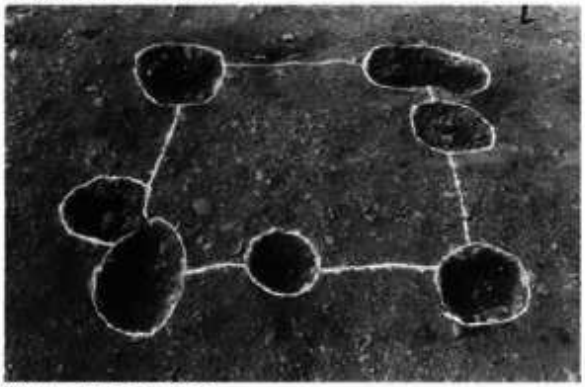


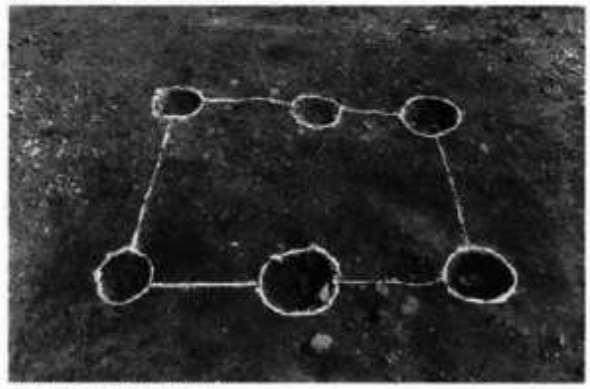
第4002号掘立柱建物址

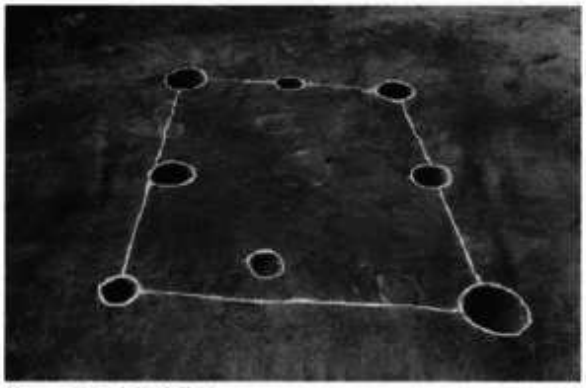
図版59


第4003号掘立柱建物址


第4004号掘立柱建物址


第4005号掘立柱建物址


第4006号掘立柱建物址

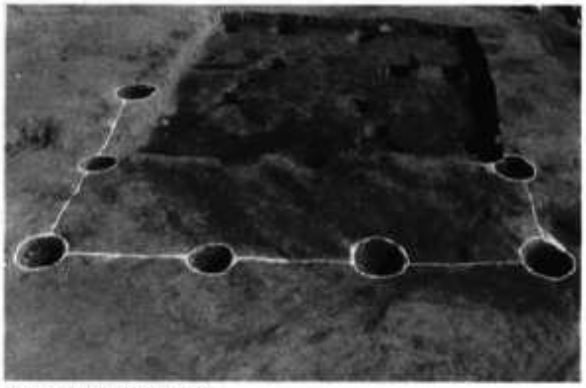

第4007号掘立柱建物址

第4008号掘立柱建物址

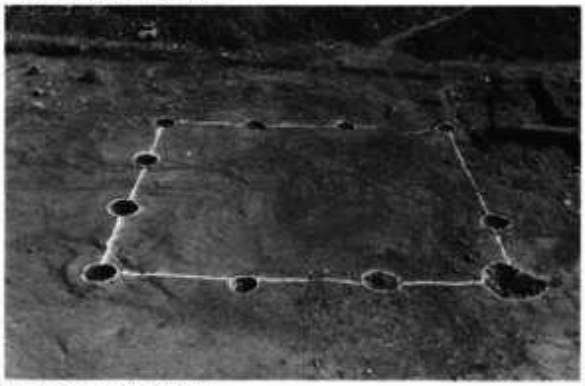
第4009号掘立柱建物址

第4010号掘立柱建物址

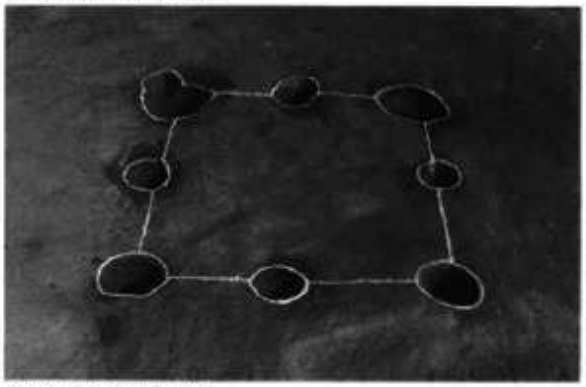
第4011号掘立柱建物址



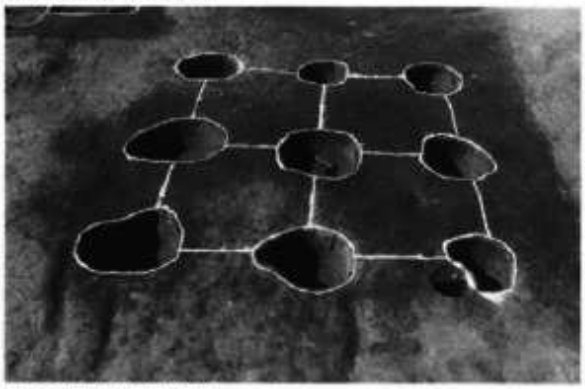
第4012号掘立柱建物址



第4013号掘立柱建物址

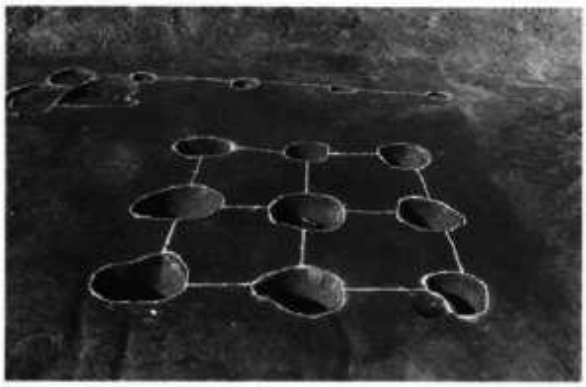


第4014号掘立柱建物址



第4015号掘立柱建物址

第4001号柵址

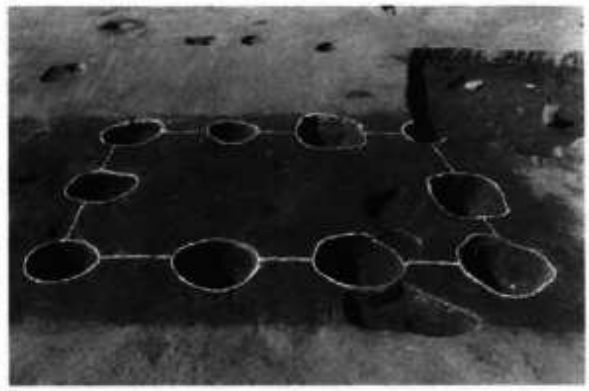


第4015号掘立柱建物址・第4001号柵址

第4015号掘立柱建物址ピット6

図版61

第4015号掘立柱建物址ピット2



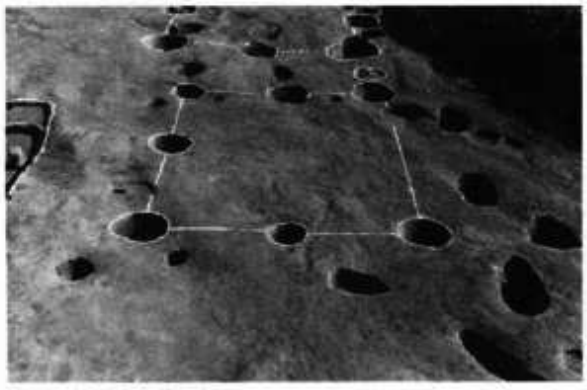
第4016号掘立柱建物址

第4016号掘立柱建物址ピット2断面

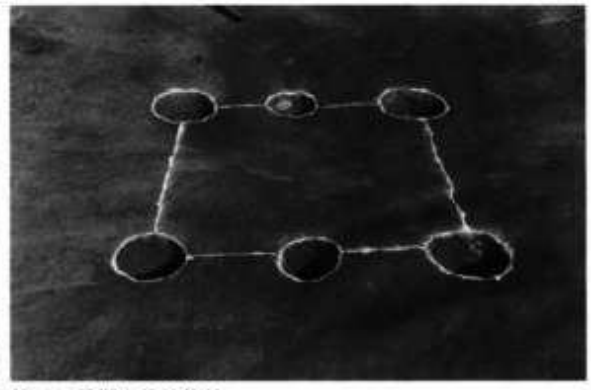
同左　ピット5断面

同上　ピット6断面

同上　ピット4断面



第4017号掘立柱建物址



第4018号掘立柱建物址

図版62

第4096号土坑

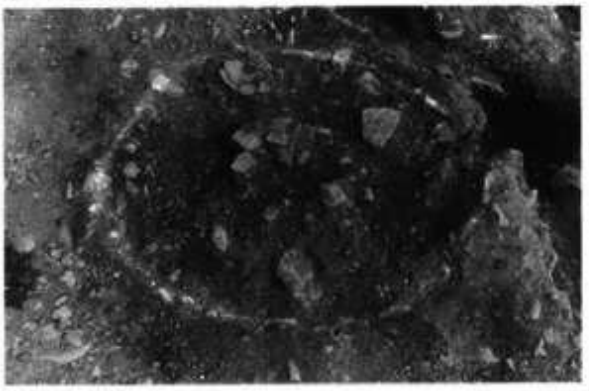
第4112号土坑

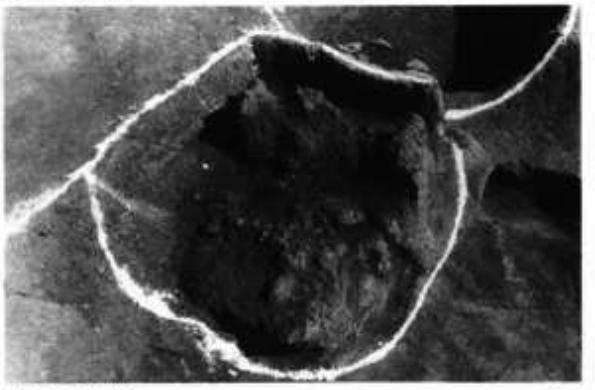
第4120号土坑

第4136号土坑

第4305号土坑

第4322号土坑


第4328号土坑


第4353号土坑

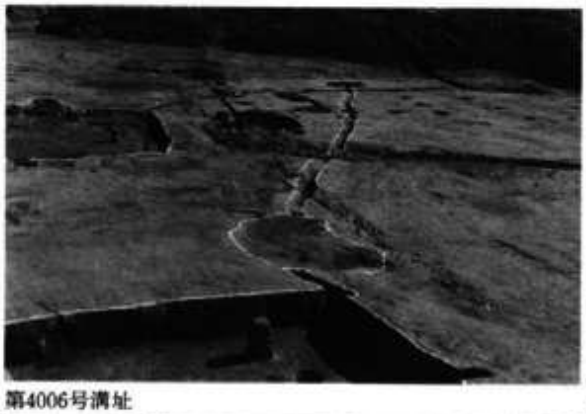
图版63

カマド状特殊遺構

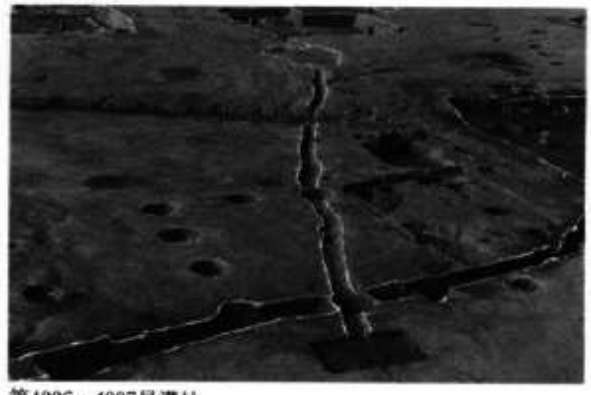
同左

第4005号溝址土器出土状況

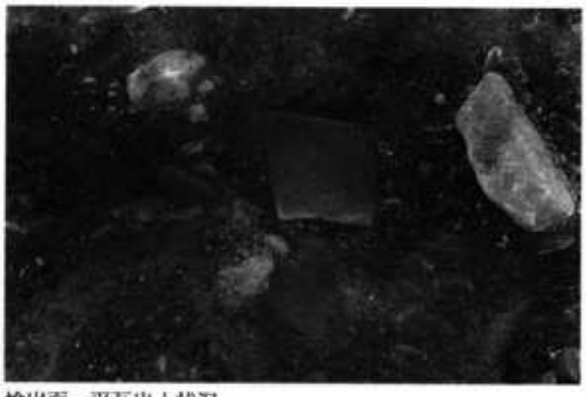
第4007号溝址



第4006号溝址



第4006・4007号溝址



検出面　平瓦出土状況

同左　円面硯出土状況

図版64

検出面　紡錘車出土状況

旧・中島古墳調査前全景

旧・中島古墳東側トレンチ

同左　礫層下のピット

同上　調査後

作業風景

作業風景

調査団

図版65

1

39

11

42

20

30

61

73

図版66

75

101

78

105

81

110

86

115

95

図版67

122

147

123

155

124

159

127

160

135

181

図版68

192

222

195

224

199

229

312

230

218

244

図版69

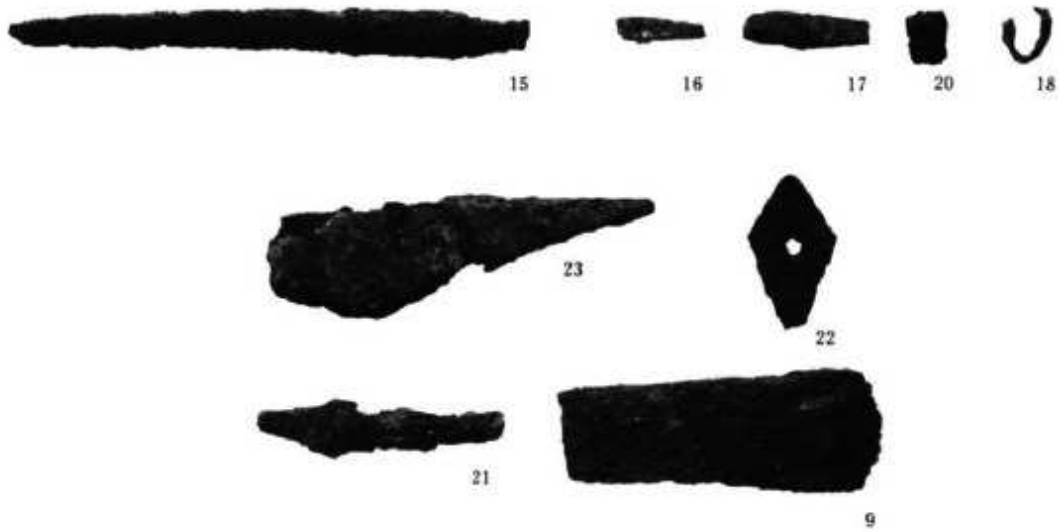
瓦

瓦塔

竪臼

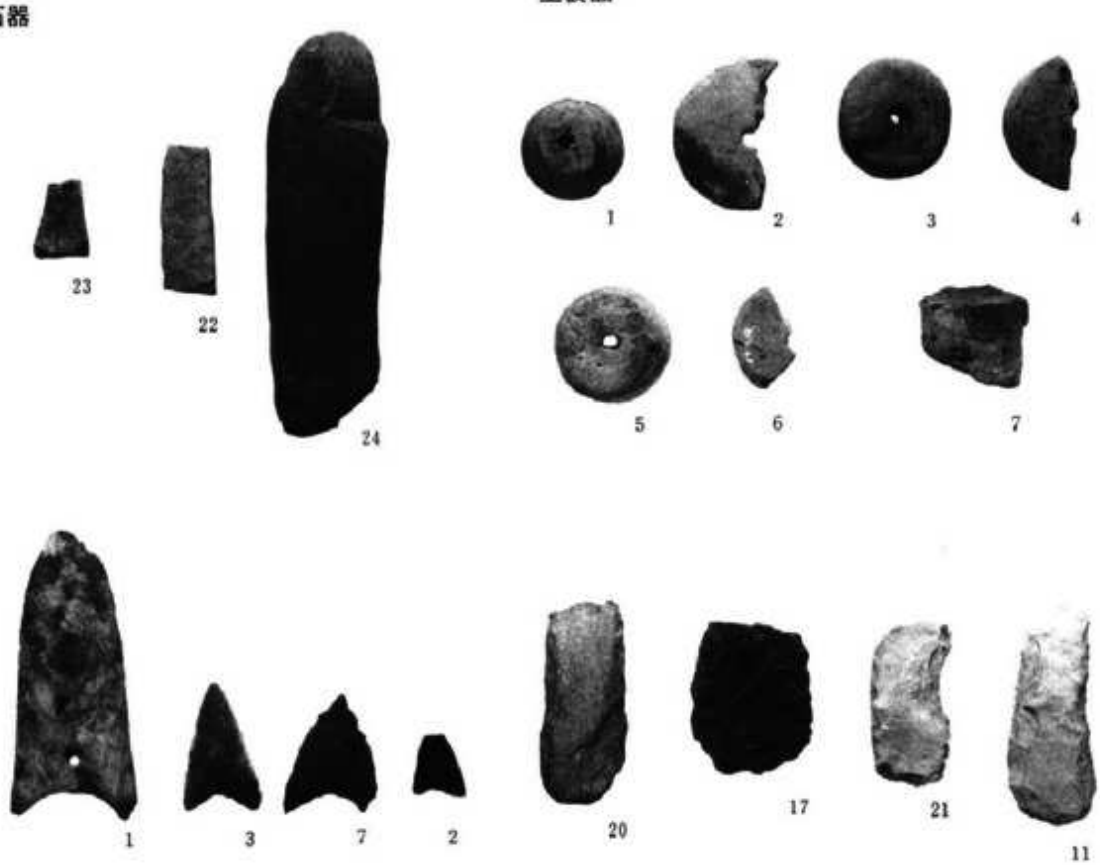
図版70

鉄器



土製品

石器



図版71

岡田町遺跡Ⅱ発掘調査報告書抄録

ふ り が な	まつもとしおかだまちいせききんきゅうはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	松本市岡田町遺跡Ⅱ緊急発掘調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	松本市文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	No.116
編 著 者 名	竹内靖長・村田昇司・三村竜一・森　義直
編 集 機 関	長野県松本市教育委員会（松本市立考古博物館）
所 在 地	〒390　長野県松本市中山3738-1　TEL 0263-86-4710
発 行 年 月 日	平成6(1995)年3月22日　（平成6年度）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 °′″	東 経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
岡田町 （おかだまち）	長野県松本市 （ながのけんまつもとし） 大字岡田	20202	005	36 度 16 分 30 秒	137 度 59 分 00 秒	19920714～ 19921118	8812	運動広場建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
岡田町	集落跡	奈良・平安	竪穴住居址　37基 掘立柱建物址　20棟 土坑　341基 ピット　361基 カマド状特殊遺構　1基 溝址　6条	土器：土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器 土製品：紡錘車 石器：砥石・磨臼 金属製品：刀子・鏃・鎌・斧	奈良・平安時代を主体とした集落址を検出。多数の土器・鉄器等に加え、瓦、硯等の特殊遺物を出土した。

松本市文化財調査報告　No.118
松本市岡田町遺跡II
—緊急発掘調査報告書—
平成7年3月22日　印刷
平成7年3月22日　発行
編集　長野県松本市教育委員会
（松本市立考古博物館）
〒390　長野県松本市中山　3738-1
TEL 0263-86-4710
発行　長野県松本市教育委員会
印刷　アサカワ印刷株式会社